明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可
（毎月一回一日發行）

女子文壇

第四年第七號



明治四十一年五月一日發行



デパートメント・ストアー
三越呉服店
越
和洋
巻莨
シガー
一切
鞄
靴
旅行用
化粧品入
一式
折鞄
舶來
文房具
時計
指輪
寶石類
其他
ブローチ
諸大家ノ繪画陶器漆器
銅器七寶
其他新式ノ日
用食器類一式
呉服
洋服
太物
子ル
セル等
新柄品
香水香油
石鹼白粉
齒磨
口紅
傘
履物



(甲の壹)

女子文壇第四年　五月一日發行

每號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

本欄　一—三

○虹……………原色密刷

▲口繪▼

○各女學校卒業生寫眞

▲府立第一高等女學校▲三輪田高等女學校▲跡見女學校▲共立女子職業學校▲女子美術學校▲青山女學院▲日本女子大學英文科▲立敎女學校▲實踐女學校▲女子工藝學校

○各女學校優等卒業生

▲三輪田高等女學校優等卒業生駒井喜美子▲同中𣘺誠子▲同西川よれ子▲同長田つろ子▲跡見女學校優等卒業生三浦光子



（甲の二）

第七號目次

虹（にじ）



大江原色版部製版

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



有効保證 毛生藥 美人

藥價 小五十錢 大壹圓 特別保險付二圓 送料十錢

の頭髪薄くまゆげはへぎわの惡しき儘一瓶にて發毛さしむる本劑は米國醫科大學教授ドクトル先生が多年苦經驗上調製せし最新化學的作用を有する舶來の毛生藥にして英國醫事新報日ク此ノ如キ治効藥ハ未ダ今世紀迄發見セラレザリシ世界唯一ノ良藥ナリト稱贊セリ）現今世に有りふれの藥學的智識なき山師輩の濫造品と異り男女除毛ヤケドデキモノハツボキリキダ等忽ち發毛せしめ病後の毛生を速にし脱毛を止む眞に速効無比有効無害の保證劑也廿才以上又雜症特別を用よ

女月丸

をまずして月經のなきを憂ふる勿れ

理想的最良藥



改良月さらへ 女月丸

諸嬢姉よ月經閉止 月經滯り月經不順には早く女月丸を服用あれ從來ありふれの藥と異り普く專門博士が學術と實驗とにより發見せられたる最新模範良藥なれば一二劑にて必ず流は二三月の月やく滯下す四五月以上又は血塊には特製分を服用あれ苦痛なく安心に忽まち流經す各專門博士諸君が効能卓絶なりと賞賛せられたるは實に本劑なり平素月經困難下腹はり逆上頭痛眩暈等暫て全治す

藥價 三日卅錢 一劑 六拾錢 二劑 壹圓拾錢 特製四劑 二圓廿錢 送料不要

◎本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の保證藥▲服用者より禮状日々澤山あり速に試よ

發賣本舗 東京京橋東仲通中橋和泉町一番 小宮愛生堂

クイーン白粉（おしろい）

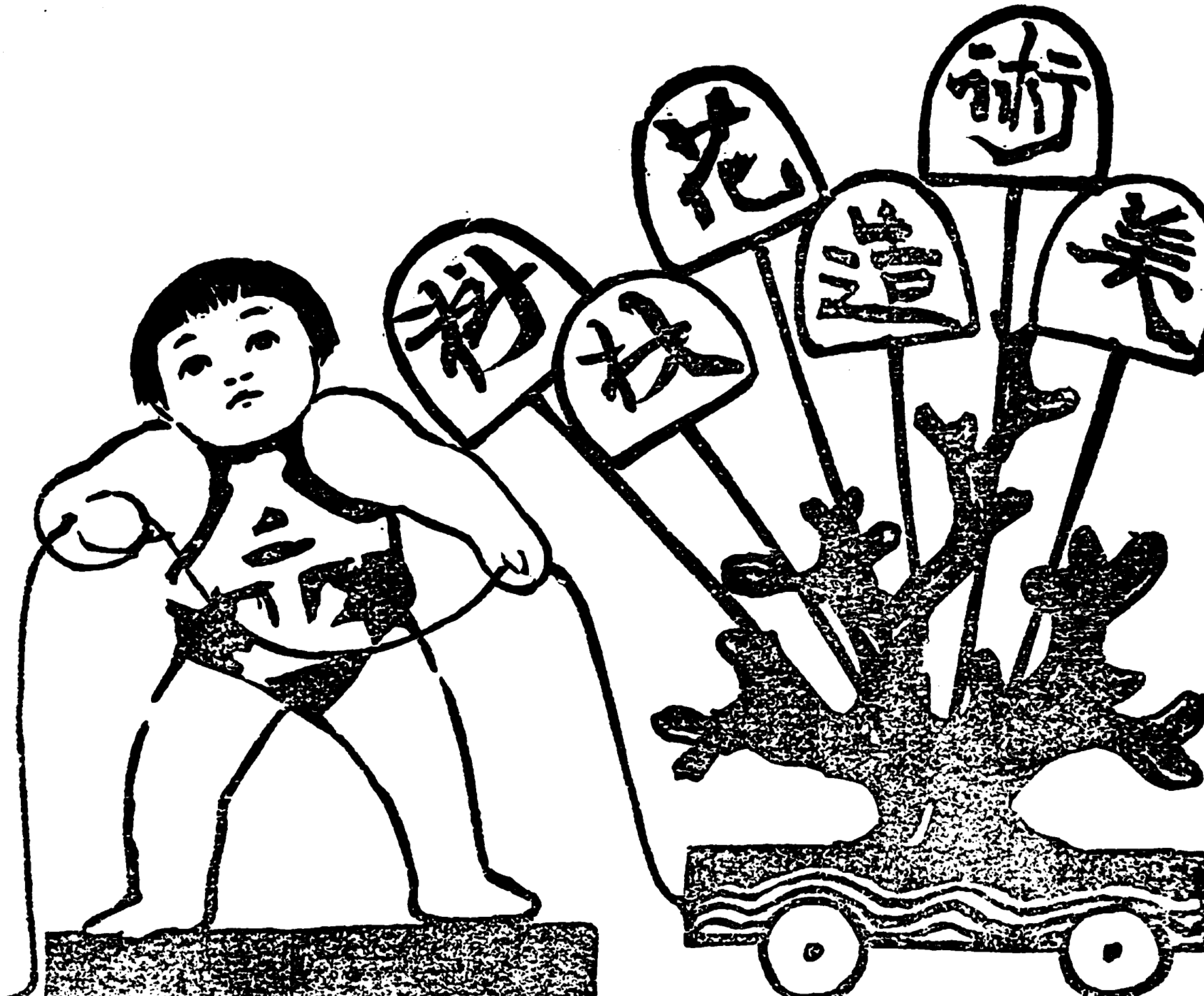
クイーン水

本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧品なり



本舗 東京日本橋新和泉町 三井花陽堂

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



發賣御案内 ◉ 造花用電燈

盛籠用、花輪用、花簪用、枝花用等各種

營業概目。造花半製品。造花用染料。造花用
器具。摘ミ細工材料。金銀モール。模寶石。
電氣用眞線

東京市日本橋區横山町壹丁目十六番地

美術造花材料商 **天野卯兵衛商店**

（特長電話浪花一六四三）（振替貯金口座四九七〇）

營業案内御入用ナレハ此切取御添へ御申越シ被下度候

切取線

縣　郡　町村

（女子文壇）

●精力を增し快美を最大ならしむ

This remed is wonde rfully efficacious for imp otence deficiency of semen, weakness of spermato zoid, nocturnal eission, premature emission, nondevelopment. weoknesse of nerve, and non-pre gnancy.

一時生殖器病界に一新曙光を放てる彼のガッセン氏のエレクトール機械療法にせよブロンセカル氏の臟器療法或はボール氏及びバーベス氏等の神經組織注射療法なれ科學的研究の進歩せる今日に於ては既に**陳腐**の方法に屬し其治効なきは**旭醫學士**に依り公表せられたる如く現代に未だ其良藥なきは最も遺憾とする處にして當製藥所が此にガーデン Garden を發行したるも亦故なきにあらざるなり：：ガーデン Garden は當製藥所主が曩に大學卒業後專ら生殖病學の研究に任じ帝國先輩は勿論歐米**最新學理**殊に博士ゲルハルドシユルグムント氏ツアイスル氏等の研究に基き或は學理に或は實驗に幾多の研究を積み發見せる新藥にして其絶大なる靈効は**高田醫學士**の査定報告或は吉原病院副院長**赤倉**大先生の

男女生殖器新藥發見

實驗報告其他服用者の禮狀殊に歐米に輸出せられ名譽の高評を博しつゝあるに徴し明なるを以て普通賣藥的奇言を臚列せずガーデンの主効は**手淫房事**より起る過度の害**勃起力**減衰**陰萎**萎縮腎虚**夢精**遺精**早漏**精液缺乏精蟲缺乏精蟲衰弱**短少者**神經衰弱**快美**減少不妊娠脊髓勞理解力決斷心缺乏**記憶力**減少考衰無力冷症身體虚弱等に用ひ輕きは一劑乃至二劑重きも三劑乃至五劑にて根治の目的を達せしむ又本劑は劇烈なる強壯藥なれば虚弱家は勿論無病の者と雖ども平素服すれば精神身體生殖器を強壯となして**淫慾**を著しく**發動**せしめ如何なる場合と雖ども身體精神生殖器を衰弱せしむる事なし又本劑には醫學士雨江口述**最近生殖病論**を無代にて附し服用患者に其病理の如何を告げ本劑の絶體根治を期せしむ本書は最近學理により著述す○價一劑二圓八十錢二劑五圓五十錢三劑八圓五劑十三圓送料內八錢清韓台灣卅錢外國卅四錢

日本發行所 東京向島小梅町百八十七番地 **松尾製藥所販賣部**

清國發行所 清國寧波府江北岸 **松尾製藥所販賣部**

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀 **河村愛子**



どもり

聲惡き人返信郵券送附あれば余が全治せしハエル博士の吃音必治療法を敎へ升

東京礫川指ケ谷町卅番地 櫻井

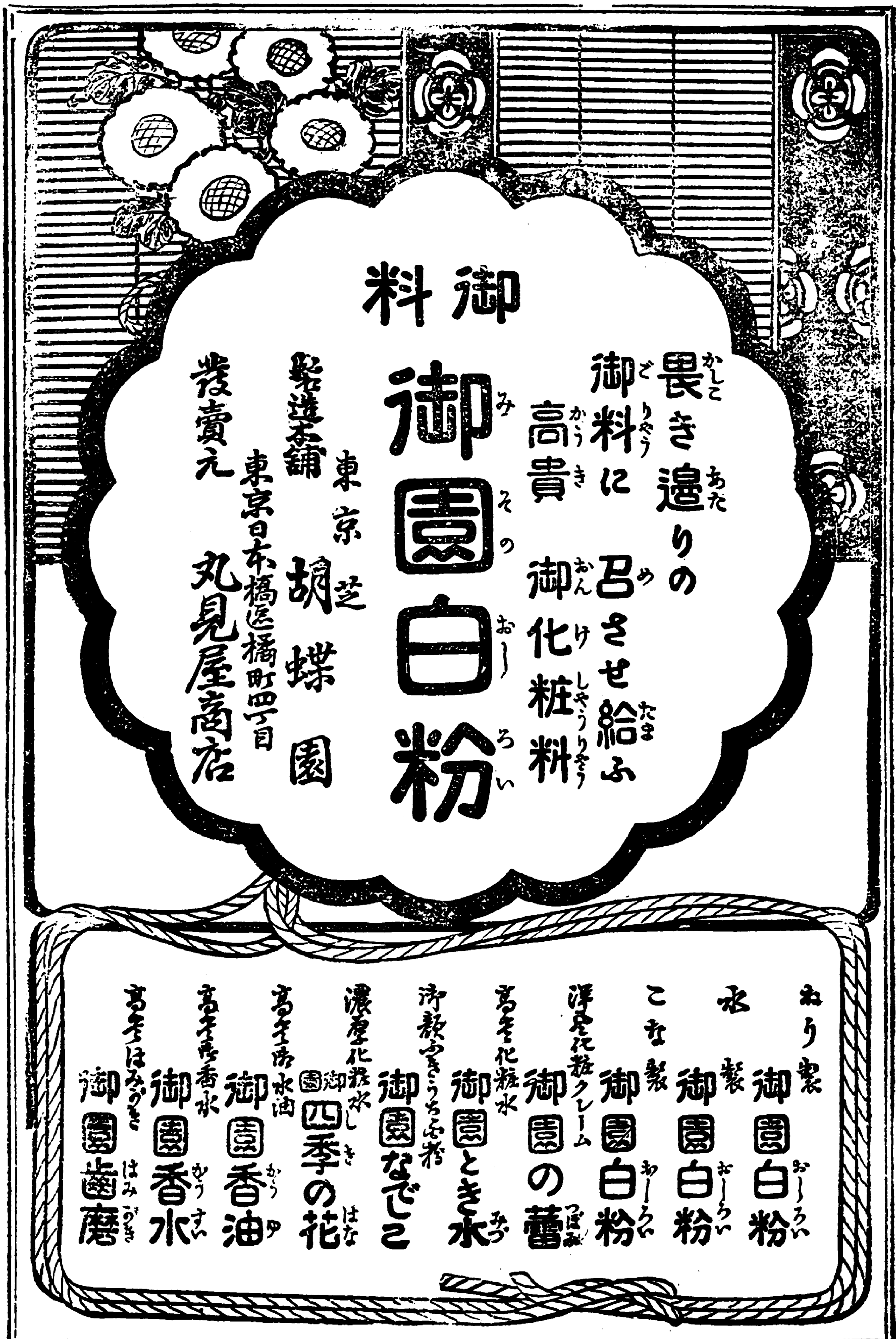
伯爵大原滋 乃木兩閣下題字 醫學士常持閲 弘濟院中南著

肺病全治談

肺病は善良の療法と藥物とに依りて根治し得るは近世學術界の公論也本書は著者全快の實驗より得たる根治的療法を叮嚀に記述せし物一讀再生の効を全ふすべし

○當分の内切手貳錢御送附あれば無代進呈す

◎申込所◎東京市芝區愛宕町二丁目十四番地●弘濟院


御料
畏き邊りの御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝 胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橘町四丁目 丸見屋商店
發賣元
ねり製 御園白粉
水製 御園白粉
こな製 御園白粉
洋式化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
御園なでこ
濃厚化粧水 御園四季の花
高等香水油 御園香油
高等香水 御園香水
高等はみがき 御園歯磨

東京市各女學校本年の卒業生（一）



私立日本女子大學校英文科卒業生



東京府立第一高等女學校卒業生

東京市各女學校本年の卒業生(二)



私立青山女學院
高等普通科卒業生



私立三輪田高等女學校卒業生

東京市各女學校
本年の卒業生（三）



私立立教女學校卒業生



私　立　跡　見　女　學　校　卒　業　生

東京市各女學校本年の卒業生（四）



共立女子職業學校卒業生



私立女子美術學校卒業生

大日本淑女學會

▲御自分のお宅に居って高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によって獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

◎詳しい規則書は申越次第差上げます

◎東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

世界唯一 麻病消渇の根治新藥

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**麻病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價 壹劑壹圓拾錢 特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割増しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

色白特効 ペーアス石鹼

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白**くしたる特効の一二を掲げん、

粗糙質を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む）

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

癩病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の**峻烈**確乎不拔の**最新發見顯著**百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して**病根を斷絶**し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効の新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事

●以上二藥 專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

眞正極秘 粹珍書案内

望の人郵券四錢送れば直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粹士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黑門町廿番地 **東雲堂書店**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

文章速成の最新秘書

文壇の花

小説もあり文章もあり詩歌もあり文學一通りのものは揃つてゐます。皆之れ花の如き女子が大懸賞の應募熱心に作られたるもの二百餘頁に網羅す。眞に文章速成の最新良書といふべし

目次は次の如し

▲小說▲お伽噺▲美文▲論文▲日記文▲書簡文▲新體詩▲短文▲和歌▲俳句▲繪畫

附錄

○瀬沼夏葉女史○田山花袋君○與謝野晶子女史○片山天弦君○高濱虚子君○三谷蘆華君○水野葉舟君○三木露風君○武島文學士○中村文學士○巖谷小波君○佐々木信綱君（以上短篇新作）

大好評

製本既成發賣

紙數菊判二百五十頁

低廉無比 定價金貳拾錢

郵稅壹錢五厘

口繪

入賞作家肖像　寫眞版四頁光澤紙色刷

睡蓮（光澤紙刷）　石版着色密刷

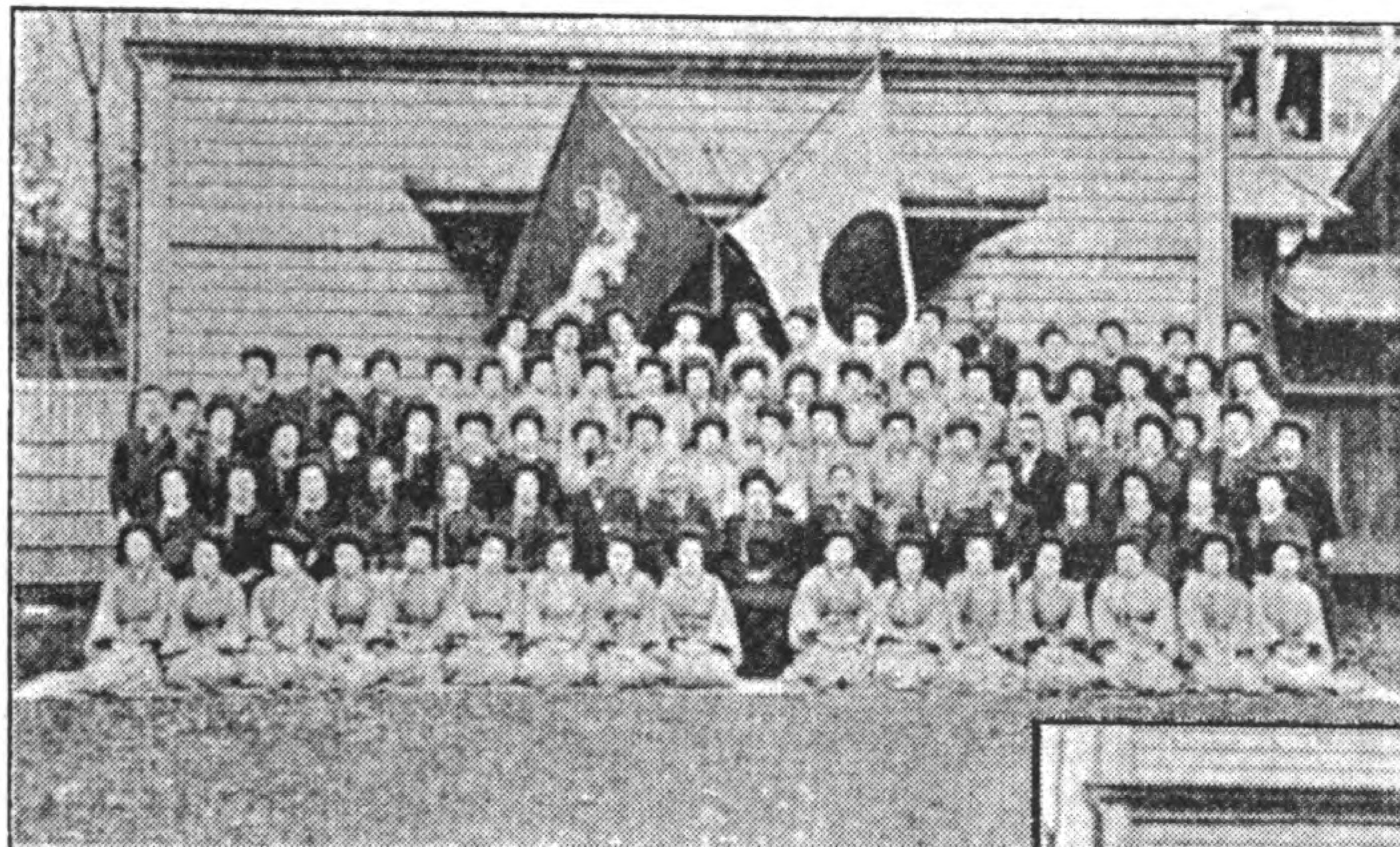
花苑　原色版密刷

出版元 東京市京橋區大鋸町十一、十二

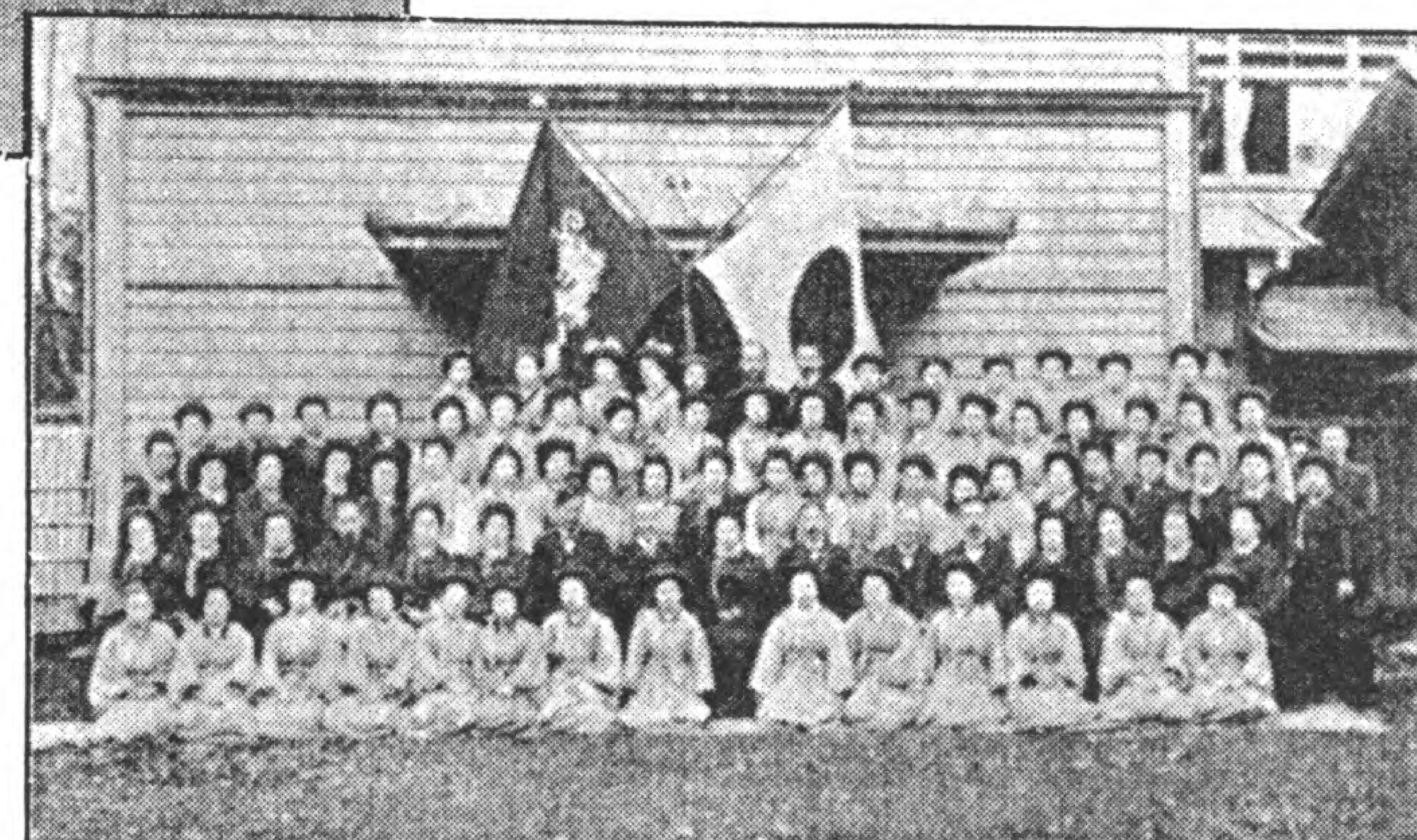
女子文壇社（振替口座壹七貳九番）

特約賣捌所 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂 其他取次販賣は全國到る處雜誌書店

東京市各女學校
本年の卒業生（五）



私立實踐女學校卒業生



私立女子工藝學校卒業生

各女學校本年の優等卒業生

三輪田高等女學校　中岡誠子　　三輪田高等女學校　駒井喜美子



三輪田高等女學校　西川よね子

三輪田高等女學校　長田つる子　　跡見女學校　三浦みつ子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

有効保険 前代未發

秘傳奇術

(目録大要)神經衰弱の新療法◎陰莖病を必治する新法◎陰門の爛れを治する法◎消渴を必治する法●頑癬の必治法◎人造鮮香の製法◎上等香水製法●香袋製法◎美顔クリーム製造法◎音聲を清良にする法◎齒痛即治藥製法●髮の脫落するを止むる法◎化粧石鹸製法◎西洋白粉製法◎毛髮必生法●腋汗治法◎白髮を染る法◎毛髮の光澤を美にする新法◎齒磨粉製法●西洋梳油製造新法◎にきび即治法◎ほくろを落す法◎ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法◎羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法◎鼠を驅除する新法◎氷を即時製造する法●百年長壽の奇法◎生涯病に罹らざる奇法◎人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法◎百日眠らず[illegible]へざる法◎拔毛劑新法◎[illegible]入たる者に答へしむる法◎禿頭病必治法◎[illegible]入りたる法女の心中を知る法◎白なまず即治法●五十の[illegible]を二八の娘に變ずる法◎脚氣病必治法◎妖怪變化を見顯はす神術◎人體不死の奇法◎千里一足飛行の神術◎盗人を見顯はす神術●女に惚れらるゝ藥法◎硬き毛髮を柔軟にする法◎思ふ女をなびかす藥法◎堅き女の氣を狂はす藥法◎陰莖を長大にする藥法●そばかす必治法◎女を閨屋にて泣す神藥◎夢に戀人と語る秘術◎見染し女を手に入れる神法◎待人來る神術◎一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法◎閨中の秘藥◎即座に[illegible]特効藥●避食の仙術◎神速に精力を強む法◎即座陰身術●人を眠らす法即ち催眠術◎顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●欲情を抑制する秘法◎色慾なき女に情を發せしむる法◎記臆力を増進する法●女孕みの仙術◎處女膜の有無を知る法◎淫婦看破の奇術◎無字夜光の奇術●老人終身皺取りの奇術◎腋臭を治する法◎色を白くする内服劑新法◎發丹の藥法◎宿醉速治法◎疥癬病の藥法◎生たる魚を遠國へ送る法◎[illegible]喘を治する法◎[illegible]流を治する法◎荒肌を直す秘法◎味噌の損じたるを直す法◎痳病の治法◎月經の不順を治する法◎疝氣の妙劑◎齒痛を治する法◎陰門の臭氣を治する法◎陰門の虱を去る法◎にきびを去る最新法◎頭髮を長くする法◎毛生藥の最新法◎梅毒必治の新法◎便毒必治の新法◎下疳を治する奇法◎胃病の新劑◎百日咳の妙法◎肺病必治の新藥◎中風豫防の新法◎凍瘡の妙法◎衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法◎シヤクリ即治法◎聲を能くする新術◎白髮豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法◎寢小便を治する秘法◎頭痛を治する法●耳だれを治する法◎いぼを取る法◎あざを拔く新法◎乳の出る妙藥◎陰部の[illegible]疥を治する法●虎列拉病療治簡易法◎梅毒豫防の奇法◎思ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數◎病氣前知の奇術◎男女全身の色を白くし且つ艶美ならしむる法◎藥酒を製造する法◎[illegible]を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法◎夏帽子洗濯新法◎疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法▲以下數拾法略す

(合計壹百卅九法あり)着金即刻送本す

全壹册正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

專賣元 東京神田五軒町拾九番地 日新館商店

生殖機病特効新劑……(獨逸新輸入藥)

內服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共壹圓九十錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授スヒーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病**(陽物無力)**腎虛神經衰弱**遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖虛弱手淫に起因する諸病早老者精液精蟲、缺乏不姙娠、冷症**快美**減少及び**短小者**等に用ひ輕症は四五劑重症は八九劑慢性難症は拾參劑にて根治の目的を達せしむるに天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力を增進**し生殖器を強健に**勃興**して**淫慾**を著しく**發動**せしめ人生の最大**快樂**を得んと望む者は早く試[illegible]偉大なる特効頓に**如電光**世にありふれたる誇大奇言を臚列する內地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

一手輸入 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は**廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼ**は**拾日**目に必ず美麗に除去すること**保險附**

新發明の藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす)着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



低廉。無敵。每號大好評

▲發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地
女子文壇社（振替口座第壹七貳九番）

▲女子文壇は何處の雜誌店でも賣つて居ます

『春日影』は發行忽ち本社は賣切れたり

第四卷第壹號　目次

一月一日發兌　百六十頁　此分に限り定價拾貳錢

口繪　泰西名畫　愛吟　光澤紙原色密刷　寫眞　閑院宮殿下の家庭、誌友肖像外繪手本

○新年の辭……記者
○名流婦人の處女時代▲三輪田眞佐子▲跡見花蹊▲鳩山春子▲三宅花圃▲大塚楠緒子▲與謝野晶子▲藤井環子▲羽仁もと子▲棚原蕙園▲鶯山獨生諸女史の談片
佐藤静子
○英文……河井道子
○懸賞新作詩文第一回披露▲新年▲指太郎（其二）満紙に溢る
（附錄）
○死後までも……小栗風葉
○女裝……德田秋聲
○角……岡田八千代
○非投者……佐野天聲
○乘合馬車……窪田空穗
（各編とも插畫入）

第四卷第二號　目次

二月壹日發兌　定價金拾錢　送料壹錢

口繪　泰西名畫　花苑　光澤紙原色密刷　寫眞　小笠原女禮式作法其他誌友肖像外繪手本數葉

○自分の價値……記者
○名流婦人の處女時代▲津田延子▲嘉悦孝子女史の談片
○遠人……橫瀨夜雨
○冬の旅……中村枯林
○彼如何にせし（小說）……文學士　齋藤弔花
○新進作家一口評……記者
○英文……河井道子
○懸賞新作詩文第二回披露▲冬▲金言▲六羽の白鳥……滿紙に溢る

第四卷第三號

春日影　二月十五日定期增刊　定價金拾錢送料壹錢

第四卷第四號　目次

三月一日發兌　定價金拾錢　送料壹錢

口繪　バンジー　花束　光澤紙原色密刷　寫眞　光榮ある閨秀歌人と誌友肖像外繪手本

○沒書嘆……記者
○雪の歸路（小說）……江見水蔭
○書簡文のはなし……武島羽衣
○名流婦人の處女時代▲棚橋絢子▲瀨沼夏葉▲岡田八千代女史の談片
○愁の曲（詩）……文學士　北原白秋
○文學雜誌一口評……記者
○英文▲神の閨▲六羽の白鳥▲公德……河井道子
○懸賞新作詩文第四回披露……滿紙に溢る

第四卷第五號　目次

四月一日發兌　定價金拾錢　送料壹錢

口繪　八重櫻　光澤紙原色密刷　寫眞　小笠原女禮式其他誌友寫眞外繪手本數葉

○時候で言へば四月……記者
○名流婦人女處の時代▲佐々木雪子▲櫻井ちか子女史の談片
○手の上の水……與謝野晶子
○晩餐會……沼波瓊音
○海の水……吉田撫水
○從妹……文學士　前田夕暮
○投稿笑話……記者
○英文▲ルシー▲六羽の白鳥▲公共心……河井道子
○懸賞新作詩文第五回披露……滿紙に溢る

▲各號とも本社に取揃ひあり最寄雜誌店に無くば直接御申越の上愛讀を願ひます

坐ながら手數せず安心して買物の出來る法



輕便買物案内

今般本社にては愛讀諸孃の御便利を計り東京市内に於て發賣する書籍、雜誌、文房具、化粧品、西洋小間物、玩具其他有らゆる百般の物品を手數料申受けず總て定價の五分引にて御用達致しますから遠慮なく多少に拘らず左記の注文心得により御申込を願ます

申込心得

○注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向を始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい

▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向を明細に記載あれば別に手紙又はヘがキにて申越すには及びません

○送金

▲必ず注文と同時に定價の五分引に相當する金額と郵便小包送料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送つて下さい

○見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ精選買入れの上御送り致します

○送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便、普通運送便にて送り屆けます

○問合と宛所

▲買入依托に關する問合せは返信用切手封入又は往復ヘガキに限ります

▲申込は總て「女子文壇社買物用達部」宛にして下さい

▲右の外諸學校の校友會誌を始め一般の印刷物及木板、寫眞版の製版をも迅速鮮明に御引受け可申上候

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
（郵便振替貯金口座第壹七貳九番）
女子文壇社買物用達部
（電話本局六百七番）

紀念發賣は空前の大安賣

小森松風著

美文作法

全一册洋裝大判並製　正價四拾錢

廉賣金貳拾錢　郵稅四錢

△中央新聞評　本書は總論に於て美文の起原名稱種類を説明して抒事文、抒情文、抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小説との關係を述べ更に美文飜譯法漢文の素養讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳説したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

小森松風著

言文一致文範

全一册洋裝大判並製　正價四拾錢

廉賣金貳拾錢　郵稅四錢

△中央新聞評　言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論説、抒事、抒景、日記等數十編を示したり、斯道研究者の歡迎を受くるものならん

中村報知新聞記者著

實地精查女子遊學便覽

全一册洋裝校長肖像入並製　正價三拾錢

廉賣金五拾錢　郵稅四錢

△萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を揭ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を揭げたるものに比すれば、調查は善く行屆けり、尙ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を鼓吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

鈴木秋風著

小説美文　朝ばれ

全一册本綴彩色畫入美裝　正價四拾五錢

廉賣金貳拾五錢　郵稅四錢

「萬朝報」曰く　どれ是れも極めて溫雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

「都新聞」曰く　いづれも短篇の小說ながら、著者が所謂寂寞の歷史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小說で何れも未だ浮世の荒波にもまれない靑春の女の幽情を寫したものです。

各書とも殘本僅少なり賣切れると增刷しませんから、早く御愛讀を願ます。

これほど安い本は天下にありません

本社創業滿三年紀念

特賣廣告

發兌元

東京市京橋區大鋸町十、十一

振替貯金口座　第一七二九番

女子文壇社

河井醉茗著　詩と美文　玉むし　價六十錢

諸大家選評　懸賞文集　第一　價廿五錢

右兩書とも發行元は賣切れに付當分增刷いたさず候

第二懸賞文集の特賣廣告は別項にあり

健全なる精神は健全なる頭腦に宿るとは、萬古不動の明言なり

レーベン

レーベンは臭素加里を主劑としたるにあらず故に服用に當りて其量を增減するの要なく且つ心臟を害することなし

レーベンは神經系統に鎭靜作用を呈するが故に神經性諸病に最も適良なものとす

レーベンは鎭痙藥特に婦人の鎭痙藥としてヒステリー症に對し特異の効を奏す

レーベンは神經性不眠症酒客譫忘に催眠藥となり殊に恐るべき男女情慾の興奮を佳良にするに偉大の効を奏し健胃作用を有する等綿密なる注意を拂ひたる藥物なり

要するにレーベンは腦神經衰弱ヒステリー症に對し最も卓絶なる効力を具備せる良藥にして現世に於て殆んど間然するところなき絶好の藥物たるを斷言するに躊躇せざるなり

從五位勳三等　醫學士　森　友道
海軍軍醫少監　從五位　日向次作
腦神經系統專門　醫學士　森　識

東洋唯一時事新報を初め報知新聞、毎日電報、國民新聞、都新聞、日本、東亞新報、東京藥事、其他帝都の大新聞を初め各地の新聞は筆を揃へて社會に紹介せり、曰く、近時社會の狀態一變し精神的智識の競爭時代とはなりぬ、而して腦神經衰弱患者の增加せるは著しき事實にして殊に現時學生の大半は輕微ながらも本病患者なり、醫學士常持爲治氏は本病々理の蘊奥を極め山海大氣の利用に依る自然療法の必要を稱へ終にレーベンなる新藥を創製せられ、斯業界の有力家(中南)の手に依りて社會に發表せらる云々と如何にレーベンが社會の各階級に偉大なる信用を博しつゝあるかを知るべし

若し本劑の內容を知らんと欲せば送料二錢送れ、說明書と養生法とを進上

天然療法創始者
醫學士 常持爲治先生發明
腦神經衰弱ヒステリー症良劑



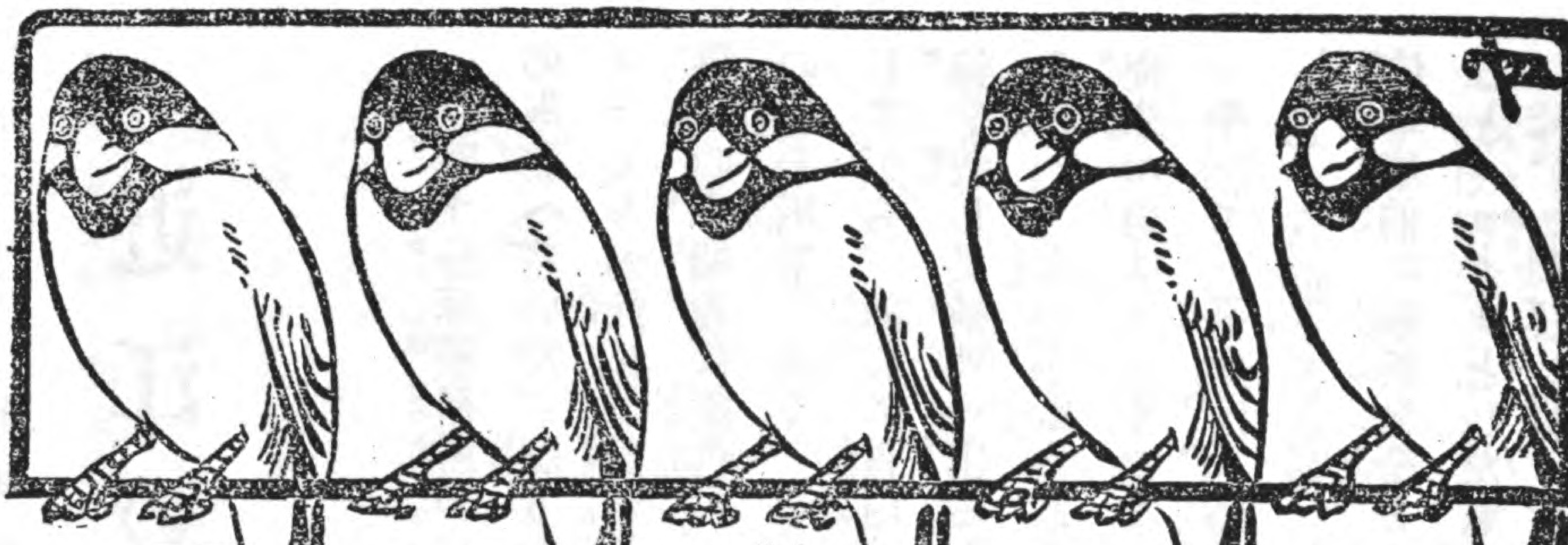
Sadataro Nakaminami, Tokyo, Japan.
東京　弘濟藥院　中南定太郎鑑製

藥効　腦神經衰弱ヒステリー　腦充血、陰萎、遺精、貧血
(等の腦病神經衰弱諸症の最良最新發見劑也

藥價	
八百錠入	五圓五拾錢
四百錠入	參圓
二百錠入	壹圓六拾錢
壹百錠入	八拾五錢
全國無郵税	

東京芝區愛宕町二丁目十四番地
弘濟藥院藥品部
電話新橋三〇八九番
貯金口座七七七七番

レーベンは醫界空前の成功　近世絶好の腦神經衰弱療法



女子文壇四年七號

明治四十一年五月一日發行

主義と言ふ語

此頃自然主義と云ふ語が方々で用ゐられますが、主義と言ふ語は、一つの流れと言ふやうな事で、多くの人の頭脳の中を流れてゐる眼に見えぬ河であります。其當時々々の人間の思想と云ふものは、大體に於て一致するものです、其一致した思想を言ひ表はす時に主義と言ふ語を用ゐるのです、思想界には必要な語です、全く思想界の語であつて、行爲の語に何々主義と云ふやうな事を唱へるのは劣等です、主義は高いものとして見なければなりません、世間では誤解して、主義を實行をしやうとするから矛盾や衝突が起る、思想界と實行界と一致するには未だ年代があります、世間の人が悉く、最も善い、最も高い主義をのみこんでゐて、其通り實行すれば宜しいけれど、人間には未だ根本的に、習慣的に、野性の血が通ふて居ます、不善い事も考へれば、横着なこともします、然う云ふ時に主義を實行しやうとしても、屹度自分勝手に引つけられて了ひます。個人々々お互ひに人間を革新するのが第一番の急務で、主義が何うだから斯うだからとて其に拘泥む必要はありません、主義は變つてゆくものです、五年の後に變らなければ、十年の後には變ります、只人間の革新、人間が美くしくならう、善くならうと云ふ心持だけは、永久に變るものではありません。

五月（大）
日曜　三日　十日　十七日　廿四日　卅一日
八十八夜　二日
端午　五日
躑躅、藤、牡丹、開く

近江の宿

中村星湖

　六時十分新橋發神戸直行の夜汽車は翌朝七時に近江の馬塲へ着いた。眠りの足らぬ體をふらりとプラットフォームへ卸して田邊齊は橋を渡ッた。鼠の勝つた縞羅紗の中間着に藍色のインバネスをはふッて、二十五の春の眉毛は濃く、その尻昴りなのが一種の劍氣を示しながら、額には青白の弱々しい色が漂ッて居る。切符を渡して搆外へ出ると「馬塲停車塲より八丁、車代八錢」と友の手紙にあつた事を思ッて車夫を探した。夜來の雨はまだやまない。

　やがて一臺のぼろ俥を見付けて「錦まで。」と云ふと、「え、錦どすか。」と彈機のゆるんだ幌を掛ける。停車塲前の傾斜を勢よく曳降して直ぐ其所の右角を曲ると、ヨタリとした氣味で車夫はたゞ歩いて行く。道は平坦に眞直に北へ付いて居る。齊はまた眠くなつた。

「旦那はん錦は何處どすえ?」

　齊ははッとして、

「うむ?……何か云ッたか。」

「番地はえ?」

「あ、十九だ、十九番地のな、杉野と云ふんだ。」

「杉野? おちやあれどッしやろ、荒物屋を爲とりなはる?」

「む、何屋をしとるか、そりや知らん。ま兎も角お前の知ッとる家までやッて呉れ。」

　車夫は心得たとやうに小走りに走り出した。錦は膳所の一部である。その十九番地の通りの南から來て右側のと在る家の前で車夫は梶棒を卸した。

「こゝか」と俥から降りた齊の目前には大きな古家が壓するやうに立つて居る。入口の柱には「杉野重造」と紙札が貼ッてある。いか樣店屋らしい表搆ながらまだ雨戸は閉てた儘て、僅に障子になつてる戸口から首を入れて、こちらに下田と云ふ方が居りますかと大きな聲て尋ねると、暗い奥から、

「えゝ居やはります。」
「私は田邊と申す者ですが。」
「は…………さアどうぞお入りやす。」

さう云つたきり別に取次ぐ氣色もない。齊は何やら照れ氣味て、障子を少し開けた儘戸外に立つた。ふと車代を渡さなんだ事に氣が付いて、それを拂つて車夫を歸してからまた暫く佇んだ。下田はどうしたのかと思ひながら旅行鞄を軒石の上へ置いてぐるりと四邊を見廻した。狹い、さうして古い町だ。今曉米原あたりから目に付いた山の姿や水の樣や、しよぼ〳〵雨に煙つたやうな間から黑い屋根と白い壁と、一瞥の始めから「古りたる國」と云ふ感じを起させた。――ほんとに古い國だ、古い町だ、こゝもそれ白壁が多い、瓦葺の屋根には草が枯れて居る。壁の張工合、窓の切り樣、それから柱や格子や板壁を安ッぽい朱や澁で塗ッてある有樣、何だか支那へでも行ッた心地がする。

斯うして物の十五分間も。有繋にモダ〳〵せぬても無いが、眠い加減か、齊は周圍と一緒にノロリとして了つた。

「や失禮。」と云ふ莞爾やかな友の顏を見た時は嬉しかッたが、丁度大きな欠伸をした時なので極りが惡かッた。鞄は下田が持ッて呉れる、續いて入ると店頭の土間と勝手の土間との間に、も一つ押戸がある。それを潜ると上り框で、框の向ふ盡頭に黑塗の竈が二つ並んで、其所で身長の高い老女が柴を折り焚べて居た。家内はまだ夜の氣配だ。竈の火の赤いのと裏戸口から忍び込む曉の色の外は薄暗い。

「どうも餘り早過ぎて失敬しました。」
「いや、僕が寢坊したもんで…………」

齊は靴を脫いて、圖拔けて高い框を上ッて、八疊許の次の間を通ッて奧座敷――そこが下田の居間と見えて、蘇武を描いた大幅の掛圖の垂れた床の間の前に机を据ゑ書物を積んである――そこへ入ると、雨戸も障子も開け拂ッて、新しい花毛氈の傍に火の無い眞鍮の古火鉢を置いてある。

座に着いて先づ一別以來の挨拶から、齊は、湖畔の

春景色を見に來ぬかと下田が誘つて吳れた手紙は渡しに船てあッた事、今關係して居る雜誌の編輯も濟んだので京都から奈良あたりまで遊ぶ積りでやッて來た事などを一と通り述べて、さうして重たい口を噤むだ。

「實はお迎ひに出る積であつたが、昨夜は敎員同志の宴會があつて、それが二時頃までだッたので、すッかり寢坊しちまッて。」と云ふ下田は膳所の中學の敎諭である。

「なにお迎ひなど仰山の事をされると却ッて僕が困る、それぢや皇太子殿下の御來遊と云ふ格になッちまうからね。」と齊は一寸似合はぬ洒落を云ッて、敷島の袋を取出して一本拔いた。火鉢を見て、ポケットを探ッて、さうしてあたりを見た。

戶外にはショボ〳〵雨が降ッて居る。松のくねッたのと梅の古木——花はすがれて居た——と、熊笹の小藪のある內庭は、大きな土藏で限られて居る。土藏の壁は所々缺け落ちて、塗り込んだ古繩が五六本ダラリと垂れて居る。笹藪の中には腰の高い石の手洗盤がぬッと出て、その上に古ッ垂れの手拭が矢張ダラリと垂れて居る。

「君、實に靜かだねえ！」

「靜か？　あゝ靜かだらう。」と下田は答へたが、矢張眠りの足ぬ顏の色が惡い。もとから淺黑い細面であッた。然しよく見ると、頰の邊が少し丸味を帶びて、薄すら生やしかけた口髭と、だるいやうな眼元とが可愛らしい。

「一寸失敬します、」と下田は急に立ち上ッて、「えゝと、水を取るから君顏を洗ッて吳れ給へ。」

「あゝ。」と齊は卷煙草を揉んで居る。

「あ、火も今起します。」

下田が去ッて暫くすると、老女が十能へ二つ許小な炭火を入れて持つて來た。ビスケットの空鑵らしい炭箱を机の側から引寄せて火鉢へつぐ。

「えゝ私は下田君の友人ですが。

「あ、さうですか。」と屈んで炭火を吹いて居た顏を上げて、「昨日先生がそないなお話をなはりまいた。先生

もお獨てすしなア、我家でも行屆きまへんが、おゆるりと、どうぞ。」

「は、有難う。」

老女――と云ッてまだ五十二三、頬も豐かて、顏色も白い。紺木綿の上ッ張りを着て居る。

ザブリと音をさせて、內庭では、下田がバケツて一つ手洗盤へ水を入れる。

「あちらへ水を取ッて置いたから君……僕一寸出て來ますから。」

「あ、有難う。」

旅の用意は鞄にある。鞄を開けて楊子と齒磨粉とタオルとを取出して、次手に土產の帙入の『虞美人艸』を机の上へ載せて座を起ッた。そして奧座敷を出るともう店頭も開け放ッて、矢張暗いながらも勝手の樣子は解る。爐端には頭の禿げた六十許の頑丈の老爺が坐つて其側て十三四の女の兒が何かして居る。齊は楊子を使ひながら默ッて土間へ降りて、誰のとも知れぬ下駄を一寸沓下の足へ突ッかけて竈の前を通ッて裏口から出た。

其所は丁度土藏の前て、傾いた土塀て半ば圍まれて居るが可成に廣い。土藏は物置同然て、色々な古い材木や、百姓の道具や、腐ッたやうな俵だの蓆だのがゴタゴタと積んである。土塀の切れ目は割竹て垣を結ッて、それに添ッて高い桐の木が五六本、枝頭に紫の芽を吹いて雨に濡れて立ッて居る。その下へはまた鐵線網を張ッて鷄を三四羽放してある。鳥糞が所々に白く雨に叩かれて、ポイ〳〵と萠え始めた綠の若草が黑い柔かい土に春を點じて居る。鷄冠の紅色は網の目を透して、ユタリと動き、ユタリと靜まる。折々クゥ〳〵と喉を鳴らすも懷かしい。

古井戸でも埋めたのか、庭の眞中に四角に陷込んだ凹所があッて、其所には濁ッた水が溜ッて、その一端に、脚のある手洗盥が置いてある。それて齊は顏を洗ッた。氣分も淸々とする。と戸外て例のショボ〳〵雨に顏を打たせるのが一層心地好い。家內へ入ると暗いのが莫迦に氣になる。人が來て頻りと爺さんと話込ん

て居る。こッそりと奥座敷へ戻ると其時はもう下田も歸ッて居た。

「どうも田舍だもんだて食べる物も無くて氣の毒だ。」と茶を汲みながら下田が云ふ。

「なに、僕は甘い物を喰ひたさに來たんぢやない。そんな心配をされると困る。……あの活動の烈しい東京などから來て見ると、かうがッかりする程靜かだ。これが僕の望みさ。休息！　この味は、まア何とも形容が出來んね。」

「然しな君、かう云ふ田園生活も好いけれど、そりや精々一週間か十日さ。二年三年とは、ま、若い者には到底續けられないな。」

「さうか知らん。」

「君等があゝ云ふ生きた社會で盛んに活動して居る事を思ふともう堪らなくなる。」

「はゝ活動？　活動だか何だか、君、たゞパンの爲に齷齪して、さうして死ぬんだ。そりや研究の便宜とか何とか云ふものはあるがね、實は君、都會生活なんてものは忙しいと云ふ以外にはナッシングだぜ。始終追ひ立てられ追ひたてられして、靜かに物を觀る暇もない、あゝ云ふのが活動なら活動なんて事は無くてもいい。事業だの糞だのッて金箔をつけた所で、高が人間のする事だ、知れたもんだよ。田舍に埋もれると思へば心細い事もあらうが、觀ずればだね、都會に浮かれたッて……」

齊は友を慰める積もあッたが、睡氣がすッかりとれたので、殆んど不用意の言葉に油が乘ッて滅茶苦茶に喋り出した。洋服の胸のボタンを外して、あぐらをかいて、小柄な體を斜に左手を疊に突きながら、折々眉を昂げたり眼鏡を光らしたりする。

「ま、周圍は斯う太平無事だし、つひ氣が付かずに一緒になッて了ッて碌な勉強は出來ないが、東京などよりは金は幾らか餘分に殘る、少し金でも溜めたら出たいと思ふ。」と下田は淋しい笑を漏した。

勝手では頻りに「あんたはん。」とか「さうぢやおまへんか。」とか云ふ柔かい調子が繰り返される。

「山は皆臥て居るね、建物は古く、言葉は懐しい。これから西京へ掛けてずッとかうだらうな。」と齊が云ふ。

「はゝ言葉は直ぐ誰にもフレキシブルの感じを與へると見える。けれども人は餘り懐しくないよ。殊に此地の氣風は宜しくない。」と所謂近江氣質を下田が話し出した時、「先生お辨當」と勝手から知らせがある。下田は起ッてその辨當を運び込む。

「君、わざ〳〵別仕込は恐れ入る、よして呉れゝばいいに。」

「なに別と云ふ譯ではないさ。始終辨當屋から取るのさ。」と膳を並べながら、「近江人と云ふ奴は君勘定高くてね、そりやこすいんだよ、例がこの膳所などでも貸間はするが賄はせんのだ。……あゝ面倒臭いからてもあるが、儲かりさえすりや何でもやるがね、すべて金さ。」

聲が大きいので齊はハラ〳〵した。

「はゝ何處もさうだらう。金の世の中と云ふからね……でも矢張田舎は田舎だ」と聲を落して、「あの爐端に居る爺さんが此家の主人かい……ふむ、一寸質朴らしく見受けた。」

「あゝ默ッては居るがなか〳〵拔け目のない爺さんて、われ〳〵にも折々説法するよ。經濟が拙いッてな。」

「それから小さな女の兒が居るな、あれは爺さんの子か……ふむ。」と齊は今更らしくあたりを見廻して、「何やら由緒ありげの家だね、暗い事は暗いがよく見ると立派な建物だ。昔は何百石か取ッたと云ふんだらう。面白いな、老人夫婦がその昔の榮華の殘骸に住んで一人の少女を育てゝ居る。一寸小説のやうだ。」と獨り悦に入る。「あれだけで總てか。」

「や、まだある。總領は矢張東京へ出て遞信省か何かに勤めて居る。一度失敗したさうだが何でも高等文官試驗をパッスする氣ださうだ。下が三人女です。一番の姉は小學校の敎師をして居る。次は、これは高等女學校へ行ッて居たが去年僕が勸めて師範の女子部へ入れさせた、皆學問の質は好いんだよ。あの小さいのが

あれても高等女學校の一年なんだ。二人の姉も明日あたりは休みで歸るだらう。」

「あ然うか、爺さん仲々敎育には熱心と見えるな。」

「あゝ、あれて膳所の町役場へ出て居る。」

こんな談話が食事の間に取り交はされた。

齊が厠へ起つと、近頃餘り使はんから掃除もしてないと云ひわけする。なる程、戸の棧も壞れて蝶鉸などは赤錆に錆びて居る。歸りにふと見ると廊下の壁には、下田のだらう汚れたヅボン下が吊り下ッて、戸袋の陰にはビールの空壜が四五本轉がッて、そこへビショビショと雨漏がする。

其日の午後雨があがッたので、齊は下田に案内して貰ッて、汽船て、今は監獄の膳所の城址や、松の疎な粟津の田圃や、葦の枯れた矢走の濱や、さては瀨多の唐橋や、石山や、石山では船を上ッて、紫式部の源氏の間などを見た。更に大津行の汽船で湖上を横る時、遙に右に膽吹の紫微を望み、左に比良山の殘雪の水に映るを見た。大津ては古い宿場の樣子から三井寺の巨鐘も見た。薄暮、錦へ引返すと、上の娘が二人共戻ッて居た。

おなじ家とは云ふ條、食事も何も別なので、すいこ、いとした下宿生活と變らない。でも勝手は人が増えた爲に非常に賑はしい。笑聲もする、無駄話も聞える。「お母はんあのなア。」と云ふやうな飾り氣のない聲、「さうどすじやろ。」と云ふやうな野太い聲、「それはな、あのな。」と云ふやうな優しい聲。齊は障子を隔て三人は三通りの聲の調子を聞き分けて、其間を縫ふ年寄のさびた調子をも興がッたが、下田と一緒に例の辨當の夕餉を濟ますと、昨夜からの疲勞で早く寢て了つた。

明けるとカラッとした上天氣だ。家の内は矢張暗いがすッかり氣分が違ふ。齊は下田より先に起きた。戸外へ出ると十八許の女が凹所の前で顏を洗ッて居る。唐棧の寢間着に淺葱の細帶を締めて俯向いて居る横顏が、寢起の加減かポッと桃色を帶びて、それへ廂髮のほつれがハラリとかゝッて居る。白い素足ににじんて

居る足駄の紅緒がまたなく媚めかしい。
あらぬ方を向いて歯を磨いて居ると、やがて其女はこッそり後を通ッて内へ入る。齊は靜かに手洗盥へ歩み寄ッたが、さて水が無い。井戸はと見廻したがそれも見當らぬ。裏口から手洗の水を頂きたいと云ふと、今の娘が直ぐ起ッた。母親は流塲で鐵瓶を磨いて居た。
「井戸は何處ですか、私が汲みますが。」と遠慮して云ふと、娘はもう土間へ降りて、「は、こちら。」と答へながら、小さな咳を二つ三つ續け樣にして暗い偶所へ行く。
「お淸は、ま、今年は風を引かんなんて威張ッて居て、それ見んか、とう〳〵引いちまうたがな。」と姉であらう二十二三の肥えた女が男性のやうな聲で爐を焚きながらから云つた。
齊は土間へ入つて其所の流塲に伏せてあつたバケツを取つて娘の脚下へ卸さうとすると、「あ、それは上使ひだすさかい、お客はん。」と母親に云はれて、厭な氣分になつたが默つてそれを井桁の上へ置く。娘はカラカラと車を鳴らして一桶汲み上げて、バケツへなみなみとあけて呉れた。
「どうも有難う。」
さてその水で戸外で顔を洗ひ體を拭いた。そして齊は不自由勝な他郷と云ふ感じと、かすかな、然し優しい人の情けと、それから今日の正午頃は最早此地を距らねばならぬ事とを考へた。
（たはり）

七本櫻

—埋れ草をおもふ—

夜雨

むかし高佐士の野を行く七媛女があつた。兵の伴の司なる大粂命は、磐余彥命の袖をそと引いて。

大和の　高佐士野を　七行少女ども　誰をし覔かむ

と歌ふ。媛女の一さきには伊須氣余理比賣が居つた、磐余彥命

かつかつも　最先立てる　美をし覓かむ

とあるので、媛に近よつてからうと言うと、裂けるが如き其命の目を仰ぎ見て

あめつち　威足大人嚴　など裂ける利目

かと問ふ、剃刀も當てぬ髭面の中に、目ばかりが鋭かつたらしい、が

少女に　直に逢はむと　我裂ける鋭目

ぞと答へたので、姫は人皇第一代のすめらみことの正妃として百世に仰がるゝに至つたのだ。

自分がこゝに歌はうとする『七本櫻』は、わが知り得たる七人の少女を題にした一聯の詩のその一節である。神武天皇さんに見えた彼の七人は實在の人だつたけれど、『七本櫻』の七人はわが想像上の人なのかも知れぬ、或は現實界の人であるかも知れぬ。

或るものは死に頻せる肺結核の人である、或るものは九重雲深きあたりに仕ふる人である、雪白き越路の人と柑子金なす南海の人と、未だかつて浪を踏みしことなき島の人と、甲斐の嶺の横折伏せる山の人と、ひとり名も告げず所も明さずみちのくの果てにてとばかり傷心の文を寄する覆面の人との七人である。紫者灰指物會海石榴市之八十街爾相兒哉誰と問はれて、足千根乃母之召名乎雖白路行人乎孰跡知而可と答へた飛鳥の宮の才女は知らず、月前花下涙おつることありて終に『七本櫻』を作る。

七夜の夢の七つ脱けて
彼と此とにまぐれけむ
眼をかすめたる七少女
七人行く影は薄かりき

髮にして言へば、五尺の
地を曳く人と、目を言へば
星の如きと、眉が根の
淡きと、蜂腰細と

七本櫻？　人ごとに

霞むをだにも捉へんと
腕あぐれば七人は
つとかくれ去る春の山

街に拾へる留針の
矢の手明けぬを返すとも
鋭目して過ぎむ、櫻皆
一重の花の光れるのみ

噫君が胸ならで天地に
魂は籠もらさじ、丸き乳は
人の指には觸れむやと
出羽の人の契れども

しつりの帶を
執るにすら
母が手借るを
知らば——君

月波に來れ
紫は
袂に絞る
色のみか

見よ金泥の
大柱
羽虫の族の
蝕みて
傾き來とも
愛の家
なじかは君を
放つべき

くみ所の奥の
繪屛風に
懸くる素絹の
緋は燃えて

黄なるは沈む
甃の上
二人は在らむ
灯の下に

ただ——生きながら
土に
葬られたる——
吾爲に
夢に設けし
可愛兒に
乳を含ませる
母たらばよし

市中の坂

窪田空穂

雑司ヶ谷に居る一人の友を訪ねようと、自分は音羽の騒がしい町を折れて、だら〳〵登りの坂を彼方に、臺の上へ登つて行つた。

小さな坂一つ登りきらない中に、邊りの空氣は全く異つて來た。店と人とにばかり囚へられてゐた眼は、忽ち澄み渡つた秋の空に向う。雲一つない青空には、物を距てゝ射し來るかとも思ふやう、おぼめかしい光が滿ちて、そして落葉した木立、古く黒い家を、やさしく眺め下すやうに見せてゐる。照らすものも照らされるものも、微かに顫へてゐるやうに思はれる‥‥。物の音は絶えて、唯ちよきり、ちよきりと、鋏の音が調子を取つて聞えて來るばかりである。

自分は歩きつゝ其の音を逐つた。すると、古く壞れかゝつたやうな寺の前、山門の兩側の築土の上、垣にと植ゑた枳殼の枝の、延びて形の壞れたのを刈り込まうと、植木屋と見える老人が一人、秋の日に照らされながら、彼方向きに成つて背伸びして刈つて居るのであつた。

物遠く、靜かなる秋空の下、一心に垣を直さうとす

る老人の姿、其の對照は、自分を誘つて何物をか思はせようとする……。自分は歩みを緩めて、見るともなく其の後姿を見てゐた……。

「君！」と、後ろから誰とも知らず親しい調子で呼び懸ける者がある。振り返つて見ると、袴羽織をして、手にインキ壺を提げた學生の一人で、美しく優しい眼をしてゐる。

顏を見合はせると、學生は微笑して、

「君、羽織の襟が折れてませんよ！」と囁くやうに言つた。自分は輕く應へをして、手をやつて襟を直してゐる中に、學生はもう自分を通り越して、後姿を見せて彼方へ行く。

寺の前を通り過ぎ、また秋空を仰ぎつゝ坂を登つて行つたが、登り盡して不圖學生の姿を求めると、何所へ行つたのか見えない……。

自分は其の時、何ういふ譯とも解らず、冷やかなる笑みが、靜かに我脣に湧くのを覺えた……。

伴奏

森川葵村

舟や行く、わが舟や行く、
夢の水脈、かすみにひきて……。

伴奏きぬ、汀の林、
高塔も酔ひくるめきて
うつゝなく鳴りこそ出づれ。
傷つける胸のヸオロン
調せまり、つと絶えいりぬ。

絶えいりてかたみに無言——
つやゝかの丈長髪よ、
青ざめしわが額はなれ、
殘れるは濃き油の匂ひ、
愛執の倦のみ——されど、

鳴りやまぬ汀の林……
舟や行く、わが舟や行く。

匂

月光に森はいきれて
枝葉みな深う息づき
ほの白に熱をば噓ける。

夢の室――こもる溫味に
果實の香の醱酵てる
さみどりの奥處に入れば、
香木の髓にひゞきて、
たゞよへる熱のうは言、
「君を得ん、たゞ君を得ん。」



學生の服裝と髮飾り

近藤蕉雨

美術工藝の進步するに伴ない社會全般の風俗が奢侈に傾き、大金を惜まず投じて身の周圍を飾ることが流行した結果、遂に學生社會に迄も傳播しまして、美々敷着飾つて登校する生徒が日に月に殖えます所から、常に上流の子女を養成して居りまする學習院女子部では一昨年の九月次に記す如き服制を定め、當時部長たりし下田歌子女史から夫々保證人へ傳達しました。

（一）地質は（和洋服共）綿布、麻布、毛布、紬、銘仙及び總て廉價なる交織の類を最高とすべき事。

（二）袴地は綿布、カシミヤ、メリンス、紬及び交織の類に止め置く事。

（三）衣服の模樣、形、縞等は華美又は野卑なるものを用ひざる事。

（四）幼稚園の幼兒及び小學々生の衣服は筒袖の仕立

を用ひ、中等科の學生も成る可く袖の短きものを用ひしむる事。
(五)紀元節、天長節、地久節、開校紀念、卒業式及び御苑拜觀等の場合と雖も右に定めたる地質により成る可く紋付を用ひ、筒袖は紋付に及ばざる事。
以上の被服制度は夏季休業中家庭若くは保證人の手許に傳達しまして、其月十一日から勵行することにしましたので、昨今の生徒は貴族社會の令孃の服裝とは思はれないやうに質素になりました。
文明と言ふことは無暗矢鱈に立派な服裝をし裝身具等を澤山持つことゝ誤解して、動もしまするとに奢侈に傾く風があります爲め、上の好む所下之に倣ふは自然の道理ですが、歐米諸國の婦人は社會の交際場裡に關係らない間は衣服其他の裝飾に無用の資を投ずる必要がないとて、在學中則ち學生の時代は衣服の地質及び其の色、模樣から裝飾等に至る迄極めて清素なものを撰ぶことは、宛然我國の往昔の習慣に似て頗る奥床しいとの事です。

上流の家庭が此服制に從つて被服を矯正致しましたので、昨今は一二の學校を除くの外は一般に質素になりました。機を見ることに敏なる三越呉服店では先頃來學校と家庭とで用ひ得らるゝ頗る高尙優雅の紡績絣、瓦斯と紡績、瓦斯と熨糸の交織を盛んに販賣して居りますが、目下學生社會の流行として持囃されて居りますのは左の品々ださうです。

時好紬	二圓より二圓五六十錢位	漣織	三圓二三十錢位
新大島絣	三圓より四圓位	縞新大島	二圓より二圓五十錢位
黑紡績絣	一圓八十錢より二圓五十錢位	紡績織	一圓五十錢より二圓位
綿秩父	一圓八十錢より二圓五十錢位	高尙紬	二圓八十錢より三圓五十錢位
新節糸織	二圓より三圓五十錢位	糸入瓦斯	二圓二十錢より二圓八十錢位
瓦斯雙子	二圓より三圓位		

以上の流行色は藤がゝつた色又は當世紫を加味した納戸で、絣は竪絣と澁い茶絣に縞をあしらつたものが歡迎されて居るとのことです。又袴は依然カシミヤですが、之にも體裁の宜しい和製がありまして、舶來に較べますと餘程丈夫です。色は相變らず十中の八九海老

茶で其代價は三圓八十錢以上五圓位ださうです。尙塵除を兼ます雨天用の合羽は猶且色木綿の木理の柄ですが、三越で近頃賣出しました新製吹雪織道行形單合羽は、一番形、二番形とありまして、代價は二圓六十錢、色は栗梅、利久鼠等種々あるさうです。

次は髮飾りですが、之も衣服同樣世間一般日本髷と束髮とに拘はらず、貴金屬、瑇瑁、珠玉の良品を撰んで用ひるとが流行して居りますが、之が學生で居る間は努て虛飾を避け、衣服に釣合ふやうな品を用ひた方が宜しい。京橋銀座尾張町の白牡丹本店では、是等の人々の便を圖つて貴金屬、寶玉の髮飾品を販賣の傍護謨製束髮用三枚櫛を首めブローチ兼用の簪其他實用向の品々を數多取揃へて廉價に販賣して居りますが、當時流行の純良護謨製三枚櫛は五六十錢以上壹圓、特製壹圓五十錢以上三圓位です。簪兼用のブローチは新着の舶來品が澤山有まして、其代價は二十五錢以上貳圓内外だとのとです。尙リボンも有ば日本髮用の葛引も有、元結、梳油、香油等小間物一切無ものは有ません。

盲目の少女

（本號口繪の說明）

本誌の口繪は英國近代の畫家の中、最も平民的で勢力あるセー、イー、ミレー（一八二九—一八九六）の畫いたもので、バーミンガムの美術舘に在ります。ミレーはレイトン卿の後を襲いでローヤル、アカデミーの牛耳を執つた事のある人、佛蘭西のミレー（一八一四—七五）と間違へぬやうになさい。

繪の背景となつてゐる小村は英國のサツセツクス洲、ウィンチエルシーといふ町に近きイックルシヤムといふ所で、ラスキン氏は此の繪に就て詩のやうな說明をしてゐます、之を以て解說に代へませう。

「汚い牧場の廣い景色。その向ふの街道に盲目の少女が暫く腰を下してゐる少女は通常の乞食女で、詩的な者でもなく汚いものでもない。年の頃は十八か二十純撲な容貌壯健さうな肉附、疲勞れたのではないけれども今し方、驟雨が過ぎて太陽が雲間を洩れて輝いたので、何となく憩んでみたばかり。雨に洗はれて萬物は皆面目を一新し、草葉の匂ひが如何にも心地好い、隨分雨は激しかつた。通り過ぎた雨は遙か向ふに尙ほ降り頻つて、二筋の美しい虹が、黑雲の散つた後へあざやかに懸る、新しい太陽の光は濡れた草の葉を、潜り潜つて、玉のやうに輝き、少女の身邊の雜草もビザンチンの白鐵のやうに輝き、仰向いた少女の顏も濡れた睫毛を縫つて行く光で晴れやかに見える。たゞジツと、美しい胡蝶が少女の肩に羽を休めて日向ぼこりをしてゐられる程に靜かに少女は身動きもしない、片膝には人の哀れを乞ふ糊口の道具を凭せかけ、片膝には少女の眼ともいふべき案内者たる小兒が、雨も太陽も知らず顏に、たゞ待ちあぐんで倚り懸つてゐる」

（香）

have to go out in spite of the weather.	嫌な御天氣でも外出しなければなりませんのですもの。
B: Why must you? I am sure electric cars are not running.	乙：何故ですか。憎に電車は不通です。
A: Then I must go by Kuruma.	甲：其ならば人力車でも參ります。
B: I wonder whether any kurumaya would venture out.	乙：此天氣では俥屋が行きましようかしら。
A: It is absolutely necessary for me to go to school to hear the result of my entrance examination.	甲：私は入學試驗の成績を學校へ行つて，是非とも聽いて來なくてはならないのです。
B: Be patient, I don't see why you must go for that. You've finished the examination, and the report will come to you by to-morrow.	乙：忍耐なさい．其丈の用の爲なら，態々入來しやる必要がありません．試驗が濟みましたのですから，明日迄に成績の通知が先方から參りましよう。
A: You do not know how anxious I am to know the result.	甲：何程私が成績の事を氣にして居るか，貴女には御分りなさいませんよ。
B: I do, and yet I can not let you go out in this snow.	乙：分つては居りますが，此樣な大雪に貴女を外へは出しません。
A: Do you think I can telephone over?	甲：電話が通じましようかね?
B: The maid has told us that neither telephone nor telegraph are disconnected.	乙：電話，電信兩方不通だと女中が申しました。
A: I wish we were not in a surburb where every thing is so inconvenient.	甲：何に依らず萬事不自由な市外に住まなければよかつた。
B: Don't you know that you preferred to live in a surburb than in a city because you could study better?	乙：アラ貴女は市內よりも閑靜な市外の方が，勉强によいとて，此處に入來したのではありませんか。
A: I shall take it back.	甲：取消しますよ。
B: Your mind is in a stormy state It will clear off very soon.	乙：貴女の心も嵐なのですから，直に晴れましよう。

the only color that is in perfect taste. It may be a pure white, a cream, or a bluish tint. Unruled paper should by all means be used. Envelopes should match writing paper.

2. Ink. No color except black is used for letters.

3. Pens. Select a pen adapted to your individual handwriting. Never use a rusty or defective pen.

4. Postage Stamps. A supply of three-sen stamps should be in every writing-desk.

(continued)

好とす．純白，クリーム，水色がかりしもよし．必らず無罫の紙を使用し，封筒は狀紙と符合するものを要す。

(2) インキ．黑色の外は手紙書きには使用せず。

(3) ペン．各自の手蹟に適當せしものを選ぶべし．決して錆たる，或は不完全のペンを用ゆる勿れ。

(4) 郵便印紙．三錢印紙は何れの机にも充分に備付け置くべきものなり。

The Ninth of April

A: To think that we have such a snow-storm when the cherry-blossoms are in full bloom!

B: Poets may enjoy the combined beauty of snow and flower.

A: Let them enjoy if they like, but I am too practical a person to make rhymes placidly on such a stormy day.

B: I am sure Tokyo has never had snow as late as this before.

A: Nor will it have again hereafter.

B: No one can foretell that. You seem to be in bad humor.

A: How can I help it when I

四月九日

甲：マー如何したのでしよう，櫻の眞盛りの時に吹雪などて。

乙：詩人等は花雪の美を一時に見るので嘸かし大喜悅でしよう。

甲：喜ぶなら喜こばせて置くがよろしい．私は這麼日に氣樂に歌など讀んで居る樣な，風流人とは緣遠い俗人ですから。

乙：此程晚く降雪したのは東京に於て未曾有の事と思ひます。

甲：未來にも這麼事は又とありますまい。

乙：誰も其を豫言する事は出來ません．貴女は不機嫌ですね。

甲：無理もありますまい，這麼

Which made me look a thousand ways
In bush, and tree, and sky.

O blissed Bird! the earth we pace
Again appears to be
An unsubstantial, fairy place:
That is fit home for Thee!

W. Wordsworth. 1804.

木の間雲の上　叢と
あたり限なく　尋ねにき。

目出度き鳥よ　我等住む
世は變りたり　ながゆゑに
脫俗幽雅の　仙境と
かくてぞ汝すむ　里ならめ。

Letter Writing

A well-written letter is equiravalent to a well-managed conversation. Its literary style should be adapted to the theme and the occasion. A letter of friendship written in the brief style of a commercial order would be abrupt, if not rude; a business message interlarded with rambling personal references would be ridiculus.

No one can do skillful work without the proper materials and tools. A elumsy sheet of coarse paper covered with untidy lines and crammed into an ill fitting envelope is not prepossessing. It will not do to catch up any fragment of paper that happens to be at hand, to go hunting over the house for a stray pen and a half-evaporated inkstand.

Let us consider what we need in writing letters.

1. Writing Paper. White is

書翰の書方

巧に認めし書翰は適切痛快の談話に等し。其文體の如きは場合と目的に應ずべきものなり。友誼上の書面にして，商用的簡短無味の文體ならむには無作法なりと云ふべく，又用務の書翰に管々しく個人的消息を混入しなば，笑を招くべし。

凡そ器具材料なくば，巧妙なる工事期すべからず。然れば，粗末なる紙面に見苦しき罫の引かれしものを適合せぬ狀袋に入れし手紙は，心を惹くものにあらず。如何なる紙片にても手當り次第のものを使用し，紛失せし筆，半分乾きしインキ入を家中捜索し行く如きは成すまじき事にこそ。

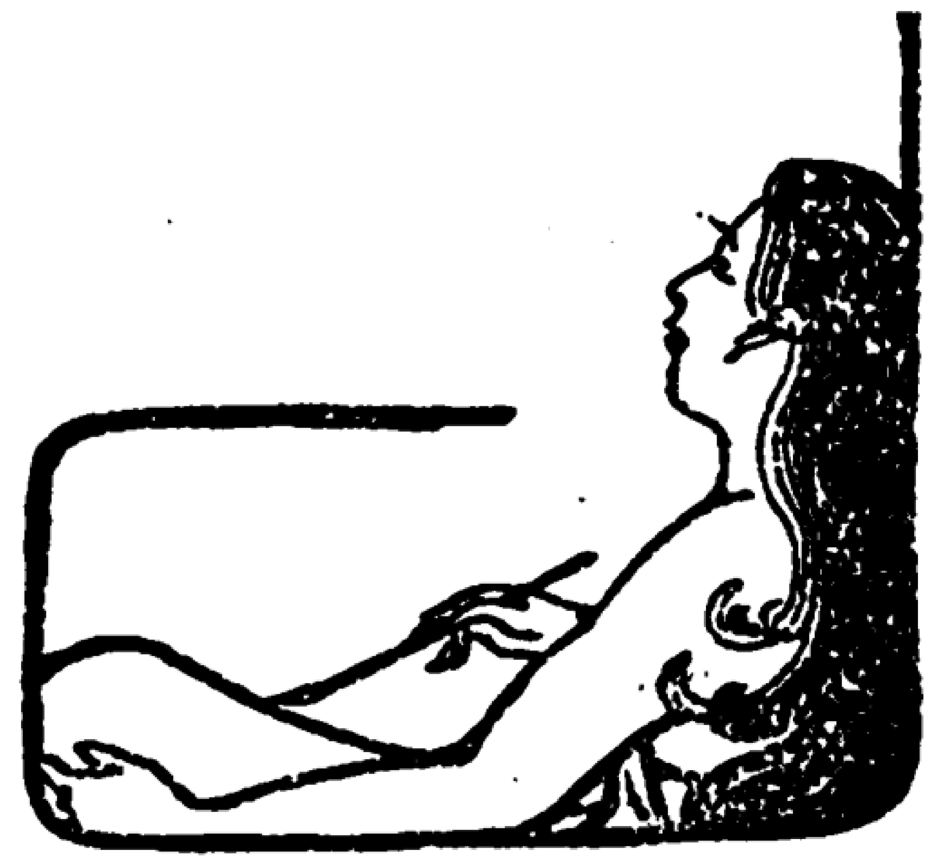
今爰に書翰に必要なる品を掲げん・

(1) 狀紙・色は白色を以て良嗜

英　文

(第四年第五回)

女子英學塾講師　河井道子



The Cuckoo　　郭公

O blithe New-comer! I have heard,	快活なる　新來者よ,
I hear thee and rejoice.	汝が歌聞くぞ　嬉しけれ,
O Cuckoo! shall I call thee Bird,	なれをば鳥と　稱へんか
Or but a wandering Voice?	あるは空飛ぶ　聲のみか。
While I am lying on the grass	芝生にふして　我はきく
Thy twofold shout I hear;	二樣に響く　汝が叫,
From hill to hill it seems to pass,	山又山に　ひゞきつゝ
At once far off, and near.	此處と思へば　又彼處。
Though babbling only to the Vale	囀々汝の　樂しむは
Of sunshine and of flowers,	春陽香花の　谷なれど
Thou bringest unto me a tale	我身になれの　與ふるは
Of visionary hours.	邯鄲夢の　物語。
Thrice welcome, darling of the Spring!	春の愛子　いざ迎へん,
Even yet thou art to me	鳥ぞとなれを　昔より
No bird, but an invisible thing,	思はぬ身には　今も尙
A voice, a mystery.	影なき聲か,　幻象か。
The same whom in my school-boy days	學校通の　童子どき
I listened to; that Cry	聽きしなが聲　しるべにて

婦人雜誌一口評

▲『女學世界』博文館創立間もなく『日本の女學』と云ふ雜誌が出た、後に『婦女雜誌』と改題し、に更『女學世界』となつて今日に及んだ、其間に世間も變つた、雜誌も幾變遷した、今の處奥様にも向けば女學生にも向く、重寶な代りに統一が無い、文學の方面には振はない。

▲『婦人世界』實業の日本社だけに活動は紙上にも表はれてゐる、併し文字の配置で嚇したり、福引で人氣を引いたりするよりも、猶ほ意義のある活動が望ましい、弦齋の處世法も結構だが、天下處世法に通ずるもの弦齋一人に限るまじく、世界はいつ迄も弦齋の世界でない、双方ともに御用心。

▲『家庭之友』近く『婦人之友』と云ふ姉妹雜誌も出來た、初めから英國風の質素な態度、是で讀者が飽かない處を見ると、能く信用しられたものだ、健實一方で讀者との親みもある、願くは單調を避けて内觀的家庭の革新にも意を注いで貰ひたい。

▲『婦女新聞』東宮御慶事紀念とあつては滅多に廢刊は出來ない、特色は能く時事に適ふた論說と、雜報の簡にして要を得て居ること、但し狹い紙面の割に閑文字の多過る嫌ひがある。

▲『愛國婦人』最近の分は少し調子が變つて來た、兎に角愛國婦人會と云ふ立派な機關だから、餘り賣りひろめ策に腐心して、品位を下げないやうにしたいものだ。

▲『婦人畫報』あらゆる畫報が廢刊しても、孤軍能く闘ひ得るだけの餘地はあるらしい、『婦人畫報』と云ふ名と實とを具へてさへ行けば前途の土臺は固まつて行くてあらう。

▲『女鑑』古女官の如し、位ゐ許り高くて時代に後れてゐる。

▲『ムラサキ』女の雜誌か、男の雜誌か、中學生の雜誌か分らなくなつて來た。

▲『女子教育』餘り見かけない雜誌だけれど、女子教育家の參考として唯一の雜誌である、下田文學士が監督してゐるらしい。

▲『新婦人』出て間がないから認められないやうだ、大分書生流の處がある。

▲『少女界』いつも同じやうな人が同じやうな事を書いてゐる。

▲『少女之友』餘りお孃樣たちに投機心を挑發してはいけませんよ記事は優しいけれど大した物もない。

▲『少女世界』三つとも能く似た雜誌て、ひいき〳〵てお孃樣達にも愛讀されるのであらう。（山頭火）

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

當選繪畫（其六）

山中古洞先生選

一等、佐野貞子。二等、岡野とよ子。三等、渡邊貞子。四等、田島まつ子。五等、濱部風窓女。





美文

編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採録す、二十四字三十行以内、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

二等　○石拾ひ

八重子

河原の雜草がサラ〳〵と鳴つて、兩袂を脊中に括つて捲くられた腕に冷く當るのです。空は瑠璃色に澄んで日光はあまり強くなく、二倍の蔭を東に印して居ます。「ぢやあ歸りませう」俊さんは撰りに撰つて集めた石ころを、一つ一つ籠に入れました。有馬の御土産に頂いた耕房の籠に、山の様な石、坐つた様な石、卵の様な石、珍らしいの許り。入れて俊さんは細い手に持ち兼ねるやうな顔をしました。

石と草との廣い河床を、清冽なればうね〳〵と細く流れて、花藻が香を運ぶのです。二人で奇石採集をやつた所は柔かな砂原で、内に歸るのには是非水を渡らなければなりません。

裾をからげて、こつぽりを手巾で括つて、籠を引張りつこして、面白い姿に二人は莞爾笑ひました。

一、二、三、のかけ聲と一緒に流れに足を入れて、恐る恐る歩みを運びますと、美しい石が水面近く見えて、二人の足は眞白う、俊さんの稚兒髷と、私のお下髮は根が拔けて、淡紅のリボンが毛の末にあるのが、ゆらゆらと寫つて居ます。瀬が早いので足元許り見て行くと、一昨日上げたばかりの前髪が、ともすれば額にかぶさつて、よろ〳〵したのも度々でした。

「あれー、大變!!」俊さんの叫聲に喫驚して見ると、細い足に藻が絡まつて困つて居る所です。足を取られないやうに、出來るだけしつかり支へて、藻をとつて上げます機、私のリボンがスウと拔けて、丁度リボンで括つた花藻が流れて行くやうに、フハリ〳〵と。今度は俊さんが追かけますと、寸、尺、丈と遠ざかり駄目でした。

私はリボンを斷念して土手に上りますと、沈みかゝつた日は、淡い光を野に投げ、汽笛がボーと鳴ると頭の上の松の枝から鳥が一羽、飛び立ちました。あれ、向ふから松やがキヨト〳〵して來るのが見えます、屹度私等の迎ひにてせう。

清い河原に二人の少女が石拾ふさま、繪の如く詩の如し、見つけ處が好かつたので此文も引き立つ（評）

三等　○暗の夜

青木たか子

墓、何と云ふ物凄い名でせう、何と云ふ淋しい名でせう、けれど私は此恐ろしい名をきく毎に、何とも云へぬ懐かしさを覺えるのです、あの墓にはたつた一人の母樣が靜かにねむつていらつしやるのですもの、人は死ぬと魂が天に上つて星になるとか云ふので、私はいつでも外にでゝは數知れぬ星をくまなく見渡してはあれか是かと探すけれど、母樣のひとみのやうな優しい星は一つも見あたらないのです、あゝどこまでも不幸な母樣の魂は親に先立つた不孝の罪で天に上ることもできず宙宇にさまよふているのであらうか、うば玉の暗の夜は提灯一つ見えずさびしさがひし／＼と迫つてくるのに墓場のあたりで青い火がほやり／＼もえ出した、おゝ恐ろしい事あれはきつと世を祈る神が捧げたみあかしでせうよ、物凄い惡魔の火は世のかよはい人の魂をひかうとしているのでせう、人は是を恐れながらも知らず知らず招かれて暗い穴に引入られてしまふのである、あのまつ暗な墓には幾何の人の魂がさまよふているでせう、幾千行の熱い涙がそゝがれたであらう、其血の涙熱い雫にうるほされて墓の草木は芽を出し實を結ぶ事のできるのではないか……世のありとあらゆる物は彼火を恐れて息を殺しているのであらう、あたりは寂として音なく唯杉の上を吹く風が、しうしうとして恰ど母樣の泣き聲の樣、かなしく聞える彼の高い森には何か惡魔がひそんでいる樣に思はれてならない、母樣が死ぬ二日前一羽の鳥がいやな／＼聲て泣いたのはあの森の上であつたもの、あの晩はまだ母樣の血は溫であつた、黒いひとみにも溢るゝ程の慈はこもつて私が泣けば母樣も泣いて下すつたけれど、今宵はどれ程私がお慕ひ申ても一言の返事もないのですもの、あゝもう泣くまい、決して泣かぬ、泣くにももう涙の泉はつきてしまつたのでせう、どこかで清い音樂の音がする、耳を澄してよくきくと其は前の小川の小石にむせびむせびては流るゝ水音であつた、清いやさしいさゝやきは、何か私の心を泣いてくれるやうで此底にはいかなる美しい姫樣が住んでいるだらうと思はれて幾度か底に沈まうとしたでせうけれど、幸か不幸か淺い水のせは、私を引入れる力はないのであつた、光りの强い星が一つ青のろを長く引ゐてすうと流れた、私は思はず身の毛が立ちました、鳥が泣いた晩、うら山から出た人魂のそれの如くに思はれて。

わざと凄味を見せやうとして、人魂だの、鳥だの、形容と景物が澤山すぎるやうだけれど、哀切、痛切、此文太だ山田くに子の思想に似たり（評）

四等

○芹摘み

本所區龜澤町一ノ卅一　秋山欣子

「絹ちやん、こゝに澤山あつてよ、早く被入いな、」波ちやんが頓狂な聲でよぶ、私は「そう、今すぐいつてよ、」と返辭だけしといて忙しく、桑の根元の水際から、肥つた根芹をグイとぬいて、泥を洗ひ落し、眞白な根を一寸ちぎつて籠へ入れる、かうして摘んだのがもう七分目程、「絹ちやん〳〵、」また波ちやんがよぶ、今度は、はーいと立つて桑畑の畝を、ひよい〳〵と飛んで新川堤へ上ると、波ちやんが、ついそこの柳の陰で、おいて〳〵してる。跣足なので、燒芝が恐ろしく痛い、顏をしかめながら我慢してそろ〳〵と堤を降りかけると、せつかちの波ちやんが、「憶病ねえ絹ちやんお辷んなさいな、」つて、もどかしがる、私も負けぬ氣で足を伸すと、みる〳〵止度もなく辷つて、堤の裙を通り越し、危なく田へはまりそこなつてやつと噴井戸の棒端で止る、珍らしく波ちやんが笑はないのでふいとみると、いつか、あつち向になつて摘んでるまあ好かつたと思ひながら、水のピシャ〳〵な田の、稻の刈株の間を拾つて波ちやんの處まてくる。



春の川　大阪　和歌子

「隨分あるてせう、いゝ代めつけたわねえ、之からいつもこゝへきませうね」つて波ちやんは私を見て莞爾、私はそつと波ちやんの籠を覗くと、私よりかグッと少ないので、ほつと安心して籠を畔へ置く。

この水溜は噴井戸から流れてくる水なので、割合に溫い、廣さは僅か一坪許、底は赤黑い泥で、水が淺いせいか透つて見える、周圍りに銀色の筆の穗みた樣な、花をふいた「猫ぢや」か、ギッシリ生ひてゝ、芹は其根元から水溜の中程まで漸々層になつてる。

せつせと摘んでる波ちやんの、頭の銀の蝶へ三時すぎの日が斜に輝る、私も一生懸命に摘む、こつち岸は、大概摘みきつて腰を起さうとすると、向ふ岸の波ちやんの足許から、蛭がふら〳〵と泳ぎ出た、まあいやなと思つて凝と見てると波樣は泥のついた芹の根を洗ひながら「蛭が居るのねえ、卵が產みつけてありやしないかしらん、氣味が惡いわ、」つて妙な顏、私は默つて蛭の行衞を見てると、水が溫んできたと見えて、あつちからもこつちからも、ぬら〳〵と長つ細い奴が泳ぎ出てはまた芹の陰へ隱れる「もう歸りませうか、蛭に血を吸はれると嫌だから、」つて立上る、波ち

やんも立つそれでも二人とも何だか惜しくて掘らないので、「何ていやな奴でせう、入つてかき回してやりませうよ」つていふと、波ちやんもそう〳〵つて手を引き合つて水溜の中を散々がば〳〵やつて、清々する、かうして二人て摘んだ綠色の白い根の澤芹が、父樣の晩のおかづになるんですもの。

あれ向の山峽から白い煙が蒼い空へスーと高く、丁度我家のあたり、母樣が夕餉のお仕度をなさるらしい、「波ちやん急ぎませう、」つて姊妹揃つて、露の垂れる芹籠を抱へて、堤の上を一散に、木瓜の花の美しく咲いてゐる家へ。

斯う云ふのがほんとうの美文と云ふのでせう、芹摘の二女と、周圍の景色と、ほど〳〵に鹽梅されて、面白みもあり、情もあり、文章には根抵もあり（評）

五等

○夜の海邊

信濃　依田花園守

おゝそう〳〵丁度こんな晩だつた、矢張り夕薄月夜の風の無い、尤もそれは夏であつたが、二人とも湯上りの浴衣姿で此磯を逍遙つたのは…………。

寂しい想に目を閉ぢてぢつと打ち沈むと思ふともなく想は亡き人の上に走せて、すぐそこに其人の聲がしはすまいかと、迷はされもするのてある。波打ち際の岩の上に腰を下して、ゆた〳〵と岸をかむ浪の、心ありげによする彼方、うす暗く黑づむ中に一點二點、漁火のはた〳〵とゆらぐを見れば耳に殘る彼人の聲が、呼く樣、又今更に胸に響いて來るのだもの「ねい花さん、ご覽あの火を、僕は妙に懷かしいよ、こうじつとゆらゆらする處を見つめとると僕の瞳が溶けて流れてあの火と一所になつて仕舞ふ樣に思はれるよそうしてあの赤い火が、花さんの眼の樣に可愛らしくてならない」私は赤くなつてうつむいたつけ、あのきりゝとしまつた唇にはたしかに言はれぬ微笑の上ぼつたのを私はよくおぼへて居る。

あゝ今しまたゝいて居るあの漁火、それは其時のではあるまいけれど、けれども今こうしてじつと見つめれば矢張り彼の人の瞳が溶けて居るかの樣に思はれてならない、あの優さしい心が私の爲めに、肉を離れて現にもえて居るのではあるまいかとも思へる、靈！それは永しへに滅えないものだと云ふけれど、あゝ私のそれは永しへにかの幻の靈と相ふれる事はできないのであらうか、と思ふとあの漁火が何とはなく妙に懷かしい、ひきつけられる樣に。

やよひ上旬のうそ寒い今宵、波は眠むるかの樣なおだやかさ、が私の想はそれからそれへとはせて高鳴る皷動の響はわが耳にも聞きとれんばかり、暫し眩めく想ひに、亂れた胸を抱いて、氣を靜め、さて眼をあぐれば、折しも初夜告ぐる鐘の音、波は一しきりゆらめい

た、何をか呼く様に。
漁火はいつか、はてなきはてに消えゆきて、昏い〳〵海の面は、わが胸と共に永しへの闇ではあるまいかと疑はれた。

山國の人、却つて海を語る、海の意味の幽玄なのが其好奇心(?)を動かす爲であらうか(評)

〔秀逸〕

○眩惑

後志　中田繁子

朝顔の後れ咲きが淋しく、芙蓉、白萩の眞盛りは目もさめるばかり、そよ吹く風も何となく香しい九月の半ば過ぎ、片瀬川の流も銀の様に澄んで、底の小石も浮立つて奇麗に見える、けれども日盛は蟬の聲も聞えて、日影が南の障子を一杯にさしこむ頃、向うの爺が素裸でゐるのは、却つて暑さうに思はれる。

學校の科業も正午限り、あとは机に向う氣になるでもなく、其まゝぶらり家を出て、いつも足を向けるのは多茂木の大沼である。

私が此の片田舎の小學校に教鞭を取つてから、九年の間、富貴、功名の念は遂ぞ胸中を往來した事はない、と云ふのは、此の村が自然の景致に富んで居ることなので。

樅、椹、白楊、多茂木の様な喬木が、思ふ存分茂つて小徑の外は雜草の爲に足の入れる場處もない。

其中には黄色の月見草も交て居れば、蓼、孔雀草、野菊の赤いのに、女郎花の白いのも見える。

だら〳〵坂を下れば鏡の様に澄んだ沼は茅萱に包まれてゐる。

向ふの大樹の影が一面に蔽ひかぶさつて、水の色は深緑り、仰げば空も又晴れ切つた深緑り、此の莊嚴な配合の間に坂上の多茂木の古堂が、氣高い姿を水鏡に寫してゐる。

私は松の切株に腰を下し、足を載せた、水際の一枚の石は、苔に包まれ、細かな白い花は、處々に咲いて、寂しい寂しい太古の有様を、忍ばせるのである。

をり〳〵漣が、目高の一群を寄せては、沼の女神が歡びの脈搏の如く、和かに又音もなく、ゆるう引返す面白さ。

沼の中央には、水晶を碎く様な水が沸々と湧き立つて、恰も噴水でもあるかの様、折から森を徹して洩れて來る夕暮の淡い光は、眞白な水に色彩を加へて紅と燃え緑に流るゝ美しさ、世に自然ほど美しいものはあるだらうか。

周圍が北海道と云ふ變つた天地であるだけ、我等の眼にも景致が新しく映ずる、只後半に到つて、作者は自然よりも人間が戀しくなつたと云ふ事を書いてあつたが、是を削り去つた、此文は只叙景の文

章として一篇とした方が宜しく、人間が戀しくなつたと云ふことは、題を改めて、別に一篇として作つてみたら何うでせう（評）

○まどゐ

信濃　太田喜志女

姪甥の二人はお客様だからとて特に厚い座布團に座らせ兩側から三人四人と順々に都合六人と云ふ大勢、炬燵かこんでの樂しみは何々と、ひる間からもくろみして居た遊び事も皆終んだので、今度は何がよからうと顔見合せ居る時「そらこないだの天狗發句ねあれ面白かつたぢやないか」と自分よりも年上の姪の手を（おもちや）にしし居る喜利子がにつこり叫ぶと、おゝそうだそれがいゝと呆れ顔の二人を見ながら仰有るのは母さん、紙と硯箱とをもつて來て見るとこゝて一等の飄きん者の賢次郎さん、眞面目な顔をして天狗發句の譯を知らぬ二人に講釋をして聞かせて居る、明るい明るい萬燈のやうなランプは少し高めに吊されて紫がゝつた大形の更紗布團は皆のひざや何かで浮上つて仕舞ひ八疊の間は火氣やら人の氣やらで誰れも〳〵醉つたやう顔まで紅くして手からは汗が出るのがぽか〳〵と湯氣のやう立つて居る紙を三だんに折り筆を持つて誰か云ひ出すのをまち構へて居る母さんは一まはり皆の顔を見まはされた母さん妾から云ひますわねと紅い頰を上げて優しい齒並みを見せる喜利子はとつて九ツ何と云うかと思うと「ふくれても」としやれた、まアよくこんな事が出たものだねと半ばは妾だけに母樣は仰有りながら書きつけられた、次は妾の番、ちよつと困りましたね、まア優しく初夢やと云ふと、賢さん、己にや分らないな、そんな面倒な事はと、早くまはつて來ればいゝにと云はぬばかりの顔つき、さツ美好さん云つてごらん何でもね五字になればいゝのと云うと指でかずを見て居たが發束なさそう。すると兄の吉住さんは、それぢや美好は一度ぬいて私が云ひますわねアノー「軍刀や」と力みのある聲なんと勇ましいでせう、やつと十二ですよ、賢次さんはこらへきれなくなつてみるから笑はずには居られぬ面をして「猿猴年」と大得意なる大笑ひ丸い目がしよつちう動いて居る。

美好さん何か考へたでせう云うてごらんと云はれ困つて大きい目を細くして「松本へ」と泣くやうな聲して、ともするともつれそうな被布の房を苦にしてうつむいて仕舞つた短かくきり下げた前髮はまばらに割れて廣い美しい額がすけて見える「母さん何とか云つたね」と促されてまア何と云ひませうと思案中、雨戸にがたんと音のするに、氣が付いたか直ぐ「風の音」と仰有つたこうして上の句もつき中の句になつた時はまた思ひ思ひの袋をしぼつて「傘かしてけり」とか「あかい顔して」とかさま〳〵の事を云つた、今度は何と云はうと思ひまどうは美好さんらしい、妾が「年のくれ」と云うと母さんが「とんてけり」と云ひ吉さんが「たこを上げ」

と云ふと賢さん「山の上」と云ひ、みよしさんと喜利子とは考へて居る內に紙面が塡まつて仕まつたのでこの次として、母さんは讀みはじめた、エートト何だな「萬ざいやおもかげ偲ぶとんでけり」「人の面傘借てけりゆきにけり」どうも面白くないな、すると「ふくれても遂い笑ひ出すお正月」さあ大變喜利さんが一番だ面白い〱と大さはぎまた見てゆくと「松本へ足早にゆく年のくれ」まアどうしてこんなにいゝ句が出來たでせう美好さん萬ざい大勝利ッと大聲こうだものおだちんだつて出ますわねまア前祝に祝つてそれからまた讀みませうッて母樣、山の樣に盛れたお菓子と柿とを出される一同は舌づゝみして食べはじめた何の慾もない和らかい瞳からして見ると誰れが嫌な者とては一人も居ない、まつ毛の長い人、頰の赤い子、頸の白い子、手の丸い子、みな美しい事よ胸に思ひみちてたゞわけもなしにハ……と笑つて見た、たゞ嬉しくて。

おもしろき圖案、躍なき圖案、これですら〱と有りのまゝを書いたやうて、其實は文章に苦心してゐる、出たらめてはない（評）

冬の川　青森縣　花輪蘭子



○風呂屋

大津市　近藤寒菊

午後五時仕度をして、風呂屋へいつた、風呂の中は、餘り多くの人でもない、三十二三の奥樣と子供が二人とてあつた、湯の中へ手をつけると熱く〱て熱くて、しかたがないから、ボンボンと手を打と、チリンチリンと音がして水がでゝきた、湯の中へドブンとつかつた、そして湯をかきまはして又ボンボンと手を打と、チリンチリンと音がして水はやんだ、娘さんが三人きた、色の白い人や、うす黒い人、髮を美しく、島田に結つて居る人は二人の內で一番年上だらう、妾は顏や手足を石鹼で洗つた、ぬか袋で顏をクル〱と洗つて、洗粉を顏にぬつて又ぬか

袋で洗つて居ると、前にきた三人が何かヒソ〳〵と、話をしてゐる妾のわるくちを、云つてるのだらうかと氣がまはる、しばらくして又一人色の白い、目のほそい鼻がいやにひくい、髪は束髪に結つて居る、其うち私はスッカリ洗つてしまつた、湯をでた、着物を着て鏡の前へ立つと、生々した妾の顏が寫る、なんだかうれしいような、おかしい氣がする、湯の中ではホ……：……と笑ふ聲がする、又自分の事をいつて笑つて居るのかしら、なんだか氣になるが風呂屋をでた、暖い春の風はおしげもなく吹いて居る、プンと淸い香がして、チラ〳〵と櫻の花が一瓣どこからかとんできた。

正直に描寫してある、愛すべき文字(評)

○春　雨

埼玉縣　中　村　勝　子

一寸障子に日が射したかと思ふと、段々暗くなつて歪然夕暮の樣。やがてボツリ〳〵と雨だれがする。たつて障子を開くと庭はもう大分濕つて、糸の樣な雨は音もなく降つてるのである。灰色の空には、雨氣を含む雲がソロリ〳〵と西へゆくのが、果てしもない。遠い村々は雨にこめられて淡く森の影が見える許り。裏の板椽をトン〳〵と渡る音がしたかと思ふと、藏土の軒に首を縮めて、尾を垂てた鷄がコケイコーと首を伸す。みると頬冠の兄樣を先に下男等が、草鞋にうんと土を積らせて飛びきた、肩の鍬からはもう雫がポタリ〳〵。

庭の柳は時々吹くる風に、ものうそうに枝を動す。池の傍の枝垂櫻、蕾はまだ堅いであらう、春雨は花の紐とくよすがになるといふから、あの枝垂櫻に澤山雨がかゝればよいと思ふ。途端物置てスットン〳〵といふ音がいかにも物淋しく、靜かに聞こえる。大方兄樣達が繩にする藁を打つのであらう。すぐ前の家からは煙が這ふように上る、それが風にバラ〳〵と亂される、又煙が出る、又亂される、限りがない。隣りの家では子供が退屈してかヂャンカ〳〵樂隊をはじめた。「喧ましい奴等だなあ」と叱る聲もよくきこえる。「オホ……」と笑ふ華やかな聲にヒョト門の方をみると一人の娘がこつたので他の一人がそれを笑ふてるので……やがてそれも垣根の影に隠れた。雨は小やみなくふる。「あゝいやな春雨、妹は歸るに難儀だらう」とピシャリ障子しめると、雀がバッと飛び立つた。

餘りに意味が無さすぎる(評)

○滿　月

上毛　茂　登　子

とぼ〳〵と、田圃の小路を歩いて、桐生川邊に行つた、太陽が西の山に落ちたのも、つい今し方であつたと思ふたが、もはや四面は、何處となく暮色が迫つて來た、ふと向ふを見れば、林をふみわけて、賤が男子の薪をせをふて、さも重さうに家路を急いで居る、折から一羽、二羽、三羽、とうちつれて鳥が塒を求むるため歸つて來る。

川水はさら〳〵と流れて居るが、水の上は朧ろにかすんで居る、川邊につどふ人の、ねぎ、大根を洗ふ眞白の色が、一きは鮮やかに私の目に入つた、川邊の梢を渡る風さら〳〵として、涼しさとは云へない冷やかさが、ひた〳〵と自分の身にしみ渡るようであつた。

羽黒く、腹白く、何とか云ふ水鳥が入つては出で、出でゝは入るさまなどの景色は何とも云へぬほど美くしく、又神々しくあつた、又彼處こなたの山々は、微茫なる夕闇に浮んで、青白い霧煙は、底濃く上は淡く、四方八方は愈暮れて、夕もやの夜に溫い家庭の燈が、一つ、二つ、見え初めて來た、仰いで見れば、空には星數を增して、もはやものゝあやめもわからなくなつてしまつた、大そうに時をすごしたので家路を急いで歸つて行く道すがら後を顧みれば、正面の山の端に眞赤な光が見えた、初めは火事だと驚いたが、次に火の球である事に氣がついた、最後には其の赤いこなたに冬枯の樹が黒く現はれて居るのに氣がついて、始めて月である事を發見した、日よりも大きく其の鮮やかなる事、血潮したゝるばかりであつた。

あゝ、今宵は滿月である、この時に友があつたなら、……惜しい事には、唯一人である。

友があつたならば、この美くしい月をながめながら、語りつゝ樂しむものを、唯一人、……「あゝ滿月よ、明夜は友と一緒に來るから、又こゝに來て、月の宮居の話を語れよ、……」月は唯無言で、其の光を私の顔にそゝぐのみであつた。

稚い文章、而して好い文章。（評）

○買物

落葉子

「早くいらつしやいよ、外出簿も附けたの、舍監先生に挨拶に行きませう。何して居らつしやるの、早く」と室の外から忙しく呼ばれる。せけばせく程、靴下が知れない。もう困つて、新しいのを下して、はいて、室の戸を明けて見ると、人影は見えない。「せき立てた癖に」と呟きながら、廊下を舍監室の方へと行くと、「やー」と後から押す人がある。振り向くと、やかましくいつて居た二人で、先生に、「只今から二時間外出さして頂きます、」といつて、洗濯して居らつしやる方に、「いつて來ます」と、自慢そうにいひつゝ、寄宿舍の門をふみ出すと、今日こそあつらへ向きの日曜日、春日の影は暖く、食堂の硝子窓を射て居る。霞ながらの淡路島は實に眠つたよう。「此所は人通りが少ないから」と、大聲で唱歌しながら三四寸、青い麥の芽の出た畑小徑を行く。折柄何處からともなく床かしい梅の香を含むだ春風は、幾度か面を撫でる。天國でも逍遥つて居る樣な心地で、ふつと氣が附くと、片足は早くも汽車のレールにかゝつて居る。「もう之からは」と、二人は

眞面目、踏切を通つて暫くすると、勢鋭く下り列車が走つて來た。見ると何れの箱も、學生の貸切のよう「ああ彼の人たちは」と羨しくて立ち止つて居たがまた足を早めて角の雜貨店へ來た。私共の目的は此所にある。店へ入ると此所も學生で滿員といふ風、半紙四帖に、ペン先一箱、花王石鹼二個、罫洋紙、「二人分之で可いでしようか」と、訪ねると「私、ノートが一冊欲しい」と、いふから手帖一冊また地圖書きの、畵洋紙、之だけをならべて、忙しく丁稚に〆させると、五十八錢五厘。六十錢出して一錢五厘釣錢を受けて、海老茶の風呂敷に包み、手に提げて、元來た道を廻つて、寄宿舎へかへつた「あちらからも、こちらからも、御土産は」と、訪ねられ「はい〳〵」といひつゝ、先生に挨拶して室にかへり、包を開くと室全體の大批評。

いつはれない、正しく女の書いたもの（評）

○なつかしの庭

徳島縣　西野ひさし

母樣に用が有て來て見ると生憎お留守、直歸らふとすると、妹の文ちやんが袖を取てはなさない、それならいつそ、夕方のお歸りまて待ふと云ふと大嬉び、二人は春日の長閑に照す椽先へ出て、二ッ三ッ話していると、まあ驚いた文ちやんの話ぶりのませた事、こふ何時の間に大人じみたのだらふと思ひつゝ、庭の面見渡せば昔をしのぶ木々の樣、よく妾の十一二の頃弟や光子さんや花子さんと草のまゝごとして遊んだ事が思ひ出せる、もふこんなに暑いほど照る日をあびて、すると何つも母樣が、皆そんなに日なたでばかり遊ぶと、顏が眞黑に成じや有ませんか、春日に焦たら移民の嫁にも取つてくれませんよ、と仰しやる、そしたら妾が、あたいかまやしないわお嫁になんか行ないから、つて少しもきかないで、此所の靴脱石の上へ花を澤山取て來て、葱を立にわりひろげ、それに色々の花を巻こんで、小口に切り巻ずしだなんて、椿の葉に入てお配りするの、光子さんはよく椿の葉を澤山縫合して、籠をこしらへたつけ、花子さんはわたいお魚うりよと云つて、色々の木の葉をお魚にたとえ、大きな聲でお魚の御用とうりにくるの、すると弟がそんな魚が有ものか、と走て行くと、前の小川からオダカや小海老をすくつて來て、ヘイお燒きなさるのですかなんて、松葉に刺して火に掛け、松葉が燒けて皆火の中へ落して騷いだり、あゝあの時は面白かつた事、それが十年の昔話、なんだか夢の樣だ、其時五ッか六ッで有た文ちやんが、早十七の娘ざかり、一人思ひに更つて居ると、門の方にカーラ〳〵と引ずつた足駄音、文ちやんが母さんじや無いかしらと、走つて行けば、まあ折角いつたのにね、叔父さんがお留守のものだからあゝやれ〳〵と云

ふお聲、それで妾は大嬉びだわ、と云ひつゝ出て行けば、おや姉さんが來て居るの、とにはかににこ〳〵。

まゝごとの樣子など能く書いてある、實になつかしの庭らしい（評）

○狂人

神奈川縣　木村はる

昨夕から降り續く小ぬか雨鎮守の森もぼんやりと其先は見へぬので世界はひとり此村計りかと思はれる勉學するには好天氣と机によつて昨日の日記を書き始めるとハヽヽと笑ふ聲が外に聞える先生に違ひ無いすると母樣が「先生お待ちなさい」と言はれる「アー」と答へた待つて居るのだらう母樣はいつぞや父樣の汽車内でお買ひに成つた巻煙草呑め無いと有仰つてコロ〳〵仕て居たを六七本お出しなすつて「之上げ升から彼方へ行つてお上がりなさい」と遣り升と「づいぶんお寒う御坐い升ねえ」と付かぬ返事に「まあ先生がおせじ」をとお笑ひなさる餘りお可笑いので私も出て見ると片ちんばの下駄に大きなお腹を出して此寒いのに相變らずの姿「先生烏は」つて私が言ふて見る「カア〳〵〳〵」母樣がつまらない事お止しなさい」と有仰るハッハ……私彼と又笑つて行つて了ふ「お可笑な先生」と言ふのは母樣……麽氣樂に一日でも成つて見たい」つて有仰るは母樣……。

お花見　名古屋　きよし



氣狂ひ先生と言へば先づ此村では年老子供に至る迄誰れ知らぬ者も無いのです私は彼の先生の事情をよく知ら無いが何でも元は縣廳の役人だつたそうです今はすぐ此先の百姓に養はれて居るのだが或家から何故か食料として送金仕て居ると云ふ事だ何故彼麽に成つたのか學問の爲と人は言ふが……不知の字が有つて聞けばチャント教へて呉れる書も描く年は六十近く白毛交りのひげを生やして衣は見苦し共何所やらに品の有る人と思ふ遂此間お友達のりつぱな方が御覽なさつて落涙されたと言ふ事も有る其う言ふ事等考へるとお氣の毒で堪らない人は馬鹿氣狂ひと言ふて嘲るが私はむしろ變人として常人に對する如くして馬鹿あしらひを仕ないつもりで有るアレ又弟が學校の歸りしなに先生にからかつて居る。

○四季の琴

靜陵　花子

一天うす衣もてつゝまれたる如き春の夜に花かすむまがきが中より、ひゞきたる艶にをかしきものなり、螢とびかふ小川の邊に涼む折しも何處ともなく、憐れな曲のもれたる一きは涼しさをますなり、月かげさやかに光鏡に似たる仲秋の月に虫の曲おかしき秋の夜いづくのやかたよりか、微かにきこゆるこそゆかしきものなれ、よひの嵐しづまりて月影氷る冬の夜半、火桶のもとのみこひしふいとつれ／＼なるを、なぐさむるは琴の音なるべし、げに花の席、月の宴、玉の臺も、柴の庵もへだてなく目出たきものは、げにこの曲なるべし、そのむかし嵯峨野の奧の松風にかよひては、仲國が駒をとゞめしめ、はた人をよろこばせ、たのしましむるかぞふればかぎりなし、あはれいみじくも妙なる力をもてる物かな。

○湯屋

福岡縣　伊藤勝代

手拭を持ち家を出たのは、夕暮近い頃であつた。横町へ曲つてまつすぐ行くと、破れかゝつた障子に女湯屋と肉ぶとく記されてある。障子を開いて中へ入ると、入口にはつんぼの婆さんがちやんと番をして居る着物をぬいで湯の中に入ると、ズーッと湯氣が立ち昇る、すると破れ障子をガラリとあけて「お婆さん！今日は……………」けれどもお婆さんは、何處を風が吹いて居るだらうと云ふ樣である。
「お婆さんつてば………まあ、つんぼなお婆さんだ事お婆さん／＼」お婆さん始めてびつくり。「えゝッ、な、何てすか？」女は吹き出して「ホヽヽヽ、只子ー今日はと云つただけだよ」と笑ひながら着物をぬぐ。妾は足を洗つて居ると、隣の男湯屋の方でしきりに何か云つて居る。それて聞くともなしに聞いて居ると、愛らしい少年の聲て「君がいくら云つたつて、義經の方が强いぜ」「なあに淸正の方が、餘程强いや」「だつて君、義經は一の谷や壇の浦て平氏を破つたもの」「それ位は誰でも出來らあ。それよりも淸正はあの恐ろしい虎を殺ろしたんだもの、だから淸正は、義經などの及ぶはずはないぜ」こんな事を互に爭つて居ると、突然、一人の若者が元祿ぶしとか云ふものを、うなり出したので、二人の議論も中止されてしまつた。氣がせくと早や風呂塲の前には、大きなランプがともされてある。妾は大分のぼせたので、そこ／＼に湯屋を出た。空には星が二つ三つキラ／＼光つて、淸い滿月は、下界をおぼろにてらして居る。

○小學兒童

北海道　小林喜代乃

或朝非常な寒さもいとはず、少々早めに學校へ出勤しまして二三人集つて居りました。十前後の男生徒をつれて運動の爲め雪の上を散歩しました、ところが或愛らしい生徒の一人が、「先生師範學校へおはいりなさるのは何時ですか」と尋ねました。「ハイヨ來月の四日てす」と笑ひながら答へました。「さうですか」と急に立

ちどまりましたから、何をするのかと見て居りますと、己が前にヂコ柳が美しく咲いて居りました。すると嬉しさうな顔をして其れを折つて居りました、其して今日から「何日ばかりありますか」と、ヂコ柳の枝を五六本持つて私に追ひ着こうとして走つて來ながら、「先生此學校をおやめになるのですか」と尋ねました。「ハイヨもう三日ばかりしましたら此學校を立ちます、そうしてヂ内地へ歸へつてから又學校へ這入るのです」と言ひ聞せました。さう其れでは先生と散歩するのは今日限りですヂーと、さも名殘り惜しさうに曇つた聲で可愛ひ目には涙の露を浮べて私しを見上ぐる樣にして申しました。其の時私は噫實に可愛さうなのは小學校の小兒でありますと何んとなく其無邪氣の感に忍びなかつたのでございました。又殊更尋常一二年の小兒程罪がなく天使の樣な氣がしましてアー愛らしい僞善とか猜疑とか貪慾とか申ます忌はしい鬼はまたあの生徒等の胸中には侵入して居りませんのでありまする。嗚呼可愛のは小學の兒童であります。

お休所　上總　あい子



○ある一夜

名なし草

時計はもう二時を報じた、けれど自分は未だ眠れ無い、胸の中は言ひ知れぬ一種の思がさまよふてをるのである。

噫樂しかりし時と過去の夢。彼の君には異郷の空に如何在ずらむ。

かへりみすれば、幼なかりし時共に手を取りむつましく遊びたりしも…………噫戀しき君はすこやかに在しますか？思へば思ふ程、ありし昔の忍ばれて目はいよ〳〵さえてくる、折から遠く聞ゆる汽車の音も何と無く悲しみを增すのであつた今は其さへ絶へぬれば、せめて夢にだも……　……と寢返りうつて見ても…………

あゝ妾のかくもだへ苦しむのも知らで彼君は安らけく夢路をたどつて居るであらふ。外はしづまりかへり時々犬の遠ぼへも聞えてすごい夜である。

○夫の留守

本郷　新妻操子

『歸りが遅いから待たずにお上り』。と旦那樣がお出ましになる。日のある中に袖丈もと縫物をなす。時計は二時を六分計り前。『お藥書てムいます』と、お靜が這入つて來る。生家から皆無事とのお知らせ。

『お靜』、『何でムいますか』。『つかぬ事を聞くやうだがお前おすもじのつけ方を御存じ』。『おすもじつて奥様、何でムいます』。『あら厭だお靜は、知らないの』。『妾おすもじなんて』。『じやお鮨は』。『まあおすもじなんて仰しやるてすもの。以後はそんな難しい事じやなく分るやうに仰しやつて下さいよ』やつ氣となる。『戴いた事はムいますが拵ひ方は……』。『さう、私もよくは覺えないが、生家に居る時お母さまがよくつけたわ、今是れで思ひ出したから。今晩はねお靜、旦那様が御夕飯を召上らないと仰しやるから不味くたつて好わ、やつて見ようか知ら』。『えゝ』。『何かあつて』。『何かつて奥様』。『油揚は』。『二枚ムいました』。『それ丈じや足りないわ買つておいて、これでね油揚と干瓢を二錢、胡麻と序にお酢も少し』。お靜は出て行く。

私は支度にとお台所に下りて見ると、お晝のお仕末がまだ濟で居ない。チャブ台の上にはお皿やお茶碗が先のまゝ。周圍にはお鉢、俎板、笊と雜然に並べて、流の下には、白いのが大根、人參が赤くと云ふ風に、棚を見ると此の間お客に用つた皿小鉢がズラリ行列して折からの光線がビフ皿に當つて其の光が又燻つた天井を照す。吊した目籠の間から芋の莖が章魚の足の如うに。お釜の前の燃え殘りが風の度に白い灰を立てる。七輪には冷たい網が掛けたきり。何から始めていゝかヲロ〳〵してゐると、忙しい下駄の音、お靜が歸つて來る。『只今』と息を切る。『怎したの』。『お向になくて終々横通りまで、馳足で參りました』。『ホヽ、あの椎茸を買ふのを』。『サー此間のお殘がムいます』。斯うしてまた一騷、八百屋の若衆に揶揄れる。巻鮨が變な形だと云つてお靜は笑ひ通し。漸と出來上つたのがお恥しい様な。『お靜旦那様には秘……』と云ひ掛けた時スーと障子が開いて『これは御馳走様』。と夫。『あら！旦那様が』。『まあ貴郎！……』。

○忍びぐさ

山口酒向とし子

羽子よおてだまよとをとめ子の晴衣の袖ふりはへしも夢の間にて今年もいつしか桃咲く頃とはなりぬいつも乍らうらぶれの身の今宵はいかなればにや唯一の友なる女子文壇にさへも心向はて唯思ひいづるは學びの海のむかしなりけり

師の君始め親しき友どち打連れて木の子狩或はごり引或は芝生につくづくし摘みし樂しさも思へば昔なりしよ數多集ひて祝日の餘興などとりどりに思ひめぐらして入相の鐘つぐる其頃迄も學び家にて語り合ふ折しも寄宿舍の燈火のほの見ゆるにうち驚き話もまとまらでちり〳〵に歸りたるおかしさも思へば同じく昔日の夢よあゝなつかしのむかし慕はしの昔今一度其樂しき昔の來りなばいかに樂しからんものをさは云へど淵瀨常ならぬは世の習ひなれば是非もなし

今は根の片田舍に沈み行く身何とて語ふ友もなく朝に露おけるを見ては便消え行く友を思ひ夕に走る雲を見てはそゞろ昔に心うつりて獨りはかなき思ひに沈むも情なやあはれ敷島の道のたしなみ書の心得にてもあらばつれ〳〵をなぐさまめと思へども何事につけてもせんなき身にしあればいともうらめしうてなん。

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る。

二等

○御褒美

備後國神邊　井上年子

ある所に鶯と、雲雀と、時鳥と一處に棲んで居りましたが、大層仲が宜くつて、喧嘩などは一度もしたことは無く、もう毎日々々美ひ聲で歌など唄つて樂しく暮して居りました。

ある日春の神樣がお通りになると云ふので、大勢の鳥共は皆錦を敷いたやうな草原へ集つて居りましたので鶯や雲雀や時鳥も共に連なつて來て居りました。

やがて春の神樣がお通りになりますと、鶯雲雀時鳥の三羽は美ひ聲を張上げて、お歡迎の唱歌を唄ひました。春の神樣はフトお聞に成つて、

「これ誰か、彼の歌の主を此所へ招きますやう」

と仰言りますので、御家來は畏つて、直と彼の三羽を呼びました。三羽は喜んで春の神樣のお傍近く參りますと、春の神樣は、

「只今の歌の主はお前達三人か」

とお尋ねに成りました。

「はい」

「そしてお前達三羽は一處に棲んで居るのか」

「はい」

三羽は頭を下げて答へました。猶春の神樣は御家來から、三羽の仲の宜いと云ふ事をお聞になりまして、大層御感心なされ、

「誠に宜い心掛、この後とも永久も、仲宜く暮しますやう」

とお賞詞になりまして、御褒美として、鶯には梅の宮を、雲雀には霞の御殿を、時鳥には青葉の城を、皆々下されました。

やはり其の近所に雀と行々子が棲んで居りましたが、是はまた大變仲が惡くつて、もう朝から晩まで夜も晝も喧嘩ばつかりして、仲間の者にも大層嫌はれて居りました。ところが鶯や雲雀の話を聞いて、大層羨やんで、何んでも自分等も御褒美を貰はうと思つて、

「オイ行々子さんお前と私は大層仲が悪いが彼の鶯や雲雀は大層仲が宜くつて、春の神樣からご褒美を頂いたと云ふことだ、私等も是から仲宜くして何んでも一つ、御褒美を頂かうじやないか」

と雀が行々子に話しましたので、行々子もそうしようと云つて、是れから二羽は何時に無い仲宜くなりました。今度春の神樣がお通りになる時に二羽は行つてお歡迎の歌を唄ひました。春の神樣は、

「彼れは何者か」

とお尋ねになりますから御家來は、

「あれは雀と行々子でござります」



と申上げますと、

「これへ招きますやう」

との仰せですから、直ぐと二羽を呼びました。そしてだんだんお聞に成つて居る内、とうとう鶯や雲雀の眞似をしたと云ふ事が判りましたが、春の神樣は、

「たとへ人の眞似でも宜い事の眞似をするのは誠に善い考へじや」

と仰言つて二羽へそれ〱御褒美を下されました。そこで二羽は喜んで今度は眞實に仲宜くなりました。めでたし〱。

（評）教訓的お伽噺の上乘なるものか。

四等

○鳥の音樂

大阪府豊能郡池田町 寺部君子

頃しも春の半ばて、深山の奥の三本櫻は今が眞盛りです、此處へ毎日澤山の鳥が集りまして、春の開けさを思ひ〳〵に唄ふて居りましたが、或日鳥仲間の音樂會を此處で開こうと一同が相談を致まして、遠近に行て居り升鳥にも皆其れ〳〵知らせて遣りました、そこで慌て者の鳶と雲雀とお喋りの雀とが山中を駈け廻りまして、

鳶、ピーヒヨロ〳〵ピーヒヨロ〳〵。

雲、チピ〳〵〳〵チーー、と賑かな音樂隊です。

雀、チユ〳〵〳〵〳〵ツと諸君に申上ます、此度鳥々仲間て、春の餘興に音樂會を明日三本櫻て催す事に成りました、就ましては甚だ未熟な藝てお恥しう御座いますが、陸續御來聽有らん事を一偏に希望致しますチユツ〳〵と、ふれて歩きました、

借て當日に成りますと、彼處の松から此處の松へ紫の霞の幔幕を張りまして、只三本の櫻の木がみどりの中に美くしく花が咲いて居りまして、誠に花やかな會場です、聽者は猪、狼をはじめ狐狸猫猿兎犬鹿等あらゆる獸が澤山集て參りました、如何猛獸も優美い音樂には自然と心も和ぐ物と見えまして、皆々無邪氣な顔を仕て熱心に聽て居ります。

此の會の爲態々大阪の動物園から參りました鸚鵡が開會の辭を述べました、續いて露拂ひに雀と目白が出まして三味線の合奏てす、チユンチユンチユーンと調子を合せまして、四季の音と言ふのを彈きました、

春はのどけき鳥の聲、夏は涼しき鳥の聲、秋はさびしき鳥の聲、冬は悲しき鳥の聲。

次は鳶の舞です、ピーーヒヨロ〳〵と自分で笛を吹き作ら、高く低く自慢の舞ひ振りを見せましたが誠に淋い舞てす、次は美しい雉子が、ケン〳〵と琴の調子を合せ升と、鶯が何日覺ました物か春の曲を唄ひました。

鶯の谷より出づる聲なくば春來る事を誰か知らまし……聲絶えて啼けやうぐひすひととせにふたゝびとだに來べき春かは。

と花やかに唄ひ終りますと餘り可い聲て宜しう御座いましたので見物は我を忘れて、よーー〳〵と譽めました、そして人間てしたら手を叩く處ですが其れが出來ません、其かはり皆々思ひ〳〵になきました、其聲がうは──と恰で鬨の聲の樣でした、四十雀五十雀淡雀の西洋音樂、孔雀の錦の舞、鶴の一聲等中々の見物て

す、郭公の相夫戀鴈の秋の曲は哀に淋うて宜しう御座いました、燕の春雨次に鳩がポツ〳〵〳〵と足拍子を取り作出て參りまして、天人の天降りと言ふのを舞ひました、此は御堂樣の高いお屋根からひら〳〵〳〵と舞下りるのが恰度羽衣着けた天人の樣だと人の言ふのを聞きまして鳩自身が付けた名です。

其から其へと種々ざつたの鳥が舞ふたり唄うたり仕ます、一々藝が終り升と見物がやんやと囃し立てゝ誠に賑かな事です、此を見まして羨しくなつた物か今まで樂屋で出演る鳥の世話を燒いて居りました烏が自分も何か一つ唄つて見ると言ひ出しました、すると傍に居た鸚鵡が、烏さん其はおよしなさい貴烏の聲を聞かぬ日が有ても譬喩に迄出されて居る位ですから出ない方が宜しいでせうと注意を與へましたが、聞きません返つて怒りまして、貴鸚鵡の樣に言へば何鳥の聲でも今迄に幾度も聞て居ませう、失禮ですがあなたの聲でも餘り感心仕ませんが能く何の口眞似でもすると言ふ丈て持て囃されて居るでは有りませんか、聲はまづくても節が可ければ其麽でも有りませんと、自惚れまして見物の前へ出まして、とんまな顏仕て出し拔に常よりも大聲にがあ――〳〵と、唄ひましたので餘りの可笑さに樂屋も見物も一度に哄と笑ひましたので、普通なら眞紅に成る所ですが烏の事ですから眞黑に成て恥を搔きました。

其れから又鸚鵡が出まして、エー諸君誠に未熟な藝を御退屈も無く御聞き下さいまして、烏々一同此上も無く嬉しく存じ升、此を例に毎年會を致ますから相變らせなく御越の程を今より御願ひ申て置き升、偖日も暮れて參り升から今日は是にて閉會に致しますと目出度散會致しましたとさ。

(評) 至つて無邪氣に出來ました。

五等　○路傍の菫

内田しげる

岡山縣邑久郡豐村大字五明、内田鹿松内

野邊の小川に沿うた路傍に一本の菫が咲いて居ました菫は菜種に向つて何か話し出した「ねえ菜種さん今日も暖かくて誠にいゝよ」菜「そうです此暖かい空にこう咲いて居るのは何となく氣がノンビリとして心地がいいよ、私は寒い時分に農夫に植ゑられて二度も三度も雪を冠つた事が有ります非常に艱難辛苦をしたのですが此んなに暖かい春の氣候となつてはもう昔の苦は忘れて終ひますわ、おほゝゝゝゝ」「私は暖かくなつてか

ら生れたのですが不幸にもこんな路傍に咲いて居るのですから人に踏まれますよ・誠に心配でなりませんよ菜種さん貴君は良いねえ私羨ましいよ、人間さんにちやんと畑に植ゑられて人に傷つけられる心配もなく皆んな美しく咲いてお出でなさるねえ」菜「いゝえ良い事はありませんよ」「おや人聲がしますよ」菫と菜種の話は止んだ、すると蝶が飛んで來て「菫さん今ねえ彼處から竹を持つた亂棒な二人の子供が來ますよ、そして路傍に咲いて居る草花を見れば直に打き折つて終ひますよ、貴君御注意なさいよ」菫「注意つて私何うしましようや、こんな路傍に咲いたんですから仕方がない、もう打き折られてしまうわ」と云つて泣き出した、すると蝶は之を慰めて「菫さんお泣きなさるな私は良い事考へましたよ貴君を隠して上げましよう」と云つて蝶は少さい藁片を一配に菫さんに着せた、「菫さん心配有りませんよ少時の間こう仕てお出でよ、私が彼の子供は家の方へ連込んでやりますから」と云つて蝶は小供の前に飛んで行つた、そして小供等の體近く寄つてひら〳〵と舞うた、小供「ヤア美しい蝶が來たよ、ほんなア取つてやらうか、此野郎打ち落してやれゑ」と云ひながら二人は竹を持つて追かける、蝶は、さア此處にお出でと云はんばかりに逃げて村中まで入つた、二人の子供は一生懸命に追かけて居たが「君もう駄目だよ、そんな蝶は捨てゝ置け、馬鹿蝶が」と云つて二人は家に歸つた、蝶は大喜び笑ひながら菫さんの方へ飛んで歸つた「菫さんさぞ苦しかつたでしよう小供等は私が家に歸らしてやりましたから安心なさい」と云つて藁片をのけてやつた、菫さんは大層喜んで蝶さん一命をお助け下さつて有難たう、蝶「いや御禮なんか云はないでも宜しいお友だちですから」と云つて飛んで行つた、菫さんは嬉し泣きに泣いて居た、すると又



風船賣　　津市　越村文枝

蝶が歸つて來て「菫さん向方から今度は三人の少女が摘草に來ますよ、菫「又來ますか誠に不幸な私よ、こんな路傍に一人咲いて居るのですもの直に摘れてしまうわ」と嬉し泣きが悲しい泣聲になつた、蝶は小さい聲で「菫さん苦しいでしようが又藁を冠つて隱れて下さい私が先の樣にして歸らしてやりますから」菫「私苦しいのはかまひませんから隱して下さい宜しくお賴み申しますよ」宜しいと云て蝶は藁片を着せて菫さんを隱してから飛んで行つた、そして小女の廻りを舞うた、今度は少女だけ優しいから小相手にしません、蝶も之には困つたのでわざと少女の體近く寄つた、遂に捕へられた、けれども少女は可愛相だからと云て逃がした、蝶はもう命ないと思つて居たが逃がして貰たので大喜びて飛んで歸つた、すると少女の內で春子さんと云ふのが黄な聲で「私良い菫見つけたよ、之藁片の下に隱れて居たよ、誠に美しい菫ですわ、私摘むのは惜しいわ堀て持て歸つて庭の鉢に植ゑましよう」と云て小刀で堀りかへして持て歸つた、そして鉢に植ゑて暖かい椽側に置いた、「お母さん私良い菫取つて來たよ之來て御覽なさい」と春子さんの聲、お母さんは障子を開けられて誠になア美しい菫ですなア春子さん大切に仕て置きなさいよ」と云て奧に行つた、春子さんも奧に行つた、菫はやつと安心しました、所へ先の蝶が飛んで來た「菫さん貴君良い所にお出でなさつたねえ私大層心配して居ましたが貴君が茲に來られたので私は安心も安心も誠に嬉しいよ、菫「之も蝶さんのお影です先の亂棒な子供に打き折られて居て御覽なさい私は早死んで居るのです、川岸で人通り事に心配して苦しい目をして居た私が此んなお內の椽側に美しく咲く樣になつたと思ふと私誠に嬉しくて堪りませんよ」と茲に蝶さんと菫さんは嬉し涙に暮れました、そして長く椽側で二人は樂しんで居ましたとさ、めでたし〳〵。

（評）新らしき節は見えませんが難のない作です。

秀逸

○寶嚢

備前　村島きぬ

或所に松太郎と云ふ少年がありました、大の正直者で惡げのちつともない怜悧なそれは〳〵善い子でした、しかし不幸な事には兩親共皆亡くなつたので唯一人者となつたのです、內には元澤山の財産があつたのですが次第に貧乏して今ではすつかりなくなつたのです、

別に身寄るべき親類もなく松太郎は漸く十歳の身で哀れな者です、村人でも松太郎を哀れんで時々食物を與へ抔する人もありますが多くの村人は慾の世の中で松太郎を可愛想とも思ひません、それですから松太郎は村人の用等きいて少しばかりの賃錢を貰つてからくも日を送つて居ました、或日の事松太郎は自分に考へ出して一つの大きな凧を製へました、此凧は孔雀に形どつてあるのです、それは竹をもつて孔雀の形に骨組を造らへ之に色紙をはりつけ、尾も孔雀の尾にまねて黄金紙をはりつけて美しく飾り、それを風のくゝむ樣にしたものです、うまい事が出來たので松太郎は笑々しながら家を飛び出て上げました、孔雀凧は空高く舞ひ上つてひら〳〵と舞ふので美しいばかりか面白いのです、之を見た村人は手を拍つて美しい凧だ、面白い面白い如何にもテギワの良い凧だ」とほめて松太郎に賞金を與へる者さへあつた、之も哀みからです．松太郎は凧を空高く上げて居ましたが何うしたはづみか糸が切れて凧は電車の樣な勢で向方の山中の方へ飛んで行く、松太郎は驚りしまして早泣き顏になつて凧の後を追駈けた、凧は奥の方の山中に見えなくなつた、松太郎は泣き出した、自分が紙片を集めて漸やくの事に造へた凧が見えなくなつたので捨てゝ置くのも惜しいど思つたので一生懸命にこちらと思ふ方に向つて山越へ谷越へして行きますと草木のない岩ばかりの山に出ました、ふと思つて向方を見るとこは如何に白髯の胸までたれた一人の爺が松太郎の持て居た凧を取上げてぢつと眺めて居ます、はああのお爺さんは誰だらう、あの凧は、たしか僕のだと思つたので松太郎は、いきなり「お爺さん其凧は私のですよ」と云つた、爺は松太郎を見て莞爾として「はあ之はおまへのかえ」松「そうです」爺「此凧はおまへ何うしたの」松「之は私が造へたのです」爺「はあおまへが造へたとは仲々上手に出來て居る、お歳は幾つだい」松「はい十歳です」爺「はあ此凧は上つたら面白いだらうから、おまへ一つ上げて私に見せて呉れないか」松「それはお易い事です、今上げて見せませう」と云つて松太郎は切れた糸をつないで凧を上に上げた、岩に腰を下して手を組んで見て居た爺は笑々として「誠の孔雀が舞うて居る樣だ實に美しい、之をおまへが作つたとは何うも感心だ、ようこそ見せて呉れた、其お禮に之を上げるからと云つて爺は一つの美しい絹嚢を出して松太郎に渡した。爺「此嚢は寶嚢と云つてねえ口を開けさへすれば限りない寶物が出

るのさ、しかし惡人の手に渡れば此中から魔物が出るのさ、おまへは中々良心者だから此中からはきつと寳物が出るよ、しかし、おまへでも此後惡人になると此中から魔物が出ておまへの命はないのだから惡い事はせんが良いよ」と云つて影を隱して終つた、松太郎は大層に喜こんで其寳嚢を肩にかついで又山越へ谷越へして村中に出た、之を見たのは村で一番ケチな慾男の兵三に萬吉です「これ松太郎さん其嚢は何うしたんだ他のを盜んだのだなア」松「何を云ひなさる、そんな馬鹿な事を云ふなら一つ聞かせて上げう」と云つて先々の事を話した、慾男は之を聞いて松太郎の寳嚢が欲しくなつたが人の物は仕方がない、松太郎は歸つて座に上つて嚢の口を開くと、おや〳〵澤山の寳物がころがり出ました、そして大金持となりました、慾男の二人は此寳嚢が欲しくて堪らなくなつたので或日の事相談して何うかして松太郎の寳袋を盜みとつてやらうと云つた、すると兵三が萬吉に向つて「いゝ事があるよ、今日は内に祝をするのだから其時にあいつを呼んでやるのさ、其時におまへが松太郎の留守の所へ行つてあの寳嚢を取て來ればいゝ」萬吉「成程それは良からう」と相談は定つた、其日の晩兵三は御馳走のこしらへも出來たので松太郎に來て呉れと云つて行つた、松太郎は考へた、あの慾ばりの兵三さんが毎日にない今日は僕を呼ぶて變な事だと思つたので斷はつた、萬吉「内にも祝に松太郎さんの樣な幸福な人を呼べば又内の幸も良くならうからと思ふので貴君を呼ぶのだから必ず來て下さい」松太郎は幾ら斷はつても聞き入れませんのでとう〳〵呼ばれて行つた、松太郎は御馳走になつてから歸つて見ると、こは如何に寳嚢がありません、松太郎は驚りしまして浦に出ると塀の下に煙草入が落ちて居る、取上げて見ると之は萬吉さんのに違ひない、「はあ萬吉さんが盜みに來て落したのだ」と悟つたので直に行つて見ると、おや〳〵萬吉さんと兵三さんは一所に蛇にまかれて死んで居ます、松太郎は驚りしました、之は惡人の手に渡つたからして魔物が出て二人の命をとつたのだと思ひながら松太郎は内に歸つて寳嚢の口を開くと之又澤山の寳物がころがり出ましたとさ、めでたし。

（評）これも教訓的として成効したものでありませう。

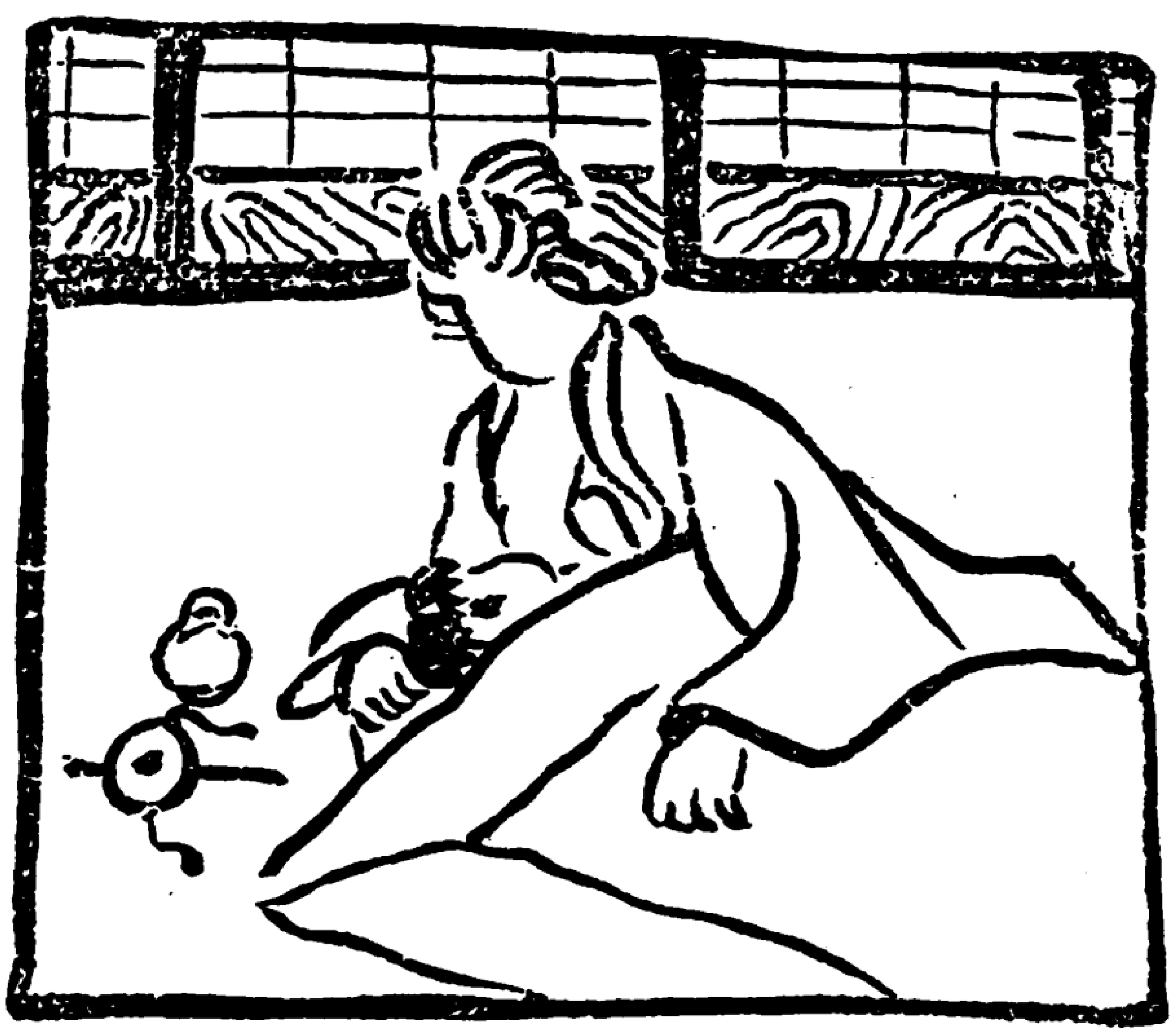
○忠犬龜

岡山市　飯沼順子

ある片田舍に大層狩りをすることの好きな爺さんが

ありました、皆樣も知つてる通り山獵をするには第一に鐵砲がいる、又雉子や兎などを搜し出す狩犬が居るとよく獵が出來る、この爺さんも龜といふ犬を飼つて大層可愛がつて毎年獵の出來る十月頃になると、この龜をつれて獵に行く、其時爺さんの風は舊式の村田銃をもつて脚袢草鞋にしつかり辨當をもつて、取つたものを入れる大きな袋を腰に付けて行きます、爺さんは獵がすきであるから、時によつたら二日も三日も歸らずに獵をすることがあります、爺さんは獵に行て居る時でも內に居るときでも龜を大事がつて孫に多吉といふ可愛い子供がありましたが、それよりも可愛がつて居たです。

　それてある日のこと、雪のチラチラ降るのに爺さんは龜を連れて、今日の樣な天氣工合ならキット獵がさくに相違ないと喜び勇んて朝早うから出て行きました晝過ぎまて山を走り廻りましたが、何も見付かりません、晩までにはシツカリとつて歸らうと四時頃まで步き廻つたがまだ何



そひ乳　長門春子

も見付かりません、爺さんも元氣がなくなり、龜も何だか面白相に飛び廻らぬ樣になりました其內爺さんは餘り寒いから火をたいて溫らうと思つて落葉を拾ひ集めて火を付けました、所が何と思つたか龜が飛びかゝつて消しました、それから袖をくはえて引きます、爺さんはふりはなして火を付けると飛び付いて消す、何度しても消すばかりてあるから爺さんは大層怒つた、又龜が氣狂ひになつたのではないかと恐れて、今日は得物が一つもないのにお前までが火を消すと獵のなかつたのと兩方の怒りを一所にして可愛い龜を鐵砲の臺尻て一息になぐりましたら、可憐や犬はそのまゝそこに倒れました、怒つたはづみに餘り元氣よく打つたからとう／＼龜は死んてしまつた、爺さんは大層怒つて居つたから可憐とも思はなかつたてす、それから爺さんは火を付けましたが、今度は龜が邪魔をせぬから火が付きました、それて爺さんは木の枝を拾ひに其邊をぐる／＼廻つて居る內に火はだん／＼燃えて居たが何

だか大きな音がどんとしましたから見かへりますと、今迄燃えて居つた火は燃えなくなつて、白烟がずつと其邊に一杯に立つて居りますから爺さんは吃驚して其所にいつて見ますと、死んだ龜の頭の邊の土がひつくりかへつて龜の頭はメチャ〱になつてそこに一升桝位の大きな穴が出來て居て鐵砲にも辨當にも土がかゝるやら木の葉の燃えさしがかゝるやら大變です、爺さんは龜を引張り出して、それから鐵砲や辨當などの灰を拂つて、どうした事かとその穴をよく見ますと、それは他の獵人が狐や狸をとるために穴の中に火藥を埋めてその上に狐や狸の好むものを置いて行つた跡てあつた、この仕掛の工合があしかつたから餌だけはとつて火藥が破裂しなかつた、所が火藥のある傍で火をもやしたから、その火が火藥にうつゝて破裂したのだ、この時に爺さんは思つた、可愛い龜が火を付けるのを消したのはこの下に火藥があるといふことを知つたからである、それで袖をくはへてそこで火をたくなと知らせたのだ、それに怒つたり恐れたりしたはづみに龜をとう〱殺したのは大層可憐である、爺さんは泣く泣く龜はわしのために死んだ可憐なことをした、大事な龜を殺した、龜やどうぞ赦して呉れ、赦して呉れ、わしがわるかつた、と死んで灰と土とにまぶれて居る龜の背や足を撫てゝ斷りをいつた、そうする内に日は次第に暮れかゝつたから爺さんは其邊に穴を堀つて、龜を葬つて其上に石を置いて、椿の枝を一技折つてたててやつて、辨當行李の中から御飯を出して龜に喰へとみんな石の上に置いて自分は腹がすいて居るのもかまはず、鐵砲をもつて、其山を下りて來ますともう日はばつたり暮れてどこの家にも火を點して居りました、爺さんは朝出るときにはピン〱尾をふる龜を連て大層元氣よく出ましたが、晩に歸る時には得物は一もなく、龜も連れず、寂しく吾が家に歸つて皆のものに今日あつた可憐な、悲しいとを泣く〱話しました、それから後龜の樣なよい犬を搜して居ましたが見付かりませんでとう〱獵をするとを止てしまひました。

邸苑の花　（前號「文壇の花」口繪原色版の說明）

此の繪はゼー、エフ、ルウイスと云ふ名家の筆に成つたものです。之を描いたのは一八六五年即ち今から三十四年前で、目下はロバート、ニユーシヤム氏の寄贈に依つて英國プレストンの美術館に保存してあります。繪に見える花園はトルコの一知事の花苑て。中に描かれた人物も、又燎亂たる花の色合も、共に題材に採つた東洋風を作者特得の晴れやかな色彩法を以て旨く表はしてあるので有名てす。溫雅な一婦人が、己れの主君たる知事の花園て、手に持てる花瓶に色々の花を集めながら、もの懶き時を過してゐるさまが、能く東洋的の趣を表はしてゐる事を注意なさい。（香）

新派和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る。原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

二等　赤坂區青山南町五丁目五番地　川村尙子

春の雨悲しからずや花となる紅の蕾に槍をもてゆく

三等　芝區中門前町一丁目十一番地　長谷川靜枝

あゝこの世疾く盡きねかし生ける日に見る君をおもへば

四等　甲斐國東山梨郡加納岩村　勝村もりよ

瓔珞は若きひたひに重かりき春の舞殿階のぼるとき

秀逸

福岡縣　神森操子

◎君がため縫へる衣を戲れに着ればよろしもおほらかにして

鳥取市　一色一葉女

◎はつ夏の柑子花さくかぐはしき山路にあひぬ美しき子と

門司　彌吉はるみ

◎紫のからかささして春雨の道をすぎけりみ歌つかひは

下野　三浦玉枝

◎一束の白き菫は流れ來ぬ水上人のなつかしきかな

山口　酒向とし子

◎われ煩悶いだきて夜半の空見れば星は流れぬくらき世界に

板橋　瀨々とし子

◎ときかぬる胸の淋しみ廣ごりてふるやと春の雨をおもひぬ

下總　相川みよ

◎うすものゝ衣をきればくろ髮に吹く風かをる初夏の朝

信濃　馬曲河畔女

◎故郷は蓬の草の風ふけばほのにも匂ふ月夜となりぬ

千葉縣　池上信子

◎梟は日を見て逝きし人の魂木立に入りて啼くと思ひぬ

伊賀　三浦志加

◎紫の天の階くだり來る神の使の雲雀とおもふ

若狹　早水その

◎淸らなる童朝の明星は日の大神をいざなふごとし

名古屋　志水夏子

◎胸の野の奥津城どもは毒草に觸れて死にたる花摘み乙女

大阪　平岡花子

◎きぬ〴〵や小草の露に友禪の袂もうつるあかつきのみち

鳥取　島村ふじ子

◎紅の糸にむすばれ二つづゝむつ語りする春の夜の星

〇 茨城縣 中村香子
ほの〲と明けゆく空のいつしかに霞渡りし東山かな

〇 信濃 露花子
初夏の野風薫ずる古家の椽にわがある朝たのしさよ

〇 本所 秋山欣子
霜凍る山の御堂の如月やうぐひす啼けば君のこひしき

〇 大坂 木村春江
見し夢の行へを思ふ朝戸出や藤花の色のあけぼのゝ雲

〇 京都 中村幸江
蜘蛛の糸めぐりてかゝる白露の光をかしき村雨ののち

〇 遠賀縣 藤村濱邊子
み瞳に心しばられみ言葉におもひくゝられ牢にありぬ

〇 岐阜縣 柘植ちか子
さくらさく山は香りて乙女等はかろき袖ふる春と文しぬ

〇 安房 靜女
梅散りぬ野邊には草の花さきてやよひとなりぬ鶯の啼く

〇 京都 山口愛華
杣人の斧にたふれし白檀の匂ふ宵なり春の雨降る

〇 奈良縣 中富よしみ
こちたくも亂れ迷ひしわが魂は集り靜まりぬ君が一語に

〇 播磨 佐久間紅花
うきおもひ胸にせまりく夕まぐれ忘れな草に涙そゝぎぬ

〇 上總 高橋むつ子
一すぢのみどりの髪を萬金に買へとぞ君は春の街ゆく

〇 横濱 小野美都子
月清し女神みぎはに下り立ちて眞白き胸をしたすゝと見ぬ

〇 信濃 吉川多榮子
燃えのこるいのちの榾火み涙の雨にうたれて消なむとする日

〇 美濃 傍島敏子
春の水うすむらさきのもやたてゝ花野流れぬ下總の朝

〇 青森縣 武田幽香子
少女子が紫の裾さはさはと歩むに似たり浪よするさま

〇 國吉町 今井しげ子
わが姉の墓にまうでてかへりゆく人は誰ぞやおぼろ夜の月

〇 常陸 今泉磯千鳥
世に生きて名も戀もなく去ぬ人のごとくも生ひぬ古沼の草は

〇 下總 ゆき子
春の雨少女子二人紫の傘してすぎぬ花ちる道を

〇 伊豆 上原よれ子
妹とわが梅さく山路越ゑ行けば人待ちがほに鶯のなく

〇 相摸 石井和子
湖の舟に十人の少女子のうす紫の袖うつくしき

〇 靜岡縣 吉川とし子
佐保姫の化粧の水やそそぎけむ野邊はなやかにかぐはしきかな

〇 三河 富美子
春の神常少女なる清き子に一重櫻の花賜はりぬ

〇 豐後 菅原義子
春の山夕は霧のしづくして黒髪ぬれぬ紫の藤

〇 伊豆 加藤篤子
母君のひざによりつつわが姉の舞の秋の美しと見き

〇 鳥取市 小川賴子

わか蓮のしげれるうへを風わたる大沼のうへの有明の月
○　上毛　飯島きよ子

打むれて遊ぶうなゐのさまを見て神の童をおもひぬるかな
○　三重縣　川原操子

そとたちて箏に手ふれぬ鶯のはつ音にかよふ調やあると
○　牛込　佐藤ふさえ

幻のなかに匂ひぬ小扇の端をこぼるゝ髪のさゆらぎ
○　石狩　小田たみ子

世にはまたまさるうれひの人ありて泣くやをおもひなぐさめて居ぬ
○　上總　鈴木梅子

宵闇をわづかに草の香をとめてわれはいそぎぬ君が戸までを
○　熊本縣　富丸貞子

つくしがた船のしるべの燈火もけおさるゝまで明星光る
○　千葉縣　高梨芳枝子

罪もなう小猫眠れり妹も眠れり白の桃の花ちる
○　下總　三橋千代子

よろこびの花はひらきぬ胸の野によきそよかぜのふきし朝より
○　飛驒　千代子

たらちねはえにしと云ひてよろこびぬ二人をつなぐ紅の小糸を
○　京都　大井順子

白百合の朝の香かをる君が園神の少女も生れいづらむ
○　群馬縣　大沼染子

山の日は寂し老い木の枝洩れて我がくろ髪にみだれてひかる
○　羽後　柳子

只一人夕ぎりの野に佇みていにしへの歌われはおもひぬ
○　秋萩

あるよひのやさしき鐘の音ゆゑに幾夜野に出てさまよひぬらむ
○　千葉縣　牧野とよ子

美しきよき雲なびく南の國を思ひて涙すと云へ
○　沼津　渡邊とよを

机の上にかをれよ我が心こめてつみける花すみれ草
○　京都　宮原みどり

油壺小法師もちて黄昏の街をゆくなり上京にして
○　神戸市　三日月堂那美子

白蓮の花の奥なるおん堂の佛龕古りぬれ千年の寺
○　磐城　鈴木靜子

二月や城かげうつす濠水に芹の葉青み小雨ふるかな
○　越後　横山文枝

うねりたる菜の花道を乙女子のつくし摘にと籠かざして行
○　伊豫　福井白百合

大なる日の猛威にあめつちの燒けて煙ゐや春の朝霧
○　遠江　菊笠みつ子

春の朝こひしき人と相並び遠き白帆を見てよろこびぬ
○　豐後　木の花

紅の焔の幾萬一時にきえしと思ふわかれし人は
○　丹波　齋藤笑子

ひら〳〵と梅の花散る細道に琴の音きゝぬおぼろ夜にして
○　北澤白雨

御胸の忘れな草はとく枯れて瞳冷めたき君とはなりぬ
○　信濃　太田鶴子

心あらば我想ふことのせ行けよ君ます空に馳する白雲
○　長崎　一瀬白菊子

若き尼しづ心なくちる花をゆきすぎがてに涙して見ぬ
○　西川縫子

吾胸をきずつけざりしにくき子のやさしき影ゐ忘ら得ぬかな
○　南豐　藤の家るり子

忘れたる思ひも胸によみがへる薔薇の色の雲を見るかな
○　京橋　野澤光子

水車めぐるひびきのきこえきてのどかさましぬ川添の里
○　紀伊　室井白蕣

四阿に君の琴してわれ呼びぬ池に緋桃の散りうく夕

短篇小說

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小說を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以內とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

二等

○發明家

岩代國須賀川　服部貞子

私が以前、郷里から三里ばかり離れた或る田舍町の小學校に奉職して居た頃、野澤といふ家の二階の六疊を借りて自炊して居た。

野澤の家内は、今年から六十にはしが出たといふ主人の藤兵衛に、その家内のお袖といふしやんとした婆さんの二人ぎり。娘は當町で可なりの呉服商に嫁して居て、布哇に出稼ぎに往つて居る倅のところからは毎月の送金がある。それを一文も手をつけずに預けて置いて、二人は二棟の長家から上る屋賃と、其肥料代で充分に暮してゆかれるといふ、至つて内福な家であつた。

極く早起きなお爺さんで、さら〳〵と軒に音ある雪の朝など、目覺めても起るのが辛さに猶仰向けになつて居ると、階下では定つてごほん〳〵と咳入る音して「婆さん〳〵」と呼び起して居る。私が手拭と楊子を持つて降りてゆく頃は、昔の目あかし頭巾を切つて縫つて淺くした茶色の帽子に、ネルの襟卷をスポリとかけて「豪い大雪になりました、はい〳〵」などゝ鐵色の寢ン寢着や前掛に附着いた雪を拂つて居る。井戸端までの道はもう整然とつけられてある。

先入主となつた思想を脱くことが出來ないで、憎いと思つた人は何處までも惡み、はじめ善いと思つた人のすることならまた、何でも彼でも善意に解してしまふといふ性質で、すべてが自慢好きな、煽動てられて喜んで居る人の善いお爺さんだつた。

お婆さんはなか〳〵口の八釜しい、併し口ほど腹は惡くない人で、何でもお爺さんの云ふことに反抗て見るのが癖だつたが、それも何處までも然うといふのではなく、大聲にでも怒鳴られると、其まゝもや〳〵と同意してしまふといふ風だつた。

長家は一棟を五軒に仕切つて、都合十軒になつて居たさうだ。借家人の多くは煙草職人や日雇ひのやうな

其日稼ぎの者で、月末になるとお爺さん自らが催促に出掛けて行く。「皆どうも狡猾くて足を運ばせてばかり居て困る」と口癖のやうに言つて居た。時たま夕暮れになど、青い顔の女が腰をひくゝして入つて來て、上り框に白銅や銅貨の幾何を並べて、何やらくどくどと言ひ譯らしいことを言つて居るのを見たことがあるが、恁んな時にお婆さんはいつも臺所で鍋の音をカチカチさせながら、頻りに物價騰貴の折からを口にして、「……全くさう溜められちや堪んねからない。今一月分入金たところで、あともう二月分も溜つて居るんだぞい。せい〲骨折つて入金て貰あなくちやあ仕様がないから……」な



どゝ小言を云つて居る。椽側にはお爺さんが硯を持ち出して、大きな球の眼鏡をかけて、ひどく筆の先を握つて覺帳に書き入れて居る

或る日曜の午後だつた。

お茶が淹つたからと招ばれて、階下の長火鉢の前で柿餅を燒くお婆さんの手許を見ながら、一寸賞めた鉢の木から、話しは盆栽のことに遷つて、其長いのに困つて居たところへ、格子戸をあけて一人の男が入つて來た。廣い額に一寸くぼみのある目のぎよろりとした男で、薄汚い縞の筒袖の羽織を着て居た。私は直ぐに二階に上つて格別氣にもとめなかつたが、暫く經つてから一寸用があつて降りて來

た時、じろりと私を見た其目が何となく氣味惡るく思はれたつた、言葉の樣子では奧のものらしく、感心して見入つて居るお爺さんの手の、一葉の寫眞を煙管の頭で指し示しながら、稍々せつこみ氣味の調子でこんなことを言つて居た。

「……へえ其處んところが其齒車仕掛けになつて居るのですて、此處からから葉を入れると、それそこの鉋丁見たいなのがかう落ちて來てそれを刻むやうになつて居るのですな。まだ完全にとはまゐりませんが遠からず……へえ其處が葉の落ちて溜るところ……其齒車のところを今少し、今工夫中なんですがな、當町の田中樣なども大層お贊成下さいますて、お忙しいところをわざ〳〵お光來下さりますたり、なんしても此町から其樣な發明が出るのは殊に名譽だからと仰言つて、他日それが完成の曉には是非とも專賣――といふやうに取り計らはうからなど〻、へえいかいご盡力下さいます。兎も角も世に紹介してやるからと仰言つて、二三日前お知り合の新聞屋さんに賴んで下さりますて、へえ……」

それから暫く經つて男が歸つたあと、階下では何やら大聲に言い爭つて居たが、やがてお爺さんは何處かへ出掛けていつた樣子、間もなくお婆さんが二階へ上つて來た如何したことかと聞いて見ると「何ね貴女、家のお爺さんにも困つちまひやすよ、あんな香具師のいふことなんて本氣にしてるのだら……あれは貴女長家の者なんでつさい、去年の秋から貸しとくのですが、夫婦二人で子供はなし、あらく都合がよくつて貴女、新らしい疊は敷く立派な時計はかざる、一頻りはほんに大臣どんのやうな暮しをして居やしたが、さうして何にも爲ずに贅澤語つて居るうちにすつかり喰つちまつてあとはまたもとの木阿彌でつさ、なんでも何とかの器械を賣る手先を遣つて〻其代價を着服つちまつたんだなんていふやうな話でしたつけ。すると今度は貴女、桑切る器械を發明するんだつて氣違ひのやうになつて騷いでるんでつさい、お陰で屋賃はもう二圓幾らつて溜つてるんですぞい、それを家のお爺さんたら宜い氣になつて彼奴の口車に乘つて出來上つたら大したもんだなんて言つてるんですもの、他の者の爲めになりやせんわ!」一息に辨じたて〻さて一寸口を噤んだが、「ねえ貴女、あんな顏して〻發明なんか出來やせうか?」それでも幾分か、若しやといつたやうな氣持ちでもあるか、「さあ」と行き迫つた私の顏を讀まう

とでもするやうに凝乎と見て居る。したがまた「よしや出來上つたところで一臺幾何つて大分費るさうなんですから、高が貴女、桑切る器械一つに五兩の十兩のつて出す馬鹿が何處の國にありやすい、ほんに馬鹿馬鹿しい話なんてつさ」とさん〳〵に罵しつて降りて往つた。

それから二月程過ぎたが、二人は時々いつも其事でばかり衝突して居た。同じ長家に長さんといふ、片眼の男が住んで居た。親の代から此處に居て洋傘の張替へを業として居たさうだが、至て世話好きな男で、字も可なりに見えるところから、何かと常に長家中の世話を燒いて、大家の方でも借家人の選擇は長さんに委して置くといふ位、なか〳〵の勢力があつた。此男がまた大へんに隣家の男を憎んで、屋賃を屆けに來た折折はよく其讒訴を語つて居た。非常な煙草ずきでお婆さんの置いた長煙管を引きよせながら「なにゝしてもてゝは金が殘んねなんて言つてる位だからハ、、、、隣家の先生は大金持になりやせう、常に普通なことし子育て桑の柔いやつを、ぎし〳〵器械で揉まれて堪るもんですかい、甘めい油が皆奪れつちまはあね、彼奴夢い見てんだから……」などゝせゝら笑つて居た。

お爺さんはまたそれを、あの男は他の借家人のやうに長さんに首を下げないからだと言つて居た。

月日は用捨なく經つて農家は忙しい養蠶時となつた町役場の旗竿に、天氣豫報の旗が赤や白と毎日取り替へられて、春蠶は二度の眠りを起きたが、桑切り器械はまだ完成しなかつた。

私は其翌月今の學校に轉任となつた。

取材が新しいのが何より嬉しい。それに、觀察が正しく、描寫も好い、描かんと欲する所が可なり描けて居る。老爺や老婆や、さては發明家や長さんの性格も能く出て居るし、其周圍——田舍の些つと有縮な老人夫婦の生活の樣が、目に見えるやうだ。一人稱になつて居る作者の態度がすつきりして居る。餘程なれた書方である。（評）

三等　○歸路

松山市二番町富田方　草村瑩子

燈が美くしく點いて、人はみな醉えるが如くゆく。曇つた夜だ。自分もふら〳〵とあるいた。何となく物足らぬ心地がする。夕食はまだくはぬ。

どこかの縁日でゞもあらう、人通りがいつになく多い。曇つてはゐるが、空にはほのかな明るみをもつて橋際のアーク燈が、紫白く、息づくやうに、暗らくなつては又明るくなる。

『何にしても早く會社を出なければならぬ』とふと思つた。自分にはあんな業務は到底適せぬ。毎日、帳簿を繰つて、算盤を彈いて、ペンを握つて、そして折折はそつと掛の顔色までも窺うて——どうして反抗心の強い、將來に大きな希望のある、若い人達に出來ることでない。

よく勘定も合はないで、幾度も〳〵やり直して、仕舞には涙がとめ度もなく流れて、ひとり唇を噛んだこともあつたが——何にしても早く會社を退かう。

濛々と砂埃が立つて、空が仄と白く見える。電車はベルを鳴らして、しつきりなしに往來く。

『早く歸らう』急ぎ足になる。

いそ〳〵と迎えてくれる、若々しい妻の顔。それが今の自分には、唯一ッの慰藉だ。早く歸つて夕飯を食はう。

此頃の自分は、もうすつかり、會社員風の男になつて了つた。どんな事があつたつて、涙も出ない。腰掛のつもりで、早く出やう〳〵と燥つてゐた、それが追追に緩るくなつて、白足袋も角帶も、もう平氣だ。折折は、自分で自分が腑甲斐なく、齒痒ゆく、腹立たしくなつて、斷然出やうと思つたことは幾度もある。そして今に出ない。『斷然出る』は、全く自分の口癖に過ぎなくなつて了つた。何等强い感動を與へなくなつて了つた。早く歸らう。

『一寸待つて下さいな。』

甘えるやうな女の聲、自分かしらと、はつとして振りかへると、丸髷に結つた廿四五の、初々しい、妻君らしいのが小走つてくる。

『ほんとうに酷いわ。』

自分の傍を通りぬけると、忍びやかな、好い髮の油の香が鼻をうつ。

『本當にしどいわ。』

息ぜわしく同じことを云ふ。見ると自分の十歩のさきを羽織をきた男がゆく、大方良人なのだらう。ぴつたりと寄りそつて、女は夫の顔を仰ぐやうに、

『あまり何だから見惚れてる間に、置いてきぼりにして、まあ……。』

態と怨めしげに、嬌態をつくつて、

『妾、もうちつとで、迷子になる所だつたわ。』

可笑さうに高く笑つて、樂しげに話しながら、縋るやうに並んでゆく。

はげしく内心に、何物をか欲するやうな、物足らぬ

一種の渇を覺えて、そして、『早く歸らう。』と、聞こえる程に呟やいて、脚は劇甚な官能の力に、大股に動かされてゐた。

波のやうにゆきかへる、緣日の人ごみを分けて、只早く歸らうと云ふ思ひの外、何物をも考えまいと力めて、妻の顏を思ひ浮かべ〳〵歩いていつた。

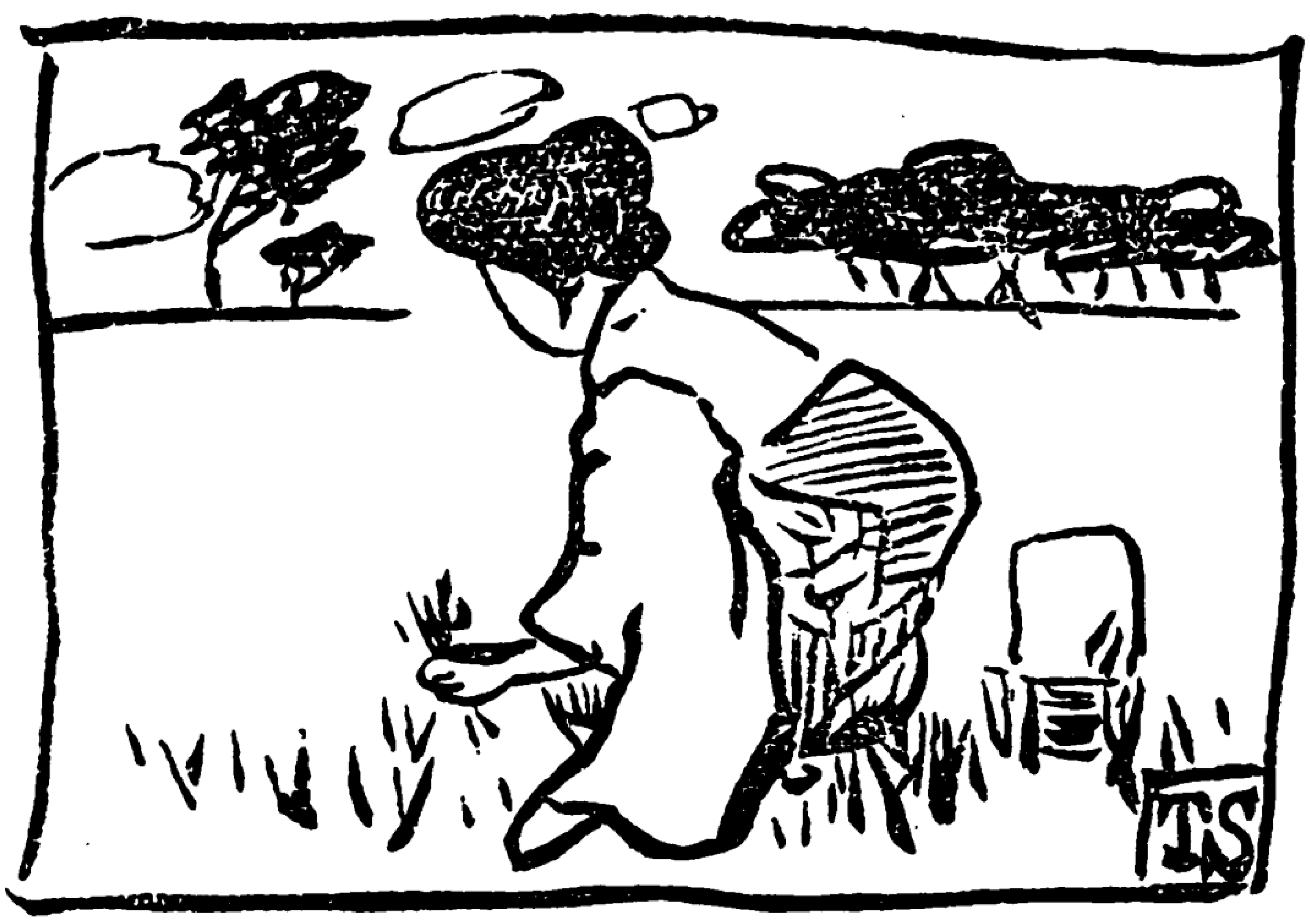
イラ〳〵した近代的の男を主人公にしたのが新しい。それに、己が平凡に倦んだ會社生活からの歸途、仲の睦まじい夫婦の樣を見て、何がなし漠とした嫉妬を起し、內心一種の渇を覺えて、妻の顏を思ひ浮べながら歸ると云ふ主人公の心持も自然だ。好い短篇である。（評）

四等

○お時さん

神奈川　歌子

それは、從妹の民さんが死んで間もない事、仕立屋のお時さんが、久振で、尋ねて來た、お時さんは、襟足の、美麗な、色の白い眼の切の長い、何方かと云へば仇つぽい方、常も元氣のいゝ聲で『お文さん居るの？』つて云ひながら、無遠慮に這入て來るのだけれど、今日は始めつから、妙に沈て、油氣の無い髮を、杏銀返しに結て、二筋三筋、鬢のおくれ毛が、青白い頰にかゝると、それを口惜し相に、ブツリ〳〵と前齒で、かんでる、



つみ草　横濵　鈴木かた子

『お時さん、何うしたの、嫌に沈んでるぢやないか』と云ふと、氣が付いたと云ふ風に、わざとホヽと笑て

『そう？そう見えて？別に沈んでやしないけど……』斯云て思出した樣に、『あの貴女の從妹さん、何とか云つた、あゝ民子さん、あの方の兄樣のお友達に、岡樣つて方が、ありアしなくつて？』と云つて伏眼になる

岡、岡と云へば、民さんが其名丈で赤くなる其人、今年高等商業を、卒業して、今は家に遊んでるとか、何にしても、てきぱきした、男らしい人、其癖誰にでも優しくつて、何となく、なつゝこい樣な人だ、恰度民さんの亡くなる少しまへに、民さんが全然、私に岡さんとの關係を、打明けてくれた、それは結り『岡さんと私とは（民さん）口てこそ、誓はないが、自然の中

に、暖かい戀中となつた、それは兄さんも知つてるけれど岡さんの、此頃の冷淡さと云つたら、本當に口惜しい樣、併し私は怨まないの…たゞ何してあんな心になつたのだらうと　思つて、情けないの…』つて痛々しい樣に痩せこけた頬に、ハラ〳〵泪を流してたあゝあの岡、それを、何して時さんが知てるのだらう、何うして私にきくのだらう…『岡さんて人、私よく知つてるの、民さんの兄さんの、お友達で始終、遊びに來るんだもの…』『あゝ矢張りそうだつたの……』とお時さんは、忙しそうに、毛繻子の襟かき合せて、其手を帶の間深くさし込んで、又考へ込む、何うしたのだらうと思つて、『お時さん其岡さんが、何したと云ふのさ』と云ふと『イーエ何うしたと云ふわけはないんだけど…その岡さんが、よく家の二階の原さんつて云ふ人を尋ねて來るの、そして、私の事なんかいろ〳〵深切にして下さるの…だもんだから私も……』こう云つてサット頬を染めたが、又大急ぎで、『でも誰にでも優しいんだワネー、それでも、何してだか私あの方、好きなの、…で毎晩の樣に來て下さるの、それだのにネー此頃は、何うしたのか、一寸も來て下さらないので、變だと思つて、もしや御病氣でもあるんぢやないかと、餘計な心配までしてたの、すると、昨日突然に手紙が來たの、…まア其大體は自分のそれこそ深く思ひ合た戀人があつたんだつて、それを、お時さんなんて者があつたゝめに、其女につい疎くなつてた處、其女が、不圖病氣になつて一度も見舞にもゆかない中に、可哀想に、死んぢやつたんだつて、…而して、死んで終たあとで、實にすまぬ事をしたと悟た、とこう云ふわけだから、其人の爲に、お時さんとは、聖く別れるつて云ふの、人馬鹿にしてると思つてチーお文さん、私ア口惜しいの、…否捨てられたのが、口惜しいんぢやないの、其死んだ人の心を察してネー何んなに、口惜しかつたらうと、思つて、何故そんなら其樣に、云つてくれなかつたのだらうと、思つて、…而して其女と云ふのが、もしやあの民さんぢやないかと、何だか氣になつて堪らず…お文さんに聞いたら分かるだらうと、思つて來たの、後生だワ、民さんと、岡さんと、關係があつたんだか、何だか、眞個の事、をしへてよネー』と、きけばきくほど意外な事ばかり、あの可憐らしい、民さんを失意させた其人が此お時さんだなどゝ夢にも知らなかつた…『まアそうだつたの、少しも知らなかつた

の、エヽそれア貴女のお察しの通り民さんに違ひないわ『矢張りそうなのあヽあんな可愛いヽお孃さんを、本當に罪だワ、岡さんも男らしくもない、私だつて氣持が惡いワ、…あヽおもしろくもない——男なんてものア皆こうしたものかネー』口惜し相に云つて、五分玉の笄で、癪だと云ふ樣に、ゴリ〳〵頭をかく。

寫生文脈の勝つた、きび〳〵と明るい文章で小氣味好く書かれた。然し今少し新しい方面へ眼をつけて欲しい。(評)

秀逸

○食客

本郷　筆子

氷雨の降る黄昏、包を抱へ、小さな洋傘に、びつしより濡れて正一は、中原新之助の家に來た。姉の澄子が嫁入つた先で、某保險會社員の主とお紋と云ふ六十近い、眼の窪んだ底意地惡る相な老婆との三人暮してあつた。

正一は、釣洋燈の薄暗い茶の間に導かれる。義兄は未だ歸らず、姉は久し振りだのに、元氣の無い顔をして居る、老婆さんが、何かぐと〳〵云ふが、正一は夢の樣に茫然して、唯一々御辭儀ばかり爲て居た。

一人、父母に別れて、涙に霞む筑波の山遠く、故郷の土浦を後にして初旅の東の空、十八の少年が、自ら郵便局に勤務の暇に勉强爲樣と決心堅く、暫時中原に食客たるべく出京したのである。

姉は屹度喜んで迎へて呉れるだらうと、汽車から下りると、直に斯う豫想したが、然るに姉の對度は少しく正一には不滿であつた。あの凉しい聲で、あの美しい顔に微笑んで「正ちやん……」と先の樣に手を取つてくれるだらうと、そゞろ懷しく格子をあけると、迎へて呉れたのは矢張り、姉だつたが、「まあ、善くねえ……」とばかり、淋し相な顔付であつた。

正一が恁麼事を思ひ亂るゝ耳許に。

「郵便局へ出られるのかね」

と突然訛りのある聲が爲たので、はつと爲た顔を姑のお紋が、ぢろりと見て、

「感心ぢやのう、澄さんなど、此の子から見ると幸福な事ぢや」

「……」澄子は默つて、丸髷の遲れ毛を掻き上げ、雪の樣な三つ襟を見せて、俯向いた。

「御厄介に成るです、何分願ひます、」と赤くなつて正一は又お辭儀を爲るのを、

「はあ」と鷹揚に點頭いて、「私の宅へ來なすつたら掃

除から水の一二杯も汲んで下さる樣にの。」

「はい」と堅くなつて、膝の當りを見詰めた。

「未だ意氣地がなくつて、本當にお姑さんのお世話樣で御座いませうが、私からも何卒お願ひ申します」澄子は扣へ氣味に、始めて口を入れる、

「はい、まあ、私は隨分口喧しいので、ほゝ」と長煙管で一服、南部の鐵瓶、松風の音を立てゝ、外は軒打つ雨猶しとゞに、窓のわたりに小犬が鳴く。

疲れて居るだらうからと、姉に連れられ勝手の傍の二疊――正一が部屋と定めたのに來た。

洋燈を隅の棚に置いて、久し振りの姉弟は、宛も籠をぬけた、鶯が花咲く野邊に廣々と羽根を伸した心持で懷し相に顏を見かはした。

家に居た時は、血色も、もつと善かつたし、もつと、丸顏で、愛嬌のあつた姉さんが、奈何して怎麽に窶れたらう、「姉さん！瘦たね：：」と正一は染々。

「さうかしら：：」と澄子は、わざと頰を撫でゝ、元氣なく莞爾する。

「愁らいの？姉さん！」

「あの、正ちやん什麽事があつても、怒つたり、國へ知らせたり爲ては不可なくつてよ。」

「え：：」正一が云はふとするのを口早に、

「だけれど、正ちやん本當に苦學するの？」

「苦學爲るです！」と正一は濃い眉を上ぐるを、凝と見て「可愛相だわね、せめて私でも力になれるんだと、可いけれど：：」と藤色の半襟深く頤を沈めて、ほろりと雫した。

正一も悲しくなつた、自分は今日から食客である、愁い事も腹の立つ事もあらう、其中に苦學しつゝ行くは宛も淋しい一本道を、とぼ〳〵とたどる樣。

樂しみにして姉に逢へば、思ひがけず沈痛な人になつて了ふし、さらぬだに結び馴れぬ草枕、浮世の旅が暫の宿なる今夜は如何に：：急に胸が迫る折節、咳が洩れて「澄さん〳〵」と姑がけたゝましく、呼び立てたと、澄子は慌てゝ「正ちやん、屹度何でも辛棒してね：：」と念を押して、とつかはと出て行くを、正一は淚ぐむで見送つた。

「既う、新之助が歸るに、何して居なさる、弟が那麽に珍らしいかよ」と咬み付く樣な姑の聲、正一が吃驚すると、隔ての椽に澄子の鼻を啜るのが聞えた。

正一はむら〳〵と不快な感、あゝ自分は食客だと、頭を押へて突伏した。

雪消を分けた若草は、風に雨に世の味を知らねばならぬ、明日よりは、そも什麽運命が來るのであらう。

しんみりとした、如何にも女らしい筆致である。之れから食客にならうとする正一の感じも、姉の境遇も、老母の氣質も、さては其一家のさまも、一通りは書けて居る。されど、惜しいことには材料が古い。（評）

○野分

三河　星華子

ある眞理—極く幼稚な—と言つた樣なものが、漠然と不規則に腦裏に浮んで來るをがある。同時に輕い眞摯と矜傲とが緩に渾身を環る。今日のは正にそれだと思ひ乍ら彼は事務室の扉を輕く押した。同僚の誰れ彼れは皆彼の現在の人格を讃美するかの樣、—否寧ろ畏敬るやうな瞳光と面色とを以て振返つた。

無言！頰は仄かに熱し、肉が適度に膨脹して、壓したら黃い痕印する樣な心地。彼の平常にしては、驚ろく可き沈着な歩調で其所の椅子に凭つた。



力士　備後　田邊むや

と極端から極端へ奔る彼の性癖は、この靜穩な態度を可批がる樣に覺えて、不安の念が胸中に溢る丶許になつた。

彼は瞳を轉じ、彼に對し屢々憎惡の相を示す同僚の一人を睨める程の強い瞳で睇視た。しきりに事務を執つてゐる。彼の睥睨に些の顧眄をすら與へぬ。不滿の想が、然らでだに亢奮つて彼の感情を激しく刺戟して、彼は仰向き乍ら「フヽン」と聲に出して冷笑した、それは恁うした場合敵に克つ唯一の手段だ。

事を挑んで、何等の反抗の無い時程、内心の不平均を覺ゆるとはない。頭のみ獨り昂奮して、全身の血汐が緩急一時に打ち上げて來るやう、その癖四肢は平常以下のゆるやかさに皷動のみ忙しい。

軈彼は机の抽斗を開けて、繪葉書やら端書やらを掴み出して、一氣に八枚ばかり書きなぐつた。同時に彼の亢奮つた感情は稍覺めて、最後に、斯る時唯一瞬と思はるゝ程の眞面目に於て、端書で最も親しい友へ「予は予の眞摯なるとを自覺す。世は形式なり。」と二行に書いた。而して、始から繰り返し讀んだ。揃へ乍ら彼の唇は確かり結ばつて、何時開くとも分らぬ程の沈着を成つてゐた。

端書を懷中すると共に彼は椅子を離れた。何事も言ひたくなかつた。殆ど無意識に事務室の扉を開け、其の足で『よし』『惡』兩線の交叉點にゐる樣な心地で、手を振り／＼急ぎ宿へ歸つた。

彼は彼の部屋の戸を開けるか、自棄に机の前へ座つた。手を膝の上に張つて、眞直に瞳を据ゑ、何事も思はず霎時ゐた、爐の火に室内は少し蒸して、何事も思はぬ腦裏は、一所に据つた瞳と共に、あらゆる萬有と何の交渉もない樣な心地、──それすら意識せぬ。

突然、窓の戸を鳴らして疾風がけたゝましく過つた。韜れて、忘られて、無差別界にかゝつた渠の感情は、野分に吹かれて靜まつた落葉の、再び野分に吹かるゝ如く、一齊に頭を擡げた。而して、かゝる時何人も發す一種の反撥心─極端に亢つた感情を蒸す程の溫味で壓しつけやうとする可批さ、悶えを忘るべく、何か力強き抵抗物へぶつかつて見たい樣な、さうした心に驅られて彼は屋外へ出た。

日が落ちて間の無い頃だ、墓地の周圍の木立を透けて殘照が冷く寂寥てゐる。道は適に野返の人の往來がそがはしい。轍の音が轣轆と近づいて來る。子供の叫喚聲が、路の終と思はるゝ邊で聞える。縣道を横斷時灯の無い暗い家へ歸るとも思はるゝ、空畚を荷つた、襟卷にくるまり、草鞋を地に擦り／＼ゆく男に出遇つた。胸を張つて「何事とも交渉なし、何事とも交渉なし」と意識し乍ら歩いた。

滑な、黒い塵氣のない道路を一町もゆくと家は盡て坂になる。若い男を先にたてゝ、中年の男が二人、土車を曳いて坂を上つて來る。

坂の盡た所は最う祐濱だ。脊後の方で、森を渡る風の聲が聞える。海は藍い潮を流して鳴てゐる。次第々々に罩めて來る夕闇に、波の腹が白く氷の如く冷たい。

今度は野を横斷て風に吹かれて歩いた。褐く霜枯れた草道をせつせと歩いた。丘の下の孤屋が、田面と崖をなして、その崖の中程に褐い井桶が浮んで見える。彼

が其下道を過る時、スーと突鼻を啜る聲がした。つゞいてハ、、、としまりの無い古女房の笑聲がした。細い流れに架つた板橋を渡ると、丘と丘との間を小川に添つた尾花の道が小二丁。蕎麥の花の咲く頃は、よく夜鷹を見た丘へ出た。

日は全く落ちて、貼り着けた樣な灰だめる雲が天末に棚曳いて、月もない向ひの丘が寂寥と、墓地の雜木林の方で、寒さうな小供の泣聲が聞える。

道の兩側は桑畑だ、風が吹く度に、葉が其の殘骸を空にひらめかすか、さらぼひ乍らも離れじと焦燥る葉がかさ〳〵と皺嗄れた聲で叫んでゐる。

しばらく行くと丘は了る。其所の萱屋の横手に、棕櫚と山桃とが鬱りと、搖ぎもせずに茂つて、其の間を透けて、星が一つ微に瞬いてゐる。そして何ともいへぬ溫味さが、風に冷たくなつた皮膚に迫るを覺えて、彼は急に人寰がなつかしくなつた。而して、足の浮くやうな、肩の昇る樣な心地で、手を振り〳〵、夕暮の道の一種哀愁の趣の中を歩いた。

心理描寫の勝つた深みのある作である。文章は能く整つて居るが、型に入つた氣味がある。家を出てからの主人公の心持と遷り行く景色の調和が好い。が、所々に妥當を欠いた語句があるのが目障りだ。が、思ふに此作者は餘程進んだ頭の人であらう。（評）

○春の日

尾張　成田石子

「まあ、眞實に克く來たのね、お美枝さん」

手早く仕立かけの夫の袷を押やり、取散つた四邊をそこはかと片付乍ら、斯う言つた多賀子の滿足と嬉びは明々と眉宇に現れて居る。

「お美枝さん、久濶だつたのね、」美枝子は勸めらるゝまゝ火鉢を挾んで向い合せに座りながら妙な目付で。

「あのお姑樣、在宅？」と聞く。

「いゝえ、今日はね朝から義姉樣處へ行つて留守なの」

「まあ、恰度よかつたわ」と妙に身體をゆすぶつて、

「どうせ御泊りでしよう」「えゝそうらしいわ」

「道理で誰樣やらのお顏が暢然してると思つてよ」

「まあ口の惡るい覺へて入らつしやい」

とにらむ眞似する「あら、怖かない事」と此方も笑つて顏をおゝふ、多賀子はたぎる鐵瓶の湯を急須に移しながら、

「お美枝さん、てすからね、今日はゆつくり話していらつしやい」

「有難う＝妾……」急に思ひだしたように、

「貴女に御相談したい事が有つてよ」と眞面目に美枝

子はいふ。

『そう、どんな事？』と多賀子は次の言葉を物待らしう、凝手と凝視て居る。

『あら、そんなに改まつて、妾、言憎いわ』

『まあ、何に、さあ、早く仰しやいな』美枝子は妙にはにかんで只多賀子の顔を見て輕く笑つて居たが、衝と決心したやう。

『妾、近い内に結婚する事になつたの』ともう眞赤になつて居る。

『あら、眞實？お目出度いわ、そして先方は何處？會社の松永さんだつて、まあ、そう』

『貴女どう思つて？』

『羨ましいのね。』松永其人の地位と人格は多賀子もよく知れるものから別に異存のあらう筈なく、且つ己が現境に想ひ至りて、其家族の遠く故郷に有つて今孤獨である其一事が如何にも羨望に堪へぬやう。

『幸福だわ』と泌々いふ『あら』

『ほんとに妾、夫婦限りて暮せるんだつたら、其れてそ、お金も地位も何もいらないと思つてよ』

美枝子は此言葉を解し兼ねてか、いぶかしげに目を見張つて居る。

『そんなに氣苦勞が有つて？』

『有る處ぢやあなくつてよ、妾、もうつく〴〵嫌になつ了ふわ』思ひだしてもぞつとするといつたやう、多賀子はいつか深き憂慮に沈んで、やたらに火鉢の灰計り掻回して居る。

『此方の御姑樣見たいな方も澤山はないわ』

『眞實にね、いくら縁だと諦めても、遂ひ愚痴になつてね』學校時代に夢見た、家庭美――の醒めては餘りに儚ない今日の生活を顧みては、一途に美枝子を羨む心が増す計りである。

『お美枝さんこそ屹度、ホームの溫い光に醉ふ事が出來るんでしようよ』まだ幸とも不幸とも定まり兼ねる從妹の上を眞に幸よと多賀子は心から喜ぶのである。

『あら…どうだか分りやしないわ』

『嫁らしつてからね一度夫妻で遊びに入らつしやいよ』『あら、なんだか恥かしいわね』

二人は衝と顏見合せて思はずほゝゑんだ、時、もう今迄の濕ぽい氣合は掻き消されて了つた。

バサリ、障子に葉蘭の葉擦れの音がした、戸外はもう暖い春の始めてある。

古い型の文章て、有り來りの材料を書いたものだ。けれど形式の古

い短篇小說としては能く整つて居る。（評）

○夕紅葉

紀伊　白蕣女

忍びたいぞよ忍ばせたいぞ……

鬱蒼と茂つた里川の岸の小松原で若い女の聲で唄ひ出したが、松葉に遮られて其人は見へなかつた。秋の日脚の西に傾いて、遠くは赤城の山々から近くは紅葉谷邊りまで華かに夕榮すると、返照の紅がまるで血のやう、里川に映る。流に舟を浮べて山のやうに薪を積て靜かに下つて來る若者がある。すると此時、

裏の細道小藪から……

最前の歌の續きであらう――唄ひながら林の中の細道から白手拭の姉さん冠りの若い女が、平鍬持つた片手に若菜を入た笊を抱へて、里川に架け渡した土橋の上に來かゝつた。すると先きの若者は棹さす手をとめて、うつとりと其美い聲にきゝとれて居たが、此時互ひに顏を見合して

「米さんか？」「仙吉さん！」呼びかはしたが……

やがて仙吉は棹をとつて船を川岸に漕ぎよせ、柳の木の根にそれを繋ぎいそ〱土橋を上に上つて來て、お米を見上げて、莞爾としながら、

「お米さん！」

とおしつけるやうに言つて、その右手を砕けよとばかり握りしめた。

「おいら北海へ行の止めにせう？」

あまり突然なるこの言ひやうに、お米は一方ならず驚いて、

「何故？……」

「何故つて米さん……おいら米さんと別れて何處へ行つて何をしたつて面白かァねーや……。

眼をおとして聞いて居つたお米は、

「それはほんと！」

嬉しそうに、はたと寄り添ふて、嫣笑り。

二人は無言。

夕日は全く影を收て、冷い川風が野面を吹き渡る。

お早う　千葉縣　松ヶ枝涙江



日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切每月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

二等

○病床日記

駿河國清水町 松永兼吉方　松永しげ子

三月二日。暖き春日椽より射し込みて、微に立つ埃透けて見ゆるも面白し、かりそめの風邪に臥してより早三日目なり、好める俳書も讀みたからず、衣桁にかけたる同じ衣も見飽きたり、欲もなく望もなく、徒に臥し横はるの佗しさ。節々の痛みを覺ゆ、床摺と云ふものなるべし。

表を行交ふ下駄の音、折々響く學校の號令、健なる人の笑聲、枕にひゞきていと羨し。

うらゝかや障子に觸る猫の耳。

三月三日。都なれば雛祭る日なり、此土地は舊曆なれば常に變りたる事なし。氣分も好ければとゞ無理に乞ひて、母樣に髮結ひて戴く。鏡に映つる顏の瘦せたる樣なるは、心の爲のみにはあらじ。木瓜の花の赤き納屋の前のこぼれ麥の芽の青き垣根に陽炎の燃えたるなどとり／＼皆うれし。

陽炎や油のにじむたゝふ紙。

三月四日。春雨降る。家の中ひつそりとして物淋し、何處やらに梭の音するやうなり。

午後美代子樣妹の妙ちやんと來りぬ。妙ちやんは夜具の裾の方に坐りて、小聲に毬唄を口ずさむ。菊子樣來ん十日を期して結婚の式をあげらるゝ由、旦那樣となるべき人は、さる學校の敎師なりと、美代子樣のお話、整はぬ乍ら祝ひの文記して美代子樣にことづけぬ。

軒の玉水ぽとり／＼と音ありて、襟元寒き心地す。

壁越に隣の三味や春の雨。

（評）病床日記としては聊か物足らざれど、いや味なきはうれし。

三等

○ぬきほ

秋萩

二月一日。あはれ年立ち返る欣びを屠蘇くみ雜煮して祝ぎけるも、まだ昨日としも覺えぬを、はやもその一月をも過してけり、流るゝ月日逝く時を我はしも何として暮しつるぞ、あな、あはれ、去年學び屋をあとにせしより早も一年近くなりぬるを。兎にも角にも浮世に存へんほどは身に餘る憂き事負はんこそ人のつとめ

なるべけれ。

二日。日曜なり、歌の師の君許ゆく近く小石川指ヶ谷町のほとりに移りすみ給ふべきよし、遠けれどなほ勵むべしなど仰せらる、妹の被布縫ひあげぬ。

三日。朝琴の師の許に赴く、昨夜他家にて更かして泊られぬるよし、十二時になりても歸りきまさぬに、さはとて辭す、歸途茶の稽古にゆく、この師なる人の六十九歳なりとはじめて聞きてあやしう御痛はしさのみぞとゞめがたき此年ごろを知らぬ他郷にさすらひますらんあはれ、その人よ。夜、虞美人草をよむ。

六日。琴の稽古は當分やすみとなり師より端書來る、さては此頃耳にせしはまことなり、兎角人の家に風は吹き絶えぬものなりな。

七日。針運ぶ手のたゆみがちなるあやしさ、あはれ月はみちつ、かけつ、わが思ひはいつはれぬべき、たゞ去年の今頃のみ戀しうて。何事もさだめなり、去りにし人はかへらぬを、さはれ此世に涙といふもの有りなんほどは心ゆくばかり泣きなん。河とながるともよしやとこそ。近く彌生の末には花子の君式あげませ給ふべきよし、其折までにと母上は我紋付の仕立急がせ給ふ、さりとはかゝれとて染めあげしにはあらざりけるを……行く雲の氣も輕う、今日此頃は何處の空にさすらひますらむ心強きはさる人なりけり。

（評）おもひやりなき母上の詞を胸にたゝみて氣も輕きその人を恨むさまのこちたからぬ、やさし。

春の曲　神田　岡霞里



四等

○夜汽車

京都市上京區東竹屋町六十番地植野内
小笠原秋湖

遅れたらどう仕様、電報？と俥の上で心配し乍ら、七條へ驅け付けたが、嬉しや七時の急行は未だ着て居ないので、漸と一と安心だつた、改札が濟むと、皆が小走りなのも可笑敷い樣に思はれた。

乘客が夫れ〳〵に塲所を占める、手荷物や、四季袋などが網棚へ置かれる、毛布や膝掛でコンモリとした座敷が出來上ると、列車内の光景が漸と靜まつて來た、「ビール正宗……」など〻呼ぶ賣子の聲が止んだ時には汽車は軸々の微動を傳へて、早動き出して居た、プラットホームの電燈が車窓ごしに差し

込んで居た停車中は氣にも付か無つたが、星も月も無い眞暗な闇の夜の自然の隧道(トンネル)に入つてから、初めて魔神が自分達と共に乘り込んだのでは有るまいかと思はれた、長いボギー列車は、僅か二箇のランプで力の無い明るさを保つて居るが其薄暗い光こそ、車中の光景を説明し盡して居る樣で有る、ジンミリと底冷のする夜氣が身に徹るので、肩掛を耳際迄纒ふ折に、あたりを見廻すと、お高僧頭巾や、外套の襟を立てたのや、只黑い人の臨劃が暗さを彩つて居る、話氣は何時にか絶えて居る、薄暗いランプの光線は凡てを單調に仕て仕舞つて、睡魔は、晝の活動に疲れた人々を襲うて來たらしい、パッと燧木が燃えて、頓てあたりが一層暗く成つた跡には煙草の火が螢の樣に瞬いて居る、ガチヤンと音がして黑い影ン坊が、窓の外を覗たが、又元の樣に引込んで仕舞つた、汽笛長鳴して急過する小驛の燈が流星の樣に後に飛んで行くので忙中閑と云ふ事を思ひ出した。來る日も、來る日も、水天に連る極み、一抹の靑黛を追うて行く大洋の航海を人生の白頁とするなれば是は又日記中の白頁では有るまいか、そして此車中の靜さがけたゝましい汽笛に破れ、此黑い人影が動き出して、夫れ〳〵停車塲から四散して行く時には、人は又各々喜悲哀樂の日記を綴る可く動き初めるので有らう。

（評）結末の感想面白し。

秀逸

○奥津城訪で　上總　天香

十七日。今日は去年亡き數に入らせ給へる祖父樣の御命日なり。雨上りの空には一點の雲も無う、いとよう晴れて暖かき日なりき。母樣と姉樣とはお勝手にてお供へ物こしらへ給ふに忙がはし。二つになりたる妹の早苗子を脊に裏庭に出づ。ほか〳〵と和き日光は羽織ぬぎたる身にも暖かう、脊のあたりしつとりと汗しぬ。小さき手に我が肩の邊り打ちたゝきつゝ足元にまつはる玉の樣を、面白しと興ずる早苗子に、己れも共にほほ笑まれつ。奥庭の柴折戸そと開けて、敷石傳ひ、其處此所とさ迷ふに、梅の花も稍散りがてにて、上氣したる頰をかすめて吹く春風に白き花片の雨のあと未だ乾きもやらぬ芝生の上にはら〳〵と散るも、一しほの眺めなり。築山の後を廻りて池の邊りに出づれば幹半迄水の上に枝差出だしゝ松のぬるみたる水に其蔭を落して、綠の色愈濃く、池水までも綠に染みしやうなり。眠むくなりしにや早苗子のむづかるに、さらばとて家に入る。御佛前には早や香の煙り棚引きて母樣がお手際の數々も供へあり。晝後皆々にて、遠くもあらぬ祖父樣が奥津城に訪づ。父上紅梅のつぼみふくよかなると水仙とを御墓に手向けまつらむとて切り取らせ

給ふ。門の前なる小川に架せる板橋音高うふみ鳴らして行けば、三寸許りに延びたる麥の見る目さえざえしう濃緑なるが、果ても無う打ち續きて、二三日の雨にいちじるしう萌え出でぬ。若草の中には嫁菜もまじりて、早や手籠に摘むべくなりぬ。先に歩ませ給へる姉樣の紫のお召しに小豆色の御み帶うつりよう、母樣に抱かれたる早苗子が着物の友禪の紅や黄や日光に映えて、さながらに畫のやうなり。やがてみ墓につく。御辭世の和歌ほりつけて立てたる大石の黑々と立ちて、祖父樣の御面影もしのばるゝに、持ち來りし香花手向けて御墓前にぬかづけば、何の露かぽとりと我がうなじに落ちぬ。

（評）面白き筆つき見ゆ、將來の上達疑ひなし。

○正月二日々記

松山市　勝山みどり

一月一日。除夜の鐘は夢の間に聞きなして、東雲つぐる鷄の聲に起き出づれば五時なり。先づ惠方に向ひ、若水に淸めて、氏神の御社に詣づ。有明の月は社頭の老松にかはらぬ影見せて、星のまたゝきさへゑましげなり、神官の祝詞を誦する聲かすかに貴く、そゞろ頭の地につくも覺えぬ許りなり。拜みをへて裏門より出て野の小道たどる程に星は一つ一つにうすれ行きて、城山のかなたかすかにかすかに曉の光はきざし初めぬ。茱の葉におきし去年ながらの霜も初日の影にやがて消ゆらん。家族うち揃ひて祖先を拜しさてあら玉の春、互に云ひかはして雜煮の箸を取るやがて弟妹達は各々學校の拜賀式に出行く、御年始客のもてなしや何くれと母の手傳ひに忙しくて先づは四十一年の第一日もくれぬ。

「ほんとに女と云ふものは損なものですわネー人の遊ぶ時にだつてこんなに忙しい目をせねばならんなんて」と思はずつぶやいて母に笑はる。

一月二日。とんとんと表の戸を破れん許りにたゝく音に皆々目さむ四時と覺しき頃なり、買初の客のこられしなり。いとゞ風吹き小雨さへ混りて心よからぬ空の樣なるに父上より初め店の者空のみ眺めやる、人々の願ひむなしからで有明月おぼろに黑雲のひまより光をもらしぬ。いつしか群雲南に吹き拂らはれて千代をさへづる雀の聲さへ嬉々として。

晝前より物買ふ客のさながら甘きにつく蟻の如く群がりて、なれぬ我等さへ引き出さる。「此モスリン大巾五尺下さいな」「ハイ」と云ふ間に、彼方の隅より「早く今の御召を出して下さいな」といふ、こちらの方には「肩掛はまだ出ませんか」「此切はいくらです」など、八方よりせめ立てられて、新參の丁稚どのたゞばうとしてたゞづみて又母上に叱らる、かくて今日も又忙しさにくれたり。

（評）これといふふしなけれどよし。

○磯の一日

羽後　柳子

ドードッドーと耳なれぬ波の音に夢破られて、一人床をはなれ湯に行く、早や何處の室にても眼覺まして賑かなるに我が十號ばかり兄君姉君が新婚の夢暖なり、ハイネの詩持ちて磯に出づ、海の面を渡る風寒う肌にしみ込む、しばし岩上に立ちて、冥想にふける、宿に歸れば朝げの膳賑かに運ばる、可笑しき事ども云ひあひてすませ。羅漢岩に行かんとて打ちそろひ出づ、妾は海水浴帽かぶり洋傘杖にして濃緑深き山路を登る、思ひしよりも近し、一つの羅漢花しぶきにつゝまれ給ひて眼をつぶり端座し給ふ、あれ〳〵と又ひた下りに下れば岩すさまじうそば立てり、下駄ぬぎ捨てゝかひなつとまくり岩が根に上る、あふむきて天をにらまへ給へるもあり、うつむきて物案じさせ給へるらしきも見うけまつる、中央に溫顏尊き觀世音寂として海の面見給ふ、サラ〳〵ザブン〳〵ドー〳〵とくだくる波の花美しう、足浸したる身は此處に人の世のあらゆる欲を忘れたり。只一と事朝夕に慕ひまつる詩人をいざなひまつりて詩語りきかまほしうて。我思ひはそれよりそれと暫し理想の園に遊ぶ、兄君等貝等取り給ふ、我詩のあこがれは覺めざれど歸らんとせかるゝにさらばよ十六の羅漢、緣あらば又こそあはめと先の山路登りて宿に歸る。隣室の君巡禮紀行よみ居給ふ。午さがりいし子樣訪れ給ふ白玉等作りて——。二人して鳥咲に遊ぶ、汐ぬくき心地す、隣の君舟に醉ひてゆら〳〵として歸らる、兄君に舟をといへど波荒ければと申さる、一錢五厘の切手なしと云ふ、此宵は名磯なればとて一人磯邊に出づ、月ほしき夕なり、一時ばかりそこはかとさまよひて「あゝ靑春の夢さめて」を歌ふ、ヒヤリとふき來る風寒きに夜は更けぬらし。戶をとざしてやがて夢路に入る。

(評) ハイネなどをかつぎ出したゞなど殊更めきて嬉しげなき心地すれどさすがに捨てがたくて。

○歸省日記

靜岡市　根岸良子

三月八日。好く晴れた日和である。私は朝飼も匆々に濟して、九時五十分の西行列車に乘込んだ。一聲の汽笛と共に汽車は進行し始めた。

丁度十時頃列車は石部の海岸を進行して居た。前面の海を隔てゝ遠く伊豆の山の邊りに、縷々として幾條も立登る煙は大方朝飼の煙であらう、等と想つて居る間に、列車は大崩のトンネルに這入た。トンネルを列車が出ると、山間の靜かな花澤村である。所々の家の垣根等に、桃や早咲きの彼岸櫻等が、チラホラ咲て居た大方家のも——、等と思て居る間に、列車は燒津に着いた。乘る人、降る人、軈ての間に又列車は動き始めた。

私は列車の窓際に凭れ乍ら、田舍の春の樣を見て居た麥畑には、もう靑々とした麥の浪が吹く、春風に靡かれて居る。時々雲雀の啼き聲も聞える。線路に沿つた

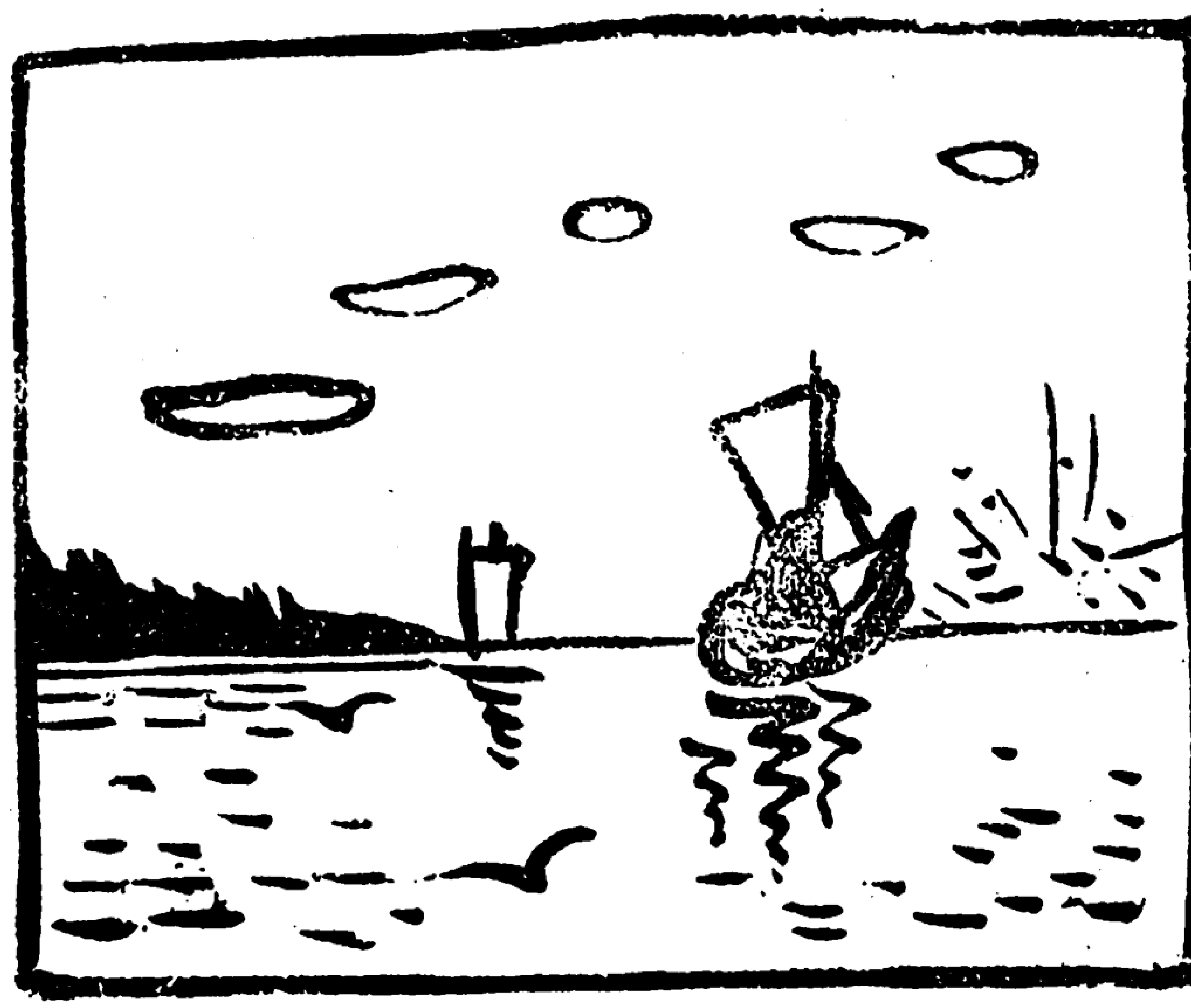
小さな川には、若鮎の上つて行く樣も見える。其れも暫らくの間で、列車は藤枝に着いた。藤枝の驛では、一寸停車したばかりで、列車は再び進行し始めた。菜の花や青い麥畑などの中を一直線に、列車が進むに從つて、漸々故郷は近づいて來た。二十分、十分、五分、島田の町は最早目の前へ來た。

島田の停車場へ十二時に下車して、私は待合の俥に乘た。石塊のごろ〳〵した相川街道を、吹く春風に髮の毛なぶられつゝ、住吉の入口に着いたのは、流石に長かつた春の一日も、黃昏れかけて、源長寺の夕鐘が一村の靜を破つて聞えた。

お寺の甍や、家の白壁や、最早二町ばかり。弟も妹も嘸大きく成たてあらう。其筈九二年も面會なかつた故だから、抔と思つて居る間に、俥は門へ迄來た。垣根際の緋桃は今が眞盛り。

（評）稍々佳

海の朝　靜枝子



○拙き日記　京都　武田とし子

二月二十六日晴朗。今朝兵營の兄より書面來る、いつもながらの折釘流の筆法にて、洒落なる書き振り、火鉢に靠りて讀みゆくうち。「兼て氣遣ひし麥飯の義この頃は慣れしため、さのみ困り申さず候のみならず、食時前には腹の蟲の食慾を促すこと頻りに候。先日も演習地より歸營せし時、空腹に堪へずして早々酒保へ飛び込み○○を數杯引き掛け候。その時の美味さ加減到底筆紙に述べがたく候。」に至りて獨り微笑みぬ。黃昏探梅より歸る人三五人うち談ひつ窓下を通れり。

二十八日降雨。今日はいつになく悲しき日なり。昨夜より隣りの家の何となく騷しければ、若しや變りし事の起りしにはあらざるかと怪みゐたりしに、果せる哉今年漸く七つの愛らしき、文ちやんが腦充血とやら云ふ恐ろしき病魔のために、哀れはかなく黃泉の客となられし由、妾は殊の外愕きぬ。母なる方の涙流しつ語り給ふを聞けば、來る四月より小學校へ通ふとて購ひし書籍石盤及び、人形リボン等は、棺の

裡に葬り給ふとか。そのリボンこそ過る日、霏々として降り頻る雪を眺めつゝ、柔かき黑髮をお下げに結びて、後ろに挿しゝ眞紅のリボンなるを。その時に結び終りて、「おゝ愛らしいこと」と言うて微笑みし時もありけるに。人は花見に浮かるゝ長閑けき春の日に、天は何故にこの可愛の少女を奪ひしか。利發なる者は夭折すとは誰が言葉かや。多恨多涙の妾は暮れゆく窓に靠りて深く想ひに沈みぬ。あゝ今宵響く鐘の音は如何ばかり悲しく聞ゆるならん。瀟々たる春雨はひと頻り烈しくなりぬ。

○春雨日記　群馬縣　大沼染子

四月一日雨。起き出て見れば天いとすが〳〵しう晴れて、昨夜は雨や多かりし、庭の小草に露おきて、頭重げに見えたり。

朝餉すむ頃には、田となく畑となく、濃く白き靄の立ち初めて東の風いと強く、次第々々に空を蔽ふよと思ふ間に、小雨さへ降り來れるこそ心細けれ。母上の言ひつくるまゝに、兄上に手傳ひて馬鈴薯を植ゑたり。

四月二日雨。昨夜の篠つく雨に庭の小草もうちつけられていと哀れ深く、軒の白梅なかば散り失せたり。遠野にさゑづる雲雀の聲すが〳〵しう、靄立ち罩むる樣は、昨日の朝に異ならず。母上と共に針仕事すれば、軒の玉水ぱたりぱたりと落ちて、うるさき日なり。

四月三日雨。今日も雨かとの歎息は數多の人の口より洩れたり、昨日にかはらぬ野山の景色に書く程の事もなけれど、神武天皇祭のことゝて、日の御旗など軒に立てゝ祝ふべきを、雨のため揭げ得ずして、軒端につるしたる樣の見ぐるしかりき。

四月四日雨。久しぶりにて鶯庭の梅に來りて啼きつ、あゝその聲の雨のためすみわたらぬを如何んせん、納屋なる兄上の唄に興じつゝあるを、母上と二人して笑へば、その聲の高かりしため、兄の唄は止められたり。午後師の宅に遊びて、其の道の訓話をきゝ、うらくつろいで加留多とりに興じ居れば、島田さく子の君も來り會しぬ。共に學び舍のふる事など語りあひて、己がじゝ高ぶるも可笑し。

近作の數首を出して添削を乞ひ、いとうふかして家に歸りぬ。

○田園生活の一日　岐阜縣　氏家多津子

二月二十日。今朝は珍らしくも鷄の曉告ぐる聲に呼び醒されしが、まだ早ければつひ又うつとりして華胥の國へ舞ひ戻る。ふと急に騷がしゆうなりしに飛び起くれば、早や井戸端會議の開かれたるらし。

朝日は東の山の端に出てゝ、遠近の樹林を花の如く輝き、彼方此方の草舍よりのぼる炊煙、うつくしくうつりて胸に透らん如き清き朝景色!!、あゝ美くしきは田舍の曉の景色なり。

朝食後附近をぐる〱と歩きまはる、白梅の花綻び初めたるが未だ鶯の來ずして、目白のチヽと鳴きつゝ飛びまはるも亦すて難き風情なり。
日影まばゆき許りかゞやく空に柳の糸の緑をふきかけたる樣いと雅かなり。九時頃叔毋樣より草餅を賜ひぬ晝餉に五つを食ふおなかふくれて折角叔毋の心つくしのあじめしも僅に一椀を傾けたるのみ。
午後南椽に出て日面に草枕を讀む、空清く澄み渡り、たゞ一片の白なる雲の、ふわり〱と流れゆく。
五時頃叔毋と共に乾德寺にゆく、八年前逝きにし妹の墓訪れんとてなり。花さしかへ水そゝぎ、線香たきてしばし兩の手合せて禮拜し、想を當年に走せつゝ沈思するに妹の音容髣髴として眼前にあらはれしに愕きてよく見るに忽ち消えて、たゞ苔むせる墓標の淋しく立てるのみ。深き感慨にうたれ佇立する事多時。暮雲流れ松風の音悲しく、線香いつしか燃えつくして一塊の灰となり名殘の餘煙縷々として我身邊をめぐれり。涙を拂つて、見返りがちに歸路につけば、晚鴉啞々と哀げに梢上になく。

○三日間の日誌　鳥取　靜草

十四日晴。土曜日。東空僅かに白み、世は未だ夜の薄衣に蔽はれしまゝ、一面紫に霞みたる午前五時、早や井戸端は、隣りの下女の水汲む音す。八時出校。四校時、何某先生の音樂をきく。さながら逆卷怒濤の壯快なる、耳語小川の優しき、さては高く、低く、或は早く、緩く、愉快にして實に仙境に遊べる心地しき。
午後三時頃、隣りの八重ちやん、可愛き足に、二王樣の下足の如きをはきて來らる皆々大笑ひ。
日、山の端に面をかくせば、悄然たる久松山に、塒求むる群烏の、聲喧ましう、暫くにして寂寞の夜となれば、喨々たる明笛の音のみ、濠端に聞ゆ。星辰空に瞬き、月は、愈々、澄んで、夜は、水のやう。
十五日曇。日曜、未だ東雲の空には、光淡い明星の眠さうに瞬きつ。昨日まで結べる緋桃の唇、今日の暖かき風に醉ひてか、天を仰いで赤火を吐けり。九時頃より裁縫に餘念なし。晝餐後、孝女白菊の書をよむ。嗚呼、天は何故に、かゝる可憐なる少女を、かくも苦悶の淵に沈めたる。神は何故にかくも心淸き少女を痛ましむるものぞ。やがて我身に思ひ至りて、涙、數滴、書の濡るゝも知らでありき。三時、妹にと手紙をかく。風、愈々、暖かく、空、愈々、怪しう。柱によりて足並み走る雲の行方を眺むれば、黄昏つぐる遠寺の晚鐘の音も、ほそく、哀れに聞え來る。
十六日雨。月曜、暖風一陣、又一陣、久松山の老松をかすめて吹き來る。八時半出校。歸宅後、袴もぬがで毋より送り來れる品物を改む。程なく、八重ちやん可愛らしき人形を背負ひ來らる、「姉ちやん わたしこんな赤ちやん出來てよ」と、實に無邪氣なるよ。今宵は田中の伯父樣來られ、久々にてお話しをきく。十一時臥戸に入る。孤床、襟寒うして、夢ならず、唯、浮み來る悲しき追想に耽るのみ。

新體詩

横瀬夜雨先生選



▲規定　詩形詩語何れも自由なり、凡て振假名をつけ、句數は二十句以内とす、用紙も締切日も前同斷一人一篇を限り別際に認むべし、懸賞は甲種の規定に據る。

二等　○結婚

岩代國須賀川　根本松江

姿、形、隠れたる、
齢の山路辿り來し、
あゝ、十九年。
縁てふ自然の双手に導かれ、
處女の市の曲り角、
果になる戀の珍花の、
眞咲る園に——、われぞ入る、
おぼろ夜なれば春寒う、
更けゆく町の靜寂さに、
幻の如、夢の如、
過去の山路を振り返へり、
つめたき秋の印象思ふ。
憂愁の棘胸に抱き、
榛の雫に育ひ立ちて、
かゞやかの、
はなの日しらぬ吾なれば、
聖き情の血も冷えて、
春秋人にそむきしか。
しかすがに、
理想の園を胸に繪き、
ほゝ笑愛でし夢の跡、
慕ひて、哭きぬ女の身、
あゝ、されど。
祝福の花は運命ぞ、
事はみな自然にまかせむ——。
今ぞ希望に伴ひて、
君が情の住家にぞ入りぬ。

『少女の町の曲り角』いみじくも歌ひ得たるかな。仄にきく君この月を以て華燭の典を擧げ玉ふと、げに花やかなりし十九年の行路を顧みれば、愁ひや悲みや雲とざしてまた回すべからず。たゞ新人の愛に浴して、行かんかな活動の道ひらけり。されど思ふ、君新室に入りてよりのちもよく詩に親みたまふべきか、『女子文壇』さきに鹽田春子、太田らく子、佐久間よし子の諸媛を送れり、山田邦枝子亦近く去らんとす、れがはくば君のみは留まりて長くわれらが友たらずや。（評）

三等　○追憶

越後岩船郡村上の里　川島和歌波

玉ゆらの淨樂、それも、——
幻の花よ、匂ひよ、
ひと時の夢とくだけし。
さながらの昨の我が身か
わが前にそびえてたてる。
かつて見し世界を隔つ黒がねの、
つめたき扉、

大き業神の力か。
きつきしは、何のこゝろぞ、
ひた戀ふる一重の彼方憧れの
魂のふるさと、——
天上の、戀かのぞみか、光さし
こゝろをひらく銀の
鍵よ……追憶。

『過去』は封ぜられたる暗黒なり、鐵門牢してまたうかゞふべからず、たゞこれを開いて刹那の健入をゆるすもの、一『追懷』の鍵あり。この君まへに東に出たる曉の虹を歌ひき、また才媛の一。（評）

四等　○海

新潟縣三島郡　川崎貞子

夏姫の夢の名殘と
曉の雲最ゆるう
瑠璃流す御空に這ひて
靜けしや嗚呼朝の海。
打ち寄する潮の花は
我が脛にそとせゝらぎて
櫻貝見出したりと
妹の笑顔あたらし
靄幾重明け行くまゝに
剝がれては見え行く小島
萠黄なす松原縫うて
艫の音ぞ遠ざかり行く。

曉靄深き汀に立ちて、姉あり沖の小島を數へ、妹は濱の貝を拾ふ白き脛、あどき浪、景情二つながら美くし。十五歳の處女作としては目をはりて驚き見るに足る。（評）

すみれたんぽゝ　神田　杉山常子



五等　○黄昏

常陸國眞壁郡　大塚つね子

たそがれ草の影長く、
地に延くあとを求めくれば、
今落ちなんの日はやがて、
「戀の花」なり、空に咲く。
燦爛として朱に染む、
『光』のうてなながむれば、
わが身榮ある思ひして
現心に進むかな。
少女の路をたとふれば
川に泛べる命かも、
巖ほひて出でぬとも
岩せく水に打たれては、
年うらわかき手弱女の、
人の救を求むとも、
救はるべくも思ほえず。
日はやう／＼に薄闇に、
希望の珍花はかくれ行く。
頰にまつはるおくれ毛を

口なぶりつゝ憧れの
煩悶心に胸はなり
滅しゝ花を見守て
常蔭の暗にわれぞ入りぬる。

大塚さんは日曜ごとに遊びにお出る方だがこれまでにおほし立てるには大へんな骨を折りました、お嫁に入らしてからも作って見せて下さるとよいが。（評）

秀逸

○人に戀はれて

四谷　河野　槇子

我胸に君が捧ぐる瑠璃の盃
湛へし水は紅のあまき香りの
立ち迷ひ魂も溶けよと身を包む。
我はらはんか
たまゆらにもろき命は碎かれむ。
ふくまんか
危しとさゝやく聲の耳をうつ
少女我身の弱くしてもの怖ぢ心地
とつおいつ胸の惱みに湧き出づる
晶き涙の、盃の中にまじりて
あゝ濃き紅の色と化れるを。

誘惑來る。かなしむべし、いたむべし。（評）

○緋塗の箱

麴町　あし江

きらびかの宴會の狀や
わきて著るき君が御姿、
そと招んで渡し給ひし
小箱抱へて暫時夢路に
せぬ音に耳をかたむけ
在さぬ君の後姿見送りぬ
小夜更けし灯影に獨り
とりいだす筆跡鮮かに
なつかしの御名もしるく
樣方へといやしの名さへ、
御心ほゝゑみてみつ
熱誠ぞと君が意か
我はたゞもゆる緋の箱
思はずもふるふ手にして
御情をそと抱きてみし
飽かぬおもひの緋塗箱哉

誘惑來る、その二。（評）

○まぼろし

伊豫　賤子

朝露踏むとしをり戶の
ほとりに立てば靄わけて
來る懷しき人のかげ
床し香薰る白薔薇
右手にゆら／＼進みより
優し君にと仰すれど―
知るとばかりの人の手に
受けんはうしろめたうして
額歪れてのみ躊躇へば
細き乍らに力ある
み聲にいざや持ちませと
また數多度急かるゝを―
面あからめて夢心地
そと取りあげつ嗅ぎてみし

誘惑來る、その三。（評）

○殘花

上總　ひさ子

夜ぞふけぬ―

夢のおばしま靜やかに、
うすれゆく灯のいと淡さ、
淡きに消ゆる月影の、
白き運命に生りいでゝ、
花なり——我は綠葉の、
蔭をこぼれしなげかひに、
いたみを地の胸に泣く——。

名を誇らへる春なれば、
褪せての樣はおもほえて、
ながき榮えと笑みにしか、
雲井のをちに天がへる、
香よとはの凶の性——
あゝ世をすぎし衰殘の、
さびし葉かげを見返るに、
愛のさゞめき妬ましう、
ひたに欲するいとほしの、
尊が抱く幸をしも、
なやみが手にや蔽はるゝ。
愁ひの露のたちまよひ、
賴らむ何れのとまどひに、
信の光明やかつ消えん、
しゞまに更くる月影の、
淡きうすれの中にして、
春に返らず實りせず、
せめては生の根をこひて、
朽ちむ日迄と泣きぬるゝ。

醉茗が激賞したろにも似ず、この君のやうやくわが失望を買はんとす、はじめに淡き月を言ひ、終りにまた淡き月を用ふ。才人何ぞ才に役せらる。（評）

○希望の色

大阪　松田しづ江

燃ゆるが如き……………
紅の幕しづかに、
奏樂の中に開く、
廣やかなる舞臺は、
目ざましく飾られたり、
圓きテーブル……………
そが上に七寶の花瓶、
電燈の光りきらゝかに、
眞白き姬百合一輪、
恥かしげに傾く、
若き奇術師…………
一聲たかく命令しぬ、
眞白き百合は忽ち、
奇しくも變る彩り、
黃……紅……紫……綠……と、
斯くて遂には…………
眞白き百合に返へる、
我が希望の色も斯く、
さまぐに變りて、遂に、
眞白き百合の如くに。

かう、ぽつんぽつんと下手な琴の音のように切られてもたまらぬ、かくて終には……とポチポチを使うたのもどういふわけだか分らぬ。（評）

○うつろ樹

名古屋　内藤てつ

日の白目、靜かに照れり、
ほろくと
弛びたるみて、ひとけるは、くだつ
花の音
饐ゑばめる瓣のにほひよ。

かよわきは性なりしかな、あゝ、
夏くれば
まろがり照ろう日の神の舌なめづり
に、
墜つべきの貴き犠牲。

眞裸の魂の、うつろ木、
立てり、あゝ
胸の野づかさ、やるせなう病む身の
如も、
態わろく、眞晝を曝らす。

現世の輪廻の運命、
かくてあな
恥は色だみ刻々に、うつろひ行きて
あをくづる老らくの影——。

生慾は今わなゝきぬ、
罪業の
悟はあなれ、常久の不滅の榮に
いのちの樹かゞやかば——。

（評）「生命」を胸に生ふる一もとの木にたとへたるは新しけれど、予のこれを採らざるは、獨合點の句多きと、奇怪なる造語の交れると、なまじひに才有るがためにあやまられたる傾あるとによる。作者の三省を乞ふ。

○白百合

臺北　峽　よし子

神の御手もて植ゑたらん、
静けき谷の白百合の、
花に宿れる白露は、
月姫が泪のそれか。

あゝソロモンの榮華さへ、
此よそほひに及ばずと
惜しまれたりし百合姫を、
などてか神は作りけん。

もとより神秘の花なれば、
まだ戀知らぬ少女子の、
笑める面に似たるとて、
詩人の胸にかざられぬ。

菫といへば蝶の舞へるを思ひ、百合をゑがけばソロモンの榮花を想ふ、千篇一律惜むべし。君が住む海南の地は雲紅く水青からずや、何ぞ其新詩境を開拓するにつとめざる。（評）

○おもかげ

[illegible]町　野村　光子

永久に輝く水晶の、
宮殿の扉をそと開けて
美し姫は唯ひとり、
長き裳の音も立てゞ
階段しづかに我方へ、
玉歩ゆたかに運ばれぬ

あな美しの少女よと、
打守らるゝ面伏や
け高きみ姿仰ぎては、
やさしきみ聲賜ひては
再振あふぐ術もなう、
心よはくも俯垂ぬ

輕くゑまひて君はしも、
可愛のわが子よと
犇とばかりに抱きよせ、
愛湧き出るみ唇もて

接吻られぬ我頬に、
熱きしめりを覺えけり

青春何をか戀ひ何をか思ふ、詩はその光明にして、且惆悵なり、自愛せよ。（評）

○初戀　常陸　小泉はま子

夕べ戸に倚る手のやすみ、
星を仰ぐに馴れし目に、
物憧憬るゝ瞬間を、
つと胸を射す戀の矢よ。

あな奇しきは絶間なき、
吐息にきざす其のおもひ、
影とし見れば影ならで、
すゞろに胸はときめきつ。

かくても秘むる胸の裡に、
とすれば動くうれしみや、
淋しく笑みし人ならで、
誰かは解かん戀ごゝろ。

出洲　大阪　梅本龍子



かゝる思ひに罪あらば、
野になく小鳥さてはまた、
自から咲く花にさへ、
小さき罪は宿らまし。

この詩、第二懸賞文集に出たる井口とよ子の『初こひ』胸の底よりわきそめて、自なるこの思ひ、かゝる思ひに罪あらば、自然の物に罪あらん。「自咲く花にさへ、おのつからなく鳥にさへ」とおなじくして且それよりもつたなきは何ぞや。（評）

○折鶴　岐阜　氏家たつ子

日面に咲きし白梅の
一輪二輪の香に出てて
南の椽の端近く
二人の姫の睦みごと

さげ髪匂ふ姉の君
折れもしぬべきやさ手もて
巧みに鶴を折りなせば
紅のリボン小ゆるぎぬ

妹の君はおとなしう
花の振り袖膝にして
小首かたげて雛のごと
眼やさしくも眺めゐる

姉に習ひし妹君の
のしては疊む美濃紙や
やう／＼成りし折鶴を
奥にいそ／＼持ち入りぬ

○縄釣瓶　京都　田中文月

車にかゝる一すぢの、
縄は互の縁の糸
右と左につながれて、
汲むは一の井戸の水
君上なれば我れは下、
縄の上ると諸共に
君に逢んと上行けば、
君は忽ち井戸の底
君と我れとが諸共に、
手に手を取りて語らはゞ、
語る其間に世の人の、

命の水や絶へぬべき
學の窓にあるころは、
朝夕共に手をとりて
苦樂をわかつ交も
學の道も終へぬれば
或は別れ西東
北に南にはなるれど
同じ心のかはらねば、
これぞ誠の緣の綱
はなれざるこそうれしけれ

○きり　奈良　中富よしみ

五月雨は今しもはれぬ
眺め見る山合の里
翠又翠をませし
新しき草木の色よ。
我が筆の動けるまゝに
半ば早や繪となりし時
忽ちにいとかたくこそ
閉しけり霧の幕は
立てこめし霧の中に
たそがれの色をぼかして
木もくらく村も沈みて
暮れにけり大和國原

○雛まつり　大阪市　辻　廣子

桃に近き、奥の一間の、
今日かざる、雛棚ゆかし。
内裏雛、女雛抱雛、
古りたれど、母のかたみよ。
妹は、今日の三日に、
生れけり、幸やありなむ。
あれ上は、こぞのこよひし、
嫁ぎたり、幸おほからむ。
桃酒に、父醉ひませば、
母上の、歌もありしか。
あゝ今は一人のこりて
寂しくもひなにかしづく

○古寺　豐後　桃の家賤子

双の腕にあまりある
太き柱も年へては
「時」の痛手にたへやらず
朽ちこそ見ゆれ今はしも。
五彩の霞に天人の
樂奏でます古だくみが
筆の香高き繪の壁や
その中にして須彌壇は
青銅瓶子梅咲きて
み室に祭るみ佛の
とはに朽ちざる金色も
伽羅のけむりのたゞよひに
尊きひかり淡くして
經文古りし齋座の
かたへに木魚音もなし。
ふと眼閉づれば方丈に
誰ぞや詩吟の聲細う
たとへば陰府の扉をもるゝ
亡者の聲の心地して
凄き御堂の寂寥し。

○池邊の少女　下谷　花園百合子

花恥かしき、かんばせに、
たれ懸りたる、リボンをば、
餘念もあらで、まさぐりつ、
汀におつる、花びらを、
拂ふや長き緋の袂。
ほと〳〵と、欄干を、
打てば寄來る、緋の鯉を、
頰杖つきて、池の面、
にこと笑て、打まもる、
折からそよと、吹風に、
小波立て、美しき、
水の面の影は、消はてつ、
浮かべる魚も、藻に沈み、
たゞ花びらの、ちら〳〵と、
降れるけしきぞにほはしき。

○霰ふる野（母を慕ひて）　四谷　田中ひさ子

鐘こそ鳴れ、心さびしき旅の子の、
愁ひに沈む胸裡に、
食ひいる如く鳴り響き、
花もすがれて枯草に、
たゞ泣きぬるゝ涙かな。
寂の時雨の洸魂の、
大野に走る氣勢して
霰は過ぎぬ慌たゞしう、
おもてを包む笠の上

野はまたかへる凄寂に、
身にこそ迫れ寂寥は。——

夢の香を呼ぶ故郷の、
遠野に似たる通路や
如月寒むのかゝる夜は、
大雪降らむ古里の
北劍路なる野の家に、
病むと聞くから母の戀しも。

詩の原稿より（三）

夜雨

法三章

一、住所姓名は必ず原稿のすみに明記すべき事。
二、月毎に異なる名を用ゐまじき事。
三、私用の文言を原稿に書添へまじき事。
定に從はぬものは沒書とす。　以上

三月三十日

電話の番號を狀袋へ書くことは忘れてもいゝが、中の原稿に自分の住所姓名を書かぬはどうしたことです、御承知でもあらうがあなた方の原稿は受持受持へそれ／＼區分して渡るのであるから、一篇毎に書いて下さらぬとどこのお方やら何といふ人だつたやら、腹の立つた場合などには沒書にしなかつたことも無いぢやない。今回改めて法を立つる以上はきつと守らぬものがあれば可愛とは思ふても沒書にします。

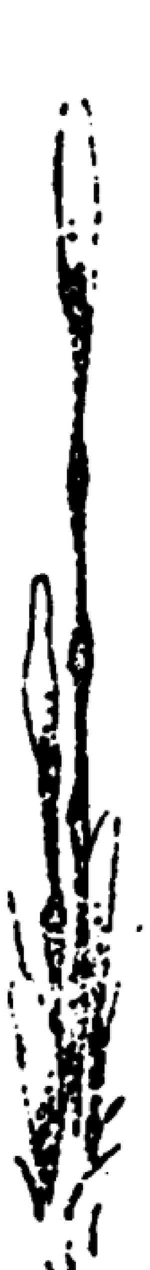
けれど誤解してはいけない、本名を公にされて困る人は勿論匿名で雜誌へ出られるので、たゞ撰者にまで覆面してお出るのは失敬であらうといふまでなり、役場へ雅號の登記願を出す必要はないが、自分にだけはそれを出して下さらねばいけない。

月毎に異名を用ゐるなといふのは、たとへば大阪の生田さん辰井さんのように、生田はる子だの春月だのさくらだのといひ、辰井さんはまたはな子といふたりふみ子と名つけたり花泉とも言うたりしては、見す見す化け損ねた狐のように尾が見えてをかしいからです。と言うておあやまるが、兎に角同一の紙同一の筆同一の地なんだから、一人でいろ／＼の名を用ゐる例に舉ぐるのである。

原稿の中へいろ／＼文句をかき込まれるにも弱る、なぜ書くのでせう、私用ならば私宅（常陸眞壁郡大資村）へ宛てゝお手紙を下されば差支なき限お答する、詩はどうしたら作れるかと聞かれるには返事の致しようがないけれど、添削やちよとした批評位なら、一人一人見て上げられぬこともない。私にあてた手紙を原稿として一しよに社へよこされては記者も迷惑するでせう。考へてごらんなさい。

特に濱松の星さんといふお方に申上げるが、あなたの『女になりぬ』といふ詩は、珍らしい作だけれど、御希望のとほり公にはしません。しかし私が「男子には想像し得られぬ秘密」を歌うて下さいと言ふたのは、このような事ではない心裡の秘密です、男子に異なる思想のことです。間違ふて似而非自然派主義にかぶれてはいけません。

明治二十四年の交民友社から出てゐた『家庭雜誌』に「小女の注意」と題して、讀者にしばらく厠上に上る心をもつてわが戰くを開けと提言して、小女の衛生を其母に於て注意すべき事をかいてあつたが、何の事か自分などには永い間知れなかつたが、今は詩にまでこの事の及んだのを思ふと實に隔世の感がある。健在なれ多望の少女詩人だちよ。



新論文　編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は甲種に據る。

三等　○誌友の俤

丹後加佐郡阿守町字新　鹽見千代子

愛姉達の御優姿を、彼是と論ずるのは、或は大なる罪かも存じませんが、聊か思ふ所を述べさして下さい。先づ第三巻第四號から初めます。羽後の田中とみ子樣の、自然にふいた前髮の格好よく、眉と眼の間の廣い所に、あつさりとした、性質が伺はれる、肩から胸の邊にかけて、何とも云へぬ凛とした、奥床しさが滿ちてゐて、その上ふつくりとしたお顔は、如何にもお姫樣然として、氣品が高い、此人は屹度精神修養を、重んじてゐる人に、違ひないと思ひます。次に第五號の山田くに子樣、ちとハイカラ的ではあるが、何處を見ても、しつかりした所があつて、意志の堅さうなお方、一寸もろくはなからうかとも、思つて見る。それから第六號の小島千菊子樣、此君は至つて溫和しい、奥樣らしく。其横のお方は、洋裝の紳士に持つて來いの御風采。今度はずつと飛んで、拾二號の葉山華子樣は、ヴァイオリンを彈いて、いらつしやるけれど、實際は出來るのか、どうか疑はしい、弓の持ち方が違つてゐはしますまいか。最後に本年初號の、横山みさ子樣、帶の模樣の高尙な事、掛衿の附け方のお上手な事、お襦袢の衿の出し具合などが、氣に入つた。惜しい事には、髮の結ひ方がまづい、前髮が大き過ぎるので、笠でも被つて、ゐらつしやるのかと思つた。こんな事は、私が申す迄もありませんが、髮の結ひ方は、其人の品格の高下に、大なる影響を及ぼしますから、餘り流行を逐はないで、それぞれ御自身に、似合ふやうに、結ふべきであらうと思ひます。今一つ申したいのは、赤ん坊の樣な心になつて、寫して頂きたいと、云ふ事であります。

流石は女性、記者でも其處までは氣が附かなかつた、誌友面影を評論すると云ふことも面白い思ひつき（評）

四等　○感じたまゝ

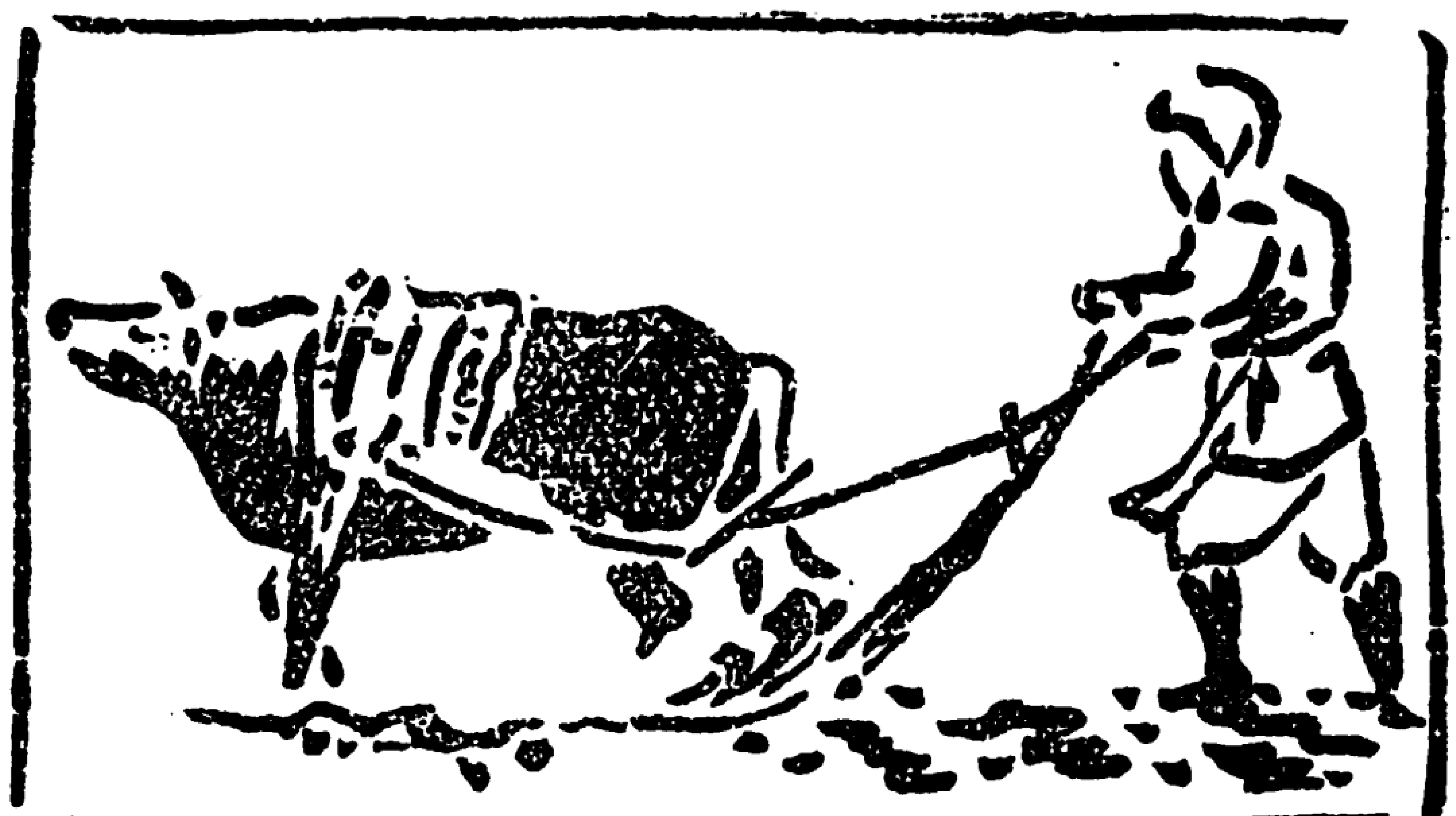
京都市西陣紋屋町　濱部風窓女

某博士が男と交際せずして墮落し無い女より交際しても墮落し無い女を欲すると仰有いましたが實に痛快な言葉だと感じました、私の樣な未だ嘴の青い者が攻擊

？などゝは、おこがましい次第て御座いますが現今の教育、殊に女學校の採つて居られます方針は、どうも前者に當る樣に思はれます、これは餘りに消極的ては有りますまいか、餘りに意氣地が無いては有りませんか、行くなと云はれると頻りに行きたく、見るなと云はれると妙に見たいのは人の通有性てあります、其を無理に抑へ樣とすると時に依ると反動が起つて却つて裏面て惡い事をするやうに成るのでは有りますまいか、飾りつ氣の無い言葉てすが昔時、富貴な家のお孃樣が卑しいお出入りの車夫や大工に戀を爲したと云ふ話は澤山耳にしてをります、之等は皆世間も見せず異性にも接せしめず所謂箱入として束縛した反動の爲した處では有りますまいか、勿論男女交際が自由に免されたなら墮落する人も有りませう、此の犧牲は免れる事は出來ません、彼の革命は幾多の血を流さなければ出來ませんでせう、どうか是からの女は意志の强固を以つて感情ばかりに走らず圓滿に美はしい男女交際の下でお互ひに足り無い智識を交換したならば益する所は決して僅少なく無いだらうと思ひます、そして今迄男と女とが寄り合つたら怪しい關係でもして居るか、墮落する者だと思つてる人達の誤解を晴したいので御座います。

革命的議論、一部には反感を起すであらうけれど、之れ亦決して無用の議論でない、大勢は刻刻に移りつゝある（評）

耕作　福岡縣　大賀つれ



秀逸

○時間に就て

京橋　櫻井　久子

論文などゝ申しましてもむつかしい事などは申されません、たゞ私の思ひましたまゝ其れを皆樣に聞いて戴きたいのであります、

集會とか何んとか云つて人の多勢集まる時には必ず一定の時間があるものです、處が世間には多く此の定まつた時間には人の集ることがありません。

先づ或る集會を催ふさうとするには先づ其の時間てす、其の時間を定める人は正直に正八時と定めると、其れに應じた人は如何てしよう、多くの人の中にはず

るい人もあつて八時と定まつた時間には出て來ません、其れに反對の正直な人は其の定まつた八時に指定の處に出て來ます、けれどもづるい人に至つては先づ八時と云つても九時頃にはなるだらうなど丶云つて定まつた時間には出て來ません、正直に八時に出て來た人は退屈に堪へられなくなつて一寸出直して來ますなど丶一先づ內に歸る、づるい側では漸く九時頃になつて出て來る、見ると誰も來て居ないので又此人も歸つてしまひます、こう云ふ樣に皆が一致する事なく、折角の事も遂に空しく終つてしまふのです、此の中でも勞働者などはこれが爲め大變迷惑をするのです、一日働けば五十錢なり一圓なり儲かるものを儲けずたゞ空しく一日を暮してしまひます、

これを思ふと汽車は本當に正確なものです、必ず定まつた時間には客の多少には係らずどん／＼出發して了ひます、それで人も自然汽車は時間の正確なものと知つてそれに乘らうと思へば定まつた時間より少し早やめに行きます、私は總て時間を守る事を汽車の樣にしたいのであります。

汽車、郵便、銀行、學校などが時間を正しく守る模範てせう、時間の正確は一般に實施しなければならぬ（評）

○小學敎師

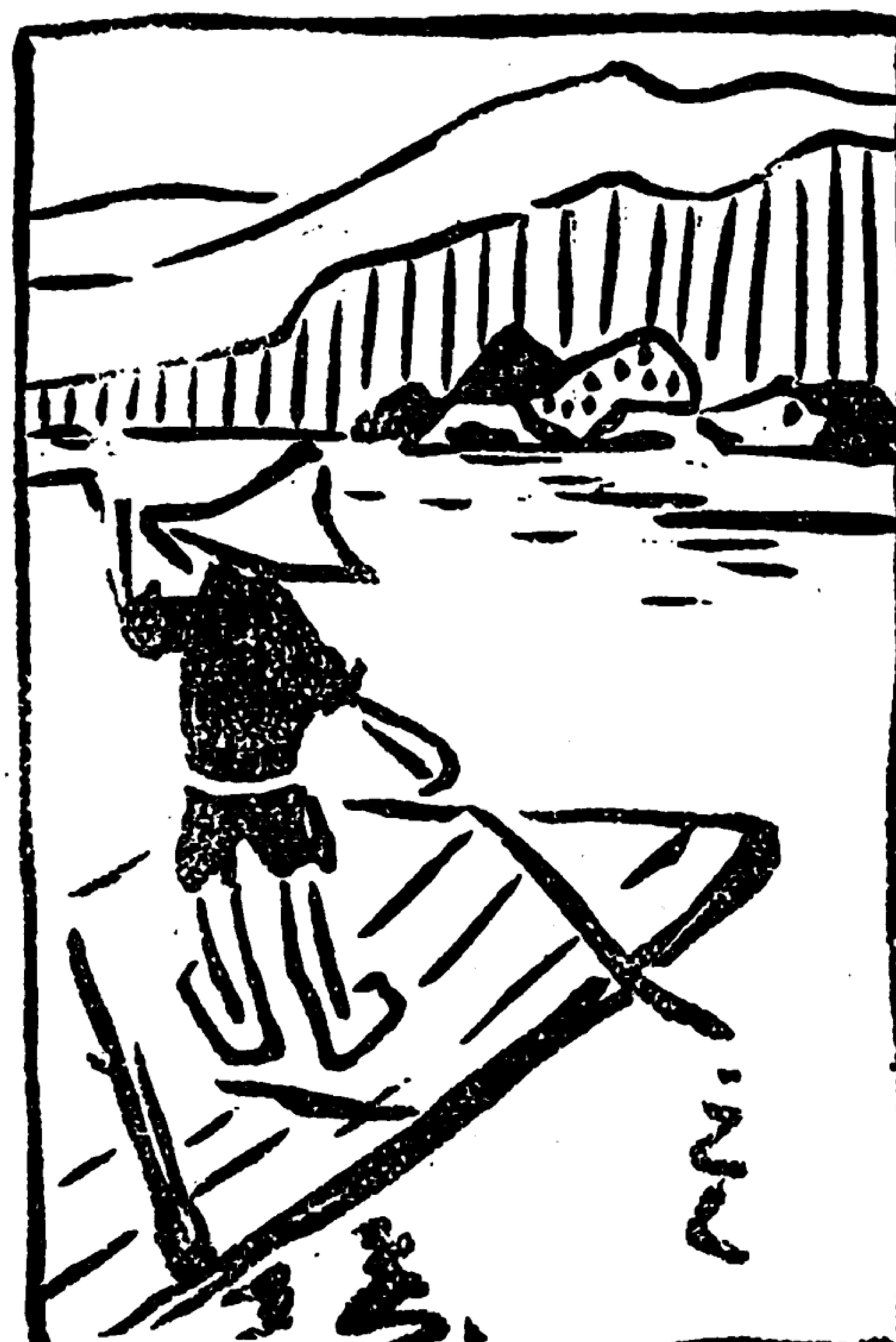
新潟縣　皎月女

私は、田舍の小學敎師をして居ります、奉職の學校は、內から二十町ばかり離れてゐます、每日私は始業時間三十分前に登校します、學校から二三町の所へ行きますと、白壁の校舍が見へます、子供の騷ぐ音もします、やがて一町計りの所へ行きますと、早や子供は私を見付けて飛んで出ます、そして、私が校門をくゞる頃には、皆が言ひ合したように、整列して御早ういたします、私はその愛らしいにこ／＼した顏を見ますと、何とも言ひ得ぬ心地がいたします、若し私が病氣で顏色の惡いときなどは皆心配そうに私の顏を見ます、そこで私が笑をもらしますと、子供は安心したと云ふ顏をして思ひ思ひに散り去ります。それですから、私は不快氣の面色を子供に見せまいと思つて、何程苦しくつても必ず校門を過ぐるときは、笑を浮べて通ります。內の父や母は學校をやめて、家庭の人になれと申しますが、私は思ひきつて退くことは出來ません、若し學校を退けばこの愛らしい兒童を見ることが出來んからてあります、或る人などは常に人生敎師の身となる勿れ一生の苦樂生徒に依ると云つて居られますが私はこの敎師しかも、小學敎師の責に當つたのを此上なき幸福と思つて居ります、それてすから私は上より退職の命下る迄は、如何なることがあつても此の職をやめまいと決心して居ります。

女は愚なもので自分に子でもあればすぐその愛にひかされて兒童を愛するゝ心は幾分か減ずるもので有うと

信じます、よし愛情にかはることなきも或は遲刻したり、或は缺勤したりすることが獨身の時より多いだらうと思ひます、それてすから此の職をやめる迄獨身で暮す考へてあります、私の受持尋常四年が今月限り卒業して出るのだと思へば胸もはりさけるようてあります。

小學敎師と言ふ立場からの意見としては誠に立派なもので、これてこそ其職分に忠實てあらうと思はれる（評）



筏　　南多摩　中島謹子

○三月號の評

上毛　納尾子

「沒書嘆」は實に其通りてある、私は後半「此時詩神云々」なんて云ふ事はないが、たゞ前半のやうな事には屢出逢つた、これからも前途遼遠だからたび／＼有るだらうと豫期して居る、「文學雜誌一口評」は面白い、美文「原稿」私もあゝ云ふ事があつた現に今夜なども一例にもれない、新派和歌いつもながら面白い秀逸「君をこひて」云々實に氣に入つた、作者今井しげ子女史は一人一首限りとあるにもかゝはらず本欄だけにも三首あるてはないか此外にも毎號二首づゝ出して居る人はすくなくない敢て問ふ責任はいづれにありや。山田くに子さんの作にはいつも乍ら敬服の外はない、夜雨先生の「詩の原稿より」は實にいゝ、私等のやうに何も知らぬ者の爲に今後もます／＼澤山記載していたゞきたい、就中剽窃作家のすつぱぬきは小氣味のいゝ事此上なしだ、新論文曉子女史のはよく出來た、「圖書につきて」云々私も同感、田園生活男女交際に就きて剽窃文について今の新體詩いづれも筆がよくはたらいた。短文「夫唱婦隨」さすがは二等當選だけあつてお上手だ實用文「夫の許に」かゝる妻をもちし夫君の幸福羨むべしだ新歌謠「幾度ともなく」は全くいゝ、いゝと云ふより外に私は語を知らぬ。滑稽談、文壇餘興は相かはらず面白く拜見した、圖書の五等「梅見」はいゝが足がちと大きい樣だ、飴屋はよい春のうたは顔が馬鹿げて居る、もうすこししまりをよくしてほしい、こんな顔では學校の成績も思ひやら

れる。

春の月ずゐ分大きい手桶だ、そして左手のふとい事、袢天はみぢかいし、割合にたすきの巾が廣い、何だか肩からはづれはしないかとよけいな事まで心配になる、私は俳句は虫がすかないので一通り棒よみだから俳句は何にも云ふ事が出來ない。

公平、不公平は無い、只此作者が思ふたまゝを言つてゐると云ふことは確かだ、此號の批評は外にも二三篇來たが、先づ此篇に代表させて置く（評）

〇をんな　伊豫　福井白百合

國家は男子の活動すべき舞臺、社會は男子の競爭すべき場所て有つて、婦人は其裏面に立ち、家庭を整理し子女の教養を專らにし、以て社會に活動し國家に盡瘁すべき男子を内助して行く可き義務を有して居ります、其責任は重大なもので有るにも不拘世間一般の男子の目から見て、多くの場合をんなは誠につまらぬだとけなされるのが常で有ります、勿論男子と同等の權利を持ち、社會の競爭場裏に對等して行く事は出來ません、けれ共若し、此つまらぬ婦人を社會から取り去つて見た時にはどうで有りませう、向來はいざ知らず目下の社會は迚も完全に發達して行く事は出來ぬと思ひます、して見れば、今日此社會が完全に發達し男子が充分に活動する事が出來るのは全くをんなが在る爲めて有ります、されば只一口に女をつまらぬ者だとけなす事は出來ません、社會に於ける男女は車の兩輪の樣なもので、兩輪が相俟つて始めて社會が活動すると云ふ事は極り切つた話です。私は或る人から目前で女はつまらぬ者だと云はれました、全く私はつまらぬ者です、けれ共一般に女はつまらぬ者と言はれるのは少し酷な話では有りますまいか、成程社會の表面に立つて活動する場合にはつまらぬ事も多くあるてせう、否寧ろつまらぬ方が勝ちませう、が而し、それを捕へて一般につまらぬと言はれるのはちと極端の話ではありませんか、直接でなく共間接に於て國家に盡し社會に盡して居るとして見れば、是れを頭からつまらぬ役に立たぬとけなされるのは實に殘念に思ひます、私は此點に就て世の同情を求めると共に女子は女子だけの天職を盡し、世間からつまらぬ者だと言はれぬ樣にしたいと思ひます。

少しくどい（評）

繪書當選者住所姓名

(1) 勞役（一等）　牛込區富久町六〇、藤澤方　佐野貞子
(2) 病兒（二等）　下谷區阪本二ノ一九、　岡野とよ子
(3) 船頭（三等）　府下豐多摩郡千駄ヶ谷村穩田一六　渡邊貞子
(4) 田舍家（四等）陸奥國三戸町字在府小路町　田島まつ
(5) お稽古（五等）　京都市西陣紋屋町　濱部風窓女

和歌

佐々木信綱先生選



△規定　殊更に諸派と言はず、從來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

二等

枯草のはてに日の入る冬野路を
我が想ふ人は一人ゆくらむ

常陸國稻敷郡舟島村　靜江子

三等

よき少女紫衣して立つとなつかしみ
あやめ草見る初夏の朝

豐後國臼杵掛町　菅原芳子

四等

長閑さや丘に上れば川添ひの
山羊守る小屋に春の雲浮く

秋田縣由利郡院内村四八、三浦方　三浦ふみえ

秀逸

○
かなしさをつゝむに餘る我胸にひゞくも哀れ入相のかね
函館　山鳩

○
亡き姉が文筥の緋房色あせて歌思ふ窓に春の雨降る
南品川　山田秀子

○
岡の家は朝戸出によし夜がへりは白梅月夜うた思かな
横濱　國津澄子

○
舞姫が綾の御衣も緋扇も灯も美しや春の夜の殿
青森縣　三浦愛子

○
磯山の松の木かげに駒とめて遠き海みる朝晴にして
千葉縣　豐子

○
桃の村日は午さがり繪日傘の少女過ぎゆく畑小路かな
茨城縣　小泉濱子

○
麥笛に春の譜をふく興そゞろ胡蝶はまよふ菜の花小みち
攝津　和久薫子

○
金屛のかげにみ燭淡うしてひゝなのぬしは眠たるらし
上總　東條天香

○
夕月は仄に香りて歸り路をいそぐ少女の面をてらしぬ
播磨　佐久間美舍子

○
籠にして廣野をこふるひな鳥の心に我は日を送るかな
石狩　小田たみ子

○
黃ばみたる蜜柑畑の木の間より白帆も見ゆ紀伊の宿かな
美濃　傍島みゆき

○　遠江　杉山富佐子

秋風や萩みだれ咲く野に立ちて白雲見れば人なつかしさ

○　丹後　鹽見千代子

雨ふれば君と語りし日を思ひ淡靄てむる森の戀しさ

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

○　四多摩　森田しま子

玉殿にまさるものよと日每々々鈴師つどひ來ぬひなの破れ家

○　京都府　中村幸江

氷山のながるゝ見えて白熊の吼ゆるをきゝぬ北海の旅

○　熊本縣　松本つい子

父は死し母は病氣の床にふすあはれ少女や入相の鐘

○　大阪　岡　千代子

ほの／＼と明けはなれゆくわだなかの松立つ島を蚊帳越しに見る

○　福井縣　片山千里

しひられし酒の座敷を逃れ出て涼しき風に吹かれて立ぬ

○　布哇　鐵石女

我國へかえり行く船見おくりて思ひに沈む秋の暮かな

○　肥後　内山佐惠子

門の邊に笑みをたゝえて送られしあれぞこの世の別れなりける

○　越後　うめの

山寺の入相の鐘おくりこす夕べのかぜに櫻花ちる

○　長岡　土田りた

薄暗き障子の影は孫と子と老母打ち寄り糸車繰る

○　羽前　波華せい

のどやかに音なひそめし春風に散りはてにけり白雪の花

○　秋田縣　奥田碧亭女

幾度かをなじ想ひに服ぞくりぬ君來ます夜と人は知らにも

○　越後　河島和歌波子

聴かざりききかるべしやは時鳥桐の花咲く山寺の雨

○　下谷　盛館翔子

鴨川に眺むる人もさく花も春の衣裳を浮べてぞある

○　埼玉縣　中村勝子

はふり子が白くれなゐの袖風にともし火幾度きえんとぞすれ

○　愛知縣　内山ふみ子

古き新き石塔立てる墓の邊を所得がほにあか椿咲く

○　徳島縣　野菫

村はづれあれたる宿にゆかり深き新むらさきの菫さびしき

○　明石　落葉子

松の間の屋根に石おく低き家灯の影細う春の雨ふる

○　山形縣　濟野風月女

軒傳ふ玉水の音もいとすごく一人ながむる秋の夕暮

○　大阪　登良子

春は又夜每の夢も樂しきに寢覺めに思ふ歌の句のよき

○　靜子

百千鳥囀る春に先き立ちて聞くも長閑にうぐひすのなく

○　山口縣　沖原波子

せんきんの春のそうばを鶯も聲を春日に上げ下げて鳴く

○　上總　鈴木かれ子

朝月夜光うすれて小萩原狹霧の中に小鹿鳴くなり

○　常陸　芳子

學び子の日々の勉めも今日こそは文の林につやぞあるらん

○　羽前　杉葉女

一葉散り二葉散りぬる桐の葉に病める姿が身も秋を知らるゝ

○　千葉縣　高濱尚尾

懐しきわが乳母が家は見えにけり菜の花垣に夕煙して

○　南豐　入亘子

窓にさす月の光りの影暗く梢を鳴らす夜あらしの音

○　駿河　松永しげ子

うら若き妻が眉剃る椽先の新樹すゞしく朝の風吹く

○　岡山縣　播磨岭子

幾千年操かはらぬ松ヶ枝に晴て靜かに宿る月影
○　大阪　鹿島あや子
病みませる母の看護に此春は花の盛りも知らで過ぎけり
○　岡山縣　桐本悦子
霜積みて犬が歩いて時ならぬ秋の紅葉を散らす足踏
○　福島縣　坂内銀鈴
梅の香を袖にうつして柴垣をめぐりて見れど君出てまさず
○　岩手縣　富士根小枝子
朝霞かすみの奥にほの見ゆる山下小家たが住居ぞも
○　越後　志賀美代子
睡らんとて雨戸によれば鶯の啼く音にしばしたゆたひにけり
○　京都　岩淵國子
初花の今朝めづらしき一枝を君にさゝげて笑顔見んかな
○　備後　井上年子
花里を流るゝ川の水の面は澄めども紅き色見ゆるかな
○　名古屋　吉田なみ子
住すてゝいく露霜のやどならぬ女郎花こそやつれ果てつれ
○　宮城縣　沼倉ふく
紫の糸くりかへし苧環を花の盛りに見るぞうれしき
○　松井はな
としをへてさかりになりしをしへぐさうき世嵐に花をちらすな
○　羽前　高橋げん子
物乞の眠れる土橋過ぎ行けばはだか童の魚つりにけり
○　北會津　白井絹江
面痩し君はうなだれともすれば吐息かすかにおもひてのさま
○　陸前　沼倉孝子
巖ほより岩にくだくる瀧津瀬にむらさき垂るゝ藤の花かな



野の女　伊勢　平松なを子

○　宮城縣　小野寺りよ子
土筆つむ少女のむれもいそぐなり花散る里の春の夕暮
○　横須賀　佐藤花月
此春に立てる雁さへ今歸る逝きにし母も又いつの世に
○　赤坂　高畑たけ子
長閑なるみやこもひなも春のきぬ高嶺のゆきもとけやはじめん
○　土浦町　琴江
家づとに折りてや行かん道のべのあなたこなたにもゆるさわらび
○　上總　ひさ子
朝ぼらけ花をはぐくむ乳の香に春の大野はうすがすみしぬ
○　大阪　山田たつ子
鶯よ初音をもらせ梅が枝に蕾は將にほころびにけり
○　秩父　登久子
なげかじと思ひなせどもうつしゑの笑がほ仰ぎて袖しぼるなり
○　青森市　村林やす子
糸柳風にもつれて影うつし小舟捨てある水の面に
○　石狩　小西婦美子
ゆびをりて花の咲く日をかぞへつゝ一日千秋の思ひこそすれ
○　山口縣　酒向とし子
ふく風のまに〳〵落つる梅みれば思ひぞ多き夕暮のまど
○　北海道　鎌田しげ子
竹がきをこえてながめし野のおもの雪とけにけり春日和かな
○　遠賀郡　藤村たくゑ子
あふ事のかたいとばかりしらへせむよりも叶はぬ身の苦さに
○　呉市　百合野白梅
日は沈み港に滯る百千船畫にも描きたや呉の海かな

攝津　露子

○み手とれば亡き母笑みぬ二人ゆく夢のそのふの撫子のみち
三重縣　山崎初子

○老ひまし丶母の手とりて遥かたの多度山みつ丶花野ゆくかな
京橋　三好まさる

○菜花咲く小川にそひて一里半桃咲く友の宿おとづれぬ
秋田縣　佐々木麗子

○長閑にも霞こめたる象潟の渚に寄する春のさゞ波
下總　葛生信子

○語ひつ丶一人逍遥ふ夕月夜琴の音うれし桃匂ふ家
秋田縣　三浦ふみえ

○相見れば三千里外遠ち方に漂らふ身とも隔れぬるかな
本所　秋山欣子

○笠ぬぎて雲眺めやる若き畫師の眞白き額をふくか春風
福岡市　伊藤元江

○ひも丶咲く温泉の窓あたゝかに湯煙り白し笑みのこぼる丶
京都府　若林一枝

○さ蕨も手をるばかりにもえ出て袖寒からぬ春風ぞふく
石川縣　山田朝子

○そのひざにすや／＼ねむる幼子を見守る君のゑみ美しき
滋賀縣　藤野やす子

○わが軒に赤葉ふるびてつるにさへしめりがちなる春雨のふる
伊豆　高木喜代子

○晝もなほ時鳥なくと樹の下の泉の畔百合の花咲く
山梨縣　瀧澤かよ子

○月に磨く玉簾の桀はならなくもせめては秋の一と夜笑みてん
千葉縣　益子みさを子

○かげを追ふいはけなき子か槍搜櫞の秋にちりぬ山吹の花
周防　品川清野

○あはれとも御よめてませ國のためたほれ伏すまでつくす心を
兵庫縣　田中春子

○うかりける世にすてられて世をすて丶入りにし山も浮世なりけり
奈良縣　中富よしみ

○このおもひ今ぞ撞くなる鐘にやらば君がみ胸に如何にひゞかむ
磐城　佐藤美子

○枝ながら乞はれぬさきにとなりへも半は送る風の梅が香
長野市　胡蝶

○琴の手を休めて彌生の月見れば同じ曲なる笛の音ぞする
日本橋　牧野嵐水

○風のかぢとる紅の木の葉舟にのりて訪ひ見ん雲波のつき
深川　牧野はん

○瞬つ日の業か運か我島はさがなきまどに二十四季なく
京橋　上原とよき

○紫の色香に匂ふ藤の花小池に遊ぶ緋鯉とび立つ
陸館　あき

○ひなげしの片頬笑みたる花えくぼ誰がひとみに手折られしものよ
北海道　赤岡紫水子

○春風に誘ひ出されて軒の梅花ろう月抱へて小夜更けぬらし
京都市　山口愛華

○花にのせて君ます方に送らせん玉章もちて小川に立ちぬ
伊豫　睦子

○懐しきみかげもがなと幾千度花野廻りぬうらゝ日にして
玉島　坪井小笑發

○慕ふ人をまつ夜の長きうき事はきえてもかゝる夜半の月かな
羽後　久松喜美

○花とみて花にやぬれん銀のなみの濱路をあさる千鳥かな
栃木縣　宇賀神菜子

○ほがらけき春の朝日は宿にみちてあるじの笑顔けさたゞならず
秋田市　千葉秀子

○おきかへる枝より落て松かげにますく／＼ふかくつもる白雪
徳島縣　吉田紫苑

○七重八重實なき運命の花ならばせめて山吹紅にさけ

○
夕月夜誰に聞けとの笛の音や何とはなしに胸のなのゝく
和歌山　木下操子

○
まぐれ散る花の吹雪のその中にいずこ行く手と定むべきかは
野村光子

○
よき香なる風に吹かれつ二人づれ朧ろ月夜にのみちゆくかな
日向　加藤村雨

○
きのふ見し花の梢はいづこぞと尋ぬる計り繁る庭かな
安房　みどり子

○
里の女の牛かふ川の茨の根に色染しき花韮さく
神戸　安藤絹子

○
夜岸守あまた詣うでの人去りて鐘の音淋し夕づく日哉
石川縣　木原露舟

○
咲く頃は我が學校の櫻花通ふ人足とゞめたりけり
上總　高山十四子

○
野も山も家も立木も雪衣一人はがれし烏淋しきけり
泉南郡　金田芳子

○
やうやうに一つ見出し路のとうにあられたばしる春寒のころ
若狹　長谷川美尾

○
湯あみして春の夜の月眺めてはさながら夏の心地しぬらむ
南葛飾　松　操子

○
月澄みし加茂の川邊の橋の上に星の數よむ幼な子の群
京都　堀登久子

○
なかなかの思ひにたへぬとし月をかくてもいきむいのちなるかな
伊勢　きみ子

○
母に訪ふ醫師は待てば遲くしてまた一としきり嬰兒の泣く
山梨縣　瀧澤とめ子

○
ふりかゝる雪かと見れば袖垣に冬を破りて梅咲きにけり
神戸市　幽　里

○
肌さむく匂ぞ送る春風に畑の鈴菜に夕日さすなり
長野縣　瀧澤さはよ子

○
灰色に朝里とざすもやの中を狭笠していてぬよき人
土佐　高橋白ばら

○
妹の病は癒えず鳥籠の小鳥うたはで春暮れんとす
上毛　飯塚美喜子

○
露の間も夢さえ花にあこがれつ蝴蝶に身をもかへしばかりに
埼玉縣　松本みどり

○
手折らむにあまりに小さき我丈かな妹が乞ひし土手の白百合
赤坂　成富矢須子

○
紅梅の花一輪に歌かきて送らばやとも君がもとにと
岐阜縣　しう子

○
妹は文に封じて故郷の母に送りぬ白桃の花
信濃　駒澤みつ女

○
白梅の薫り滿ちたる廣椽に心ゆたけく月を見しかな
西多摩　森田なか子

○
繰る糸の亂れみだれて我が胸の千々にくだくる春雨の窓
長野縣　唐澤喜惠子

○
はるさめにほころぶうめをやどにしてたに間をいづるうぐひすのこゑ
美濃　日比野雪

○
泣けど友群生り來ず夜のふけて歸る雁きゝ又涙しぬ
若狹　田村かれ子

○
春の海うらゝに凪ぎて龍宮の珊瑚の殿の浮ぶかと見ゆ
若狹　山田錦葉

○
牛の聲糸紡ぐ音たえだえに午靜かなり山里の春
伊勢　大原しづ子

○
一株の桃の根本に鷄啼きて長閑に暮れぬ春の小村は
下總　森ゆき

○
こと繁く文の便りのうとくともやよわすれじな君が深情
越後　眞柄廣子

○
思ひては瀧の音とも還ひ來ていれぞかれつる山の湯の宿
山梨縣　有賀久代

○
丘の上怪しき塚を鳥立ちて一村すゝき小雨そぼふる
秋田縣　曾　よし子

○　伊賀　山村すみれ子

み机の小瓶の薔薇と美し瀬の君をうつしぬ胸なる鏡
○　香川縣　守谷ゆたか

雨の朝口紅の濃きたをやめの白粲しき梅の花買ふ
○　秋田縣　佐藤孝子

梅見んと鶯ともに訪づれて行く道先に梅の花ぞちる
○　相模　鍋田美代子

しら藤の雨にほろ〳〵散る夕べゆきにし人の枕邊に泣く
○　金澤　黑田藤枝

銀世界雛にまとふ枯蔓に赤き實一つ鳥取り去る
○　下野　栗田きん子

空高くひばり樂しく歌ふなり麥笛ふきつ見る子愛らし
○　福岡縣　しげ子

遠里の戀し妹背が面影やせめては見えよ夢になりとも
○　宮城縣　千葉はま子

鶯の鳥をさかさまになくこゑに老もたのしき春は來にけり
○　岐阜市　篠田とみ子

野遊びに小池めぐりて來し園の梅が香に醉ふ我が顏紅き
○　横須賀　秋元春香子

葛城の神の灯ふけて月朧梅が香ゆらぐ奇しき社前
○　伊豫　ふじばかま

歌たべと岸の青柳折り添へてもたしてやりぬ遣り櫻を
○　周防　山本みち子

野路を行く人はかすみにつゝまれてなり〳〵聞ゆ馬の嘶き
○　大坂　木村春江

春の野にかげろふもゆるまひる時羊の息か花の上の雲
○　京都　吉山芳子

卯の花に思ひわびてかほとゝぎす晝夜もわかず鳴き續けゝり
○　下野　金田きん

うぐひすのなくれに春は來にけらし黑髮山に雪は積れど
○　福岡縣　青葉女

三年昔植ゑし緋桃の咲き初めぬ空のどかなり燕さえずる
○　宮城縣　河原榮子

鶯の春の譜もらす紅梅の花美しききさらぎの窓
○　亘理　清野女

いちはやく谷のふる巣を立ち出てゝ春を告げつゝうぐひすのなく
○　靜岡縣　大木みよ子

吉野山上野の花も富士が根のとびし雪衣花と咲きしか
○　京都　堀尾ゆき子

摘み入れし若菜は籠に滿ちぬれど野べの景色は變らざりけり
○　長野縣　瀧澤すみれ

かすかなる月西山に今ははや明けて初日の淸く登りぬ
○　埼玉縣　竹園舍敏子

去ぬる日別れし路の戀しさに今日も辿りて月に泣きけり
○　埼玉　花子

夕暮の梅の香かをる細路を一人行くなりもだしの少女
○　岡山縣　松露子

青柳のふる雨毎に糸垂れていつしか色をいやましにけり
○　佐賀縣　なか子

青柳のよどむ川瀬に影みせて風のまに〳〵波のあやおる
○　山口縣　鹿園

大松のうへをよしとやまな鶴の心しずかに遊ぶ君が代
○　大阪　古川米子

このおもひ誰にか告げむ春雨の寂き今宵ぞ母ましまさば
○　仙臺市　張子

おぼろ月櫻ヶ岡の花見えてかなたこなたにうつる人影
○　大分縣　蓮の屋操子

たそがれや風尙ほ寒き春の日を三々伍々に人走り行く
○　紀伊　三宅水仙

うばたまのやみのよながらふりつみしまことの雪ぞさやかなりける
○　土佐　弘光よし子

み社に手洗ふ人のよき衣に御風ふきて櫻こぼるゝ

○ 越後 畑野 藤子

吹雪する音のそともに寒むけれどこゝはかるたに興あたゝかき

○ 齋藤 もと子

おぼろ夜になき母君の只戀し似通ふ妹をかき抱きつゝ

○ 澁谷 好子

故里にのこせし梅も今頃は主なき庭に咲き匂ふらん

○ 横須賀 柏原 美奈子

朧夜や米屋の軒のくらがりにそと物賴む若き妾かな

○ 伊豫 芳枝

花の月に鳩抱きよれば君が窓の鈴鳴りやまぬ春の風かな

○ 八王子 富本 登美子

野の川の蘆三寸に舟よせて花ながす子にあたゝかき日や

○ 名古屋 東 富美子

低き音に小琴の調べ聞ゆなり菖蒲花咲く草葺の家

○ 北海道 鎌田 しげ子

日の中は軒の玉水したゝれどまた夕べにはつらゝしにけり

○ 大阪 室谷 ひさ

谷の戸を出てよ鶯賤が家のまがきに梅もはやほゝゑみぬ

○ 伊豫 武田 信子

春雨の何さゝやくや若草は萠ゆるやうなる色をしてゐぬ

○ 呉市 清涙女

曉月の雲井はるかに郭公一聲清く鳴きわたる哉

○ 越後 田口 すい

野邊遠く霞めるかたをながむればみえみみえずみ少女むれゆく



磯日和　小池咲子

○ 仙臺 萩原 露子

限りある運命はしひてかこたれどたびし花輪の色はあせにき

○ 越後 平澤 のり子

あたゝかき野邊に花つむ少女子のふりかみなてゝ春の風吹く

○ 上總 松井 きみ子

懐しき故郷の友に別れきて一人さびしき秋の夕暮れ

○ 兵庫縣 石川 曙露

吹く風に奈須野が原の篠笛の遠音淋しき冬の夜半かな

○ 豐後 江藤 ゆき

鶯の啼きつる方や偲ばるゝ花見衣の手をば止めつ

○ 沼津町 飛奈 久枝

ながむれば遠の山端暮れそめておぼろにのぼる春の月かげ

○ 島根縣 長尾 定子

いや高き御國の闇に露あびて外國までも薫る白菊

○ 八重子

蔦絡む枯樹の折れし夕なり古沼の邊淡き花咲く

○ 捨小舟女

心あらばよそになびくな糸柳たとへ錦の風の吹くとも

○ 南豐 小川 月子

つゐ桂賴む兩親年老て兄に別れし悲しやみ路を

○ 播磨 新田 嘉代

亡き友のうつしゑ一人眺めては思ふ宵なり梅の香匂ふ

○ 筑前 平田 秀子

詩の神の御手にひかれん春の野邊きみ右ならばわれ左して

和歌

伊賀　三浦すみれ

○はてしらぬ桑の花眺め飴賣の蘆笛ふく朝期かな
静岡縣　網村凉子

○山里に笑顔見せけん山櫻少女喜ぶひな祭り哉
大阪　不二子

○かざりなん幼き妹のたからをば今日は彌生の桃の節句日
大隅　富來みふ子

○春霞人目朧ろにみわかれど亡妹に似る若菜つむ君
上川郡　喜代乃

○白露のきゆるまに／＼もえ出てゝ春におくれぬ庭の若草
攝津　港秋子

○春日和日は三竿にて心地よや野には草笛聲ぞゆかしき
神戸市　名無小草

○山々に朱鏤かゝる夕まぐれ新島守は海眺めゐぬ
青森縣　松尾俊子

○天そゝる老杉の木に卷きつきて今を盛りと白藤の花
若狭　武田浪子

○春風に吹き送らるゝ梅が香はいづこのやどに旅や忘れむ
境　野子

○昔より變りやすきはあすかゞは淵瀬と云へど人心かな
岩代　白浪

○大木の梅が枝には鶯の初音を聞ら嬉しかりとぞ
上総　佐久間やす子

○浮世をば遠くはなれし山家には春や來つらん梅の花さく
長野縣　泣月女

○山の端に月は白みて曉の露は草葉におきあますなり
上毛　納尾子

○さけべども呼べども更にいらへなしあゝ我祖母はゆきてけるかな
山城　村上よれ子

○春雨の音なう降れる春の夕亡き母上の戀しなつかし
佐賀縣　島津留子

○竹馬友花よりもろき身をもちて如何に此世を過してよとや
丹後　小谷愛月

○敷島の大和錦を身にまとひ歸りこん日を今よりぞ待つ
神戸市　紫峰

○鶯は若きあるじのもの思ふ窓の紅梅に初音もらしぬ
常陸　北洲女

○鶯の聲にさそはれ立ち出てつ歸り迷ひて春月夜かな
京都　武田とし子

○いたつきのみ母の烟に凄く照る比叡の山に昇る月かな
遠江　水野秀子

○物思ふ身にしあらねど何となく我が身悲しき春の夕暮
丹後　阪井峰子

○荒城のとふ人もなき朝夕の露におく月雁鳴きてゆく
佐渡　中川花子

○紅梅の花の香よする朝風に戀のせし府はきにけり
盛岡　米澤白桃

○うすれゆく小森の奥の尼寺や香のかたかし讀經の聲
豐後　安部富士子

○白鳥山紅の芙蓉の粧にも似たる色して明け初めにけり
下野　青木たか

○月姫の戀の使ひか星一つ忍びて落ちぬ梅が小枝に
遠江　菊笠みつ子

○谷に泣くは誰がをさな子か入相を小夜の中山夕時雨する
徳島縣　西野花びし

○み吉野の春をば伯父につれられて夢の國かとしばし思ひぬ
伊勢　よし枝

○御手からみ口づけ受し其折よわきぞかへらん我胸の血は
伊豫　廣井白百合

○美しの少女が肩にふり分けし髮にも似たり青柳の糸
筑前　田中とよ

○春雨に淋しく笑める少女子を不圖見て我は涙こぼしぬ

○　　備館　村島女

おそ櫻それも青葉となりはてゝ時にあふちの花ぞ匂へる

○　　越後　横山文枝

行人をそれとわかれどすかし見る花の下影おぼろ月夜に

○　　岩代　小瀧久子

只見川岸邊に咲くや藤の花逢ふ瀬はいつぞかく別れては

○　　富山市　佐々木蔦子

眞夜中に目さめて歌を思ふ時可愛少女のこゑきこへけり

○　　近江　しげ子

我が友よゆかしく匂ふ梅の花一枝はゆるせ家づとにせん

○　　三河　梅子

錦なす野面に遊ぶ少女子のみどりの髮に小蝶ひらひら

○　　丹後　美年子

春の夜や菫眠れる露吟をば急ぐも君の心如何にや

○　　はる

あめになりて子らはうらめる我庭の垣の萬年青に殘るしらゆき

○　　伊勢　せき

佐保姫が連歩靜かに衣ずれの音かあらぬか春の雨ふる

○　　磐城　鈴木靜子

蠶屋夜毎に見えぬ祖父君は家のひめ太刀錆あらたむる

○　　羽前　美妙子

永き日を門の青柳招げどもとふ人なくてけふまたくれぬ

○　　周防　白梅

白梅のほころびそめしめぐしさに思はず知らず漏るゝほゝ笑

○　　上總　井内かれ子

世の人のめにこそみえれ時ありて吹き渡るらむ伊勢の神風



馬夫　長崎　みどり女

○　　北海道　松操

月落ちて白波寒き巖間より姿おぼろに千鳥なくなり

○　　大分縣　野田なろみ

來給ふと君が誓ひし夕べより春雨しげく降り出すかな

○　　福島縣　笠間きの子

あらたまの年さへいつかふり積し梅さへ今朝はほゝゑみにけり

○　　鳥取縣　桑本きさ子

桃日和詩の翁の庵訪へば坐眠る翁ものいはずけり

○　　福岡市　田中破月

春雨に君がおくりしつゝじばな只いたずらに散るぞ悲しき

○　　德島縣　西野恒子

なるならば百年前の歌人に開けし今日の御代を見せたや

○　　土佐　森田はやし子

しめやかに春雨のふる我が窓に倚りて思ひぬ我が行末を

○　　千葉縣　千本松花月

遠山に月はいつしか入りにけり鹿の啼く音のわけて寂しき

○　　上野　大沼染子

春の雨青色づきし草の上にこぼれて灑る梅の花かな

○　　筑前　若松靜波

波靜かうつれる月を海の底人天津御空の月とあふがん

○　　濱松　星花子

興湧きてゑみ深み倚る夕まどや雨蕭々と白梅かをる

○　　芝　石川喜代子

さすらひや淋し思ひにたへぬ夕戀しき父母の便りよむかな

○　　佐賀市　野田えん子

降りつもる雪の垣れに香らずは誰しら梅の花と見ましや



短文

編輯局選

▲規程　文章の種類は凡て自由なるべし、簡潔なる文字を採錄す、二十四字詰五行以內にして總て振假名附、半紙又は罫紙に認め一人一文を限りとする事、締切前同斷。懸賞乙種。

二等　○橋

岐阜縣加茂郡飯地村　柘植ちか子

妾の家の前に土橋があつて、子供の時は此の橋から流に顏をうつした事がありました、大きくなつてから此の邊に咲く菫が戀しかつた事もありました、しかし近い內に妾がお嫁となつて此の橋を渡ると云ふ日、村境の橋と云ふことがはつきり分りました。

村ざかひの二字あつて數行の文字に無限の感慨あり

三等　○幸福者

越後　梅香子

私は生れつき身體が壯健なので、何時も氣が晴々として居りますから、何をしても愉快で御座います。それに御飯を不味いと、思ふた事は御座いません。ですから私は之れ位、幸福な者はないと思ふて、始終御兩親樣に、壯健な身體を下さいました事を、感謝致して居ります。

兩親に感謝の事ありて此健康も此幸福も無意味に終らず

四等　○西の空

伊豫國松山市西堀端町十二番間方　芳枝子

私はいつも試驗前になりますと、未だ明るい內に西の窓に灯をつけまして、くれて行く西の空を見やり乍ら勉強いたします。どんなに氣持が宜しいでせうか。

晝の光と夜の光と、反映して一種の光線を生む

五等　○時の利用

野の花

私は去年の四月から學校に居る間每日十五分の休み時間每にオルガンの練習をして居りましたら今では兩の手で大抵の物はひけるやうになりました始める時にはやつと片手で音階をひくことができるばかりでした今では自分ながら驚いてゐます。

時間の屑を疎末にしてはいけないと云ふ好い證明です

秀逸　○鳩

本郷　筆子

夕まぐれに鳩が一羽、窓に留まつて動かぬ。太郎は棒でつゝく、次郎は翼を引張る、而して花子は手を叩い

て笑ふ、日沈んで、自由にならぬ鳩は只なすがまゝに嬲られて悄然。ああ世の中は是だと私は思つた。

懷ろに入れておやりなさい

○花係　徳島縣　吉田紫花

花、花と花きちがひの妾は、四季をりをりに咲く花を、絶えず妾の學校へ持つて行つて職員室の中央の大きな花瓶にさします、或時などは、乳兒の手の樣な楓の若葉が餘り可愛かつたので、大きな枝を擔ぎ込んで笑はれました、そして妾はいつからか花係といはれるようになりました。

體操も花神の舞

○名產　備後　井上年子

優しい少女のひなうたと、長閑に床しい梭の音とを織込んで出來上つたのが名產縞絣です。オリーブ色に華美な立絣は都のお孃樣に、利久鼠の淡泊りした散絣は夫人樣方に、強いが自慢の紺の横絣は質素な誌友の方々に、皆それぞれ買つて頂きます。

名產備後絣の廣告も此れ以上には及ばず

海を見る　石狩　篠原靜枝



○百合の長者　常陸　小泉はま子

庵は小さいけれども、裏には奥深い森がありまして、前には清い小川が流れて居ます、此の庵には九十ばかりのおじいさんが一人、村の人等は百合の長者と呼ぶ程で、家の周圍は百合だらけ、夏になると、姫百合、白百合、鹿の子百合、紅百合などが庵を包んでしまひます。

○村の出來事　徳島縣　西野恒子

十四戶の淋しい私の村に、昨日八十九になる私の好な、お翁さんが死んだので悲しいところへ、今日姉さんに、可愛男の子が生れて嬉しく嬉しく、悲しい事と、嬉しい事と、重なつたので、私の心は只もう夢のよう……。村の人口は一昨日までと同じ事。

お値斷のやうです

○樂しき日　仙臺市　相澤張子

一月の間に樂しい日は必ず五度あります、一日は文壇の來る日、初めて

簡單なる盛衰記

の土曜日は家族集つての談話會、日曜は叔母が家に、十九日は町の賣出しなので買物に、終りの廿八日には御小使のあまりを銀行に貯金するのです。

苦しき日の次は樂しき日てす

○寫　眞　　落　葉

妾は寫眞をとる度に一枚づゝ失はぬ樣にして置きます。此頃のこらず出して見ましたら十八枚、一年に一枚に當りますが、生後百日目に母樣に抱かれてるのと今月一月のと比べて見ると、全然別人の樣。此から十八年後のと今のと比べる迄無事に居られるかしら。

少くも一年に一枚づゝ自分の顏は殘して置くべきもの

○冷たいもの　盛岡市　米澤白桃

氷つた水でお米をとぐ時、寒い夜のお針、氷つた漬物に手を入れる時など何れを何れ冷たからぬものはありませぬ、けれど私はそれより尚一增冷たいものを知りました、それは私が溫い父母のもとを離れて他家にお奉公に參りましてから覺えたのでございます。

冷たいものも人情、溫いものも人情

○女子文壇さまに　　滋　賀　撫　子

女子文壇さま只今は誠に有難く存じました、あんな奇麗な花束いたゞきまして、御禮の言葉もございません妾ほんとに嬉しくつて〱直に額の寫眞を取て彼れを壁間にかけましたの、あゝ美くしい三色すみれよ、長途の旅にしぼみもせず。

とこしへに香れとこそ

○根　氣　　愛　知　紫　雲　女

毎月投書するが一度も入選した事がない、けれ共うまずたゆまず漸くのことて又一章できた、入選するまでは……、蜂の巣を見ても蟻の夏働くのも、大工の家を建てるのも、金滿家の成功するのも、あゝこれ皆根氣である、と感じました。

根氣と負けぬ氣

○雅　號　　山　口　酒向とし子

鴻城と申すは山口の雅名でござい升古梅は祖父の雅號で梅月は父の雅號てございますハイカラ式の咲子樣はご自分で半開ロースとつけて入つしやいます。

半開ロースとは如何にも一知半解

○鳥の聲　　群馬縣　大沼染子

朝軒端で啼いて居る雀の聲は其日の誕生を祝すやうて靜かてあります、晝をつげて家々の庭に啼く鷄の聲は此の世の誕生を偲ばせて長閑であります、日暮れ方空啼きかへる烏の聲は明日の日和を知らせて、崇高くあります。

つまる處人間にわからない

○春の一夜　神田　杉山常子

私はせつせと編物の内職、火鉢ごしに兄様は辯護士試驗の御準備、下の家で明日潮干に行くとの事で快活な細君のうれし相な笑聲がする、それに引かへ此二階はしんとして湯のたぎる音さへかすかに、細く、そうして机の引出の中で、時計は遠慮もなく樂しい筈の春夜を淋しくきざんで行くのでした。

上と下の世界が違ふ

○無題　京都　濱部風窓女

出たくつても出られないのはお客の有る時、出なくつてもいゝのに出るのは弟の洟、出すまいと思つても出るのは風引いた時の咳、出したくつても出無いのは夢で追かけられた時の叫び聲、詩でも出さうなのは春の夕櫻樹の下に立つた時、出さうて出ないのは私の文。

出さうて出ないもの今一つ、田舎の渡し舟

○三月頃　廣島　増川とわ

瀬戸内海岸にある廣島市は春の終りの樣て、其處より十里へだてた私の邊は庭先の梅花二ツ三ツほころんで昨日初めて鶯の聲を聞きました、又こゝより七里先の市木峠ではまだ雪が二尺餘りもあるそうてす、市木峠は中國山脈を横切る峠です。

陰陽二道に別るゝ所以

○赤ちやんの顔　西多摩　森田しま子

姉様に赤ちやんが出來たと云ふお報らせ、嬉しくつて〳〵、速ぐに支度をして一里餘りの道を走りましたが、此間目に映つたのは可愛い赤ちやんの顔ばかりてした、が後で考へて見ると例も美に打たれた玉川や、花にあこがれた武藏野は、一切夢心地なのでした。

妹さんなればこそ

○寫眞　岡山市　寒菊

原さんの被布姿は名家の令孃然として澤野さんは奥村百合子女史の樣に安田さんは何時か女學世界に御姉妹で日光へ御旅行なすつたと出ていた加納子爵令孃の御姉樣そつくりて岸さんは如何にも無邪氣に愛らしくそして屈んてる私は一番氣取つて寫つてゐますのよ。

掲載の上はお返しいたします

○三人の母　伊豫　ふぢばかま

私には三人の母がある、第一の母は十年以前夜も長月の末つ方呼べども歸らぬ人となつた第二の母は姉とも云はうか私には第二の慈母、第三の母、おゝ此の母こそ近々迎へ入る可き繼母である、あゝ第三の母よ！幸無妾を御愛しみ給へ、神かけて祈る。

同情いたします

○我身　下野　鈴木まさ

世の中に我身程不幸な人はなからうと思ひますの父には早く別れ今では母と共に働いて貧しい日をおくつて居ります其れで私にいつ裁縫を習はして下さるのと母に聞くと今に習はしてやると云ふので私は嬉しく一心に働いて居りますがいつ裁縫を習へる時がくるでしよう。

たゞ働きたまへ、お針も學問も習へる時がきます

○電氣買ひ　破月子

私の里から博多と云ば博多の人が東京といふ位の都です、昨日末の弟を初めて博多に連れて行きました、足の痛む程見物しとう〳〵大きな商家には電氣が點じました弟がそれを見て買つてくれと泣き出して動きません、私は急に父さんや母さんが戀しくなつて自分も泣きたくなりました。

姉さんも買ひたかつたか知れない

○鈴のいろ〳〵　大阪　登良子

先づ曉から闇を縫ふて新聞屋の鈴が聞え始める次で牛乳屋其から續々豆腐屋が來る耳で聞分てあれは厭な人と解します瓦斯用具屋の鈴學校の鈴午後は又豆腐屋に牛乳屋絶間無のは自轉車の鈴て最終は夜泣饂飩が闇に消て行く。

りん〳〵〳〵、ちりりん〳〵

○母校　小石川　唐崎秀子

飯田町より汽車に乘り福生村で下りて多摩の流れを渡舟で通るそして豐坂を上ると我母校智進小學校である母校には櫻もあるあをぎりもあるブランコもある。

拓かれたる桑畑、拓かれぬ武藏野

○雪樣の人形　鳥取市　上山千重子

紅椿の花を白い糸に通して、下枝と下枝に渡し其下に花むしろをしいて雪樣と私は座りました、今日は雪樣の人形の誕生日です、今私共は薄桃色の服を脱がせて人形に湯をつかはせます、春のひかげがやはらかに人形さんのぬれた頰をてらして。

花の湯あみ

○妾の家　福西　梅せん子

山又山の奥に山を越え谷を渉りして着いた一軒家これが妾の家なのです鳥の啼く日さえ稀なのよだから妾は毎日誌友の皆樣へとポストまで出て行く途中高い所より遠く福島市街を眺めるのよそして妾もあんな街に！

○汽船　大坂　不二香

土佐から大坂へ來たのは、丁度彌生の櫻時分で大分暖く海も大層穩てした、暮れ方人々がお艀へ來たと言ふてるので、此處が國の見終りかと甲板に出て若葉の間より見ゆる燈臺を暫くうつとりと眺めてたら大變船がゆれて思はず尻餅をついたので急ぎ室へ入た

○嬉しい小包　若狹　武田浪子

靜な事！降る雨てか山や畑には、人影も見えぬ然し妙、往來の人さえ絶々なるに、いつにない車の跡の付いて有のは、其跡をたどつて行と、宅

の前で止つて、そして西へ走つて有る、歸ると早速お母様に、車は誰かと尋れると、小包てす兄様から新刊の女子文壇を下さつたの、そう、おう嬉し。

○四方の山々

近江　宇野婦貴

私の村から北に見える山は近江八景の一なる比良山西なるは歴史にちなみある比叡山東北にあるは昔むかでが出たといふ三上山南なるは田上山や金勝山なのであります。

○小供扱

濱松　星花子

下駄にあさ緑の一寸した浮摸様のある緒を見立てたらまあ何てす小供の癖に！赤いのになさいよ!!と有仰る何事に限らずこれなんてすもの一體父様や母様は何時まて人を小供扱ひにするんてせう。

○寂

讃岐　守谷ゆたか

「茂さんが村長さんの娘を貰つたよ」今夜から父上の法會なので主家に一日の暇を貰つて我家に歸ると、母上は待ちかれた様に仰しやつた「さうてすか」と成るべく平氣を飾つて言つたが語氣が震へて顔が赤くなる、母子は暫し無言、佛壇の燈明はしめやかに點つてゐる。

○妹の手紙

牛込　繁子

三年前故郷を出ましてから毎月美いちやんへ少女世界を送つて上げてたら昨日の手紙にあたいも女學校二年生よ未來は文章大家になるんだから來月から女子文壇ての送つて下さい少女世界なんか幼稚だわと嗚呼少女世界の愛讀者だつた美いちやんもう女子文壇をしたう様になりましたても三年の長きに妾が文の道の進まぬ事よ。

大根あらひ　下総　三橋千代子



○私の一日

横濱市　初野子

六時に起き食事の支度し皆様を起します、二階に美い朝日を受けて裁縫します豆腐屋の聲がしますと晝の食事の支度てす午後は習字讀書裁縫を致すので野毛山の五時が鳴ますと夜食の支度てす、夜分は家庭のお話を母様から……寝ますのは拾時です。

○かなしかつた事

長崎縣　松井とき子

私が女學校に入學して始て炊事當番に當りました時三日牛續けて漬物を切らせられました處が指に大きなまめが出來ました其の時の痛さと云つたらありませんてした噫水仕事をすればこんなものが出來るのかと思ふとつひかなしくなつて涙が知らぬまにおちました。

○見る物

茨城縣　鈴村花月子

妾が毎日昇校途中で見る物は朝には青々とした筑波山、行商人、中學生、騣馬等です、それから茫々たる霞ケ浦先生の御顔友達それより書物です、かへりには馬車買物人、便利達それより戀しき家屋すると床ですよ。

○資格

栃木縣　福井八重子

此度妾の友人の梅子様が御嫁に行くと言ふ話を聞きましたから家へ歸と彼のお方は人の妻となる資格があるてせうかと言ひますと叔母様は聞いてお金があるから仕度は澤山ありませうと、とんちんかんのお答に皆大笑ひしました。

○始めて女學校

越中　作島季子

高等二年の課程をへて今年の四月花がまつ盛りて家庭皆手をひいて郊外散歩を企てるなり始めて女學校へ入學致しましたが上級の人が何ても御問ひなさるから何となく心細い。

○雛

相模　鍋田美代子

私の鷄として別に雌三羽雄一羽を買ふて貰ひま

した。毎日卵を三つづゝ産みますので、私は之を賣つて毎月女子文壇を買ひ、又は投稿します殘つたのは貯金として積みおき私の嫁にゆく時の用意てあります。

○花の親族　伊豫　福井白百合

私の親族にには、美しい花子、香の淸い梅子、色のよい桃枝、しとやかな藤野、サツパリとしたあやめ、可愛らしいさつき、面白い萩野、おとなしい百合子、お伽噺にある樣な名がつばきに菖蒲野、あら笑つちやいや實際の名なのよ、そうしてまだ無いのが牡丹、水仙、杜若。

○機織　岩代　佐藤君枝

一日に五すみ位づゝ織れたのが此頃は暖くなつて、三すみ位きり織れません。なぜてすつて？其わけてすか。それは直ぐ向ひの梅の林て鶯が鳴きますので、いつも梭の手を止めてきいて居ります。

○私の不注意　藤井よね

夕方私が裏をしめろ事を忘れて十時頃れましたすると　お母樣が風呂の上に物をおいといたからといつてとりに行かれました、そして裏を見られるとあいて居ましたので、お母樣が、なんぼ交番所の前ても　よく氣をつければなりませんといはれました。

○沖の舟　京都市　武田とし子

「風が變るぞ氣を付けよう」と船首の船頭が雲を睨んで叫びますと、白帆がすうと斜めになりました。檣には色の褪せた赤兒の着物が干してあります、船側にはお櫃も掛けてあります。多分あの中には女も子供もゐるのてしやう。銀の漣が美くしう舟を追ふて行きます。

○光明　岐阜縣　花井華子

お隣の不二子さんは天性不器量なので私見たやうなものはと口癖に言つて見へたが妙な意地て一心不亂と勉强の結果今回文部の檢定に合格なさいましたするとある縣立學校の敎諭さんから結婚の申込があつた是迄暗黑世界の不二さんに光明が一時に輝いた。

○戰ごつこ　北海道　篠原靜枝

今し腕白盛りの小供が五六人、林檎の樹下に集合して、其中て一番强い肉屋の三ちやんが「僕は楠正成だい！信ちやんは誰れ？」と言はれて魚屋の信一さん「ウンそんなら、新田義貞!!」といとも勇ましい。後の酒屋の助ちやんは名和長年、泣きべその幸ちやんが護良親王、鼻たれの吉さんが楠正行、とう〳〵足利尊氏は出ないので戰爭中止。

○過失　京都市　宮原みどり

弟が父上の秘藏の掛軸へ墨を塗つた時、兄さんは僕が硯を置いたのが惡かつたと、母さんは私が氣を付けなかつたが惡いと、妾は懸けた者が一番不調法てございますと云ふ、父上は只笑つて居られるばかりて事が濟みました。

○鶴の聲　韓國　白菊子

私もぜひ一度鶴の唳聲が聞き度いものと思ふ折柄昨日の朝は僅に二羽の鶴が向ふの屋根に唳いて居るのを見ました、矢張り鼓に鈴てすよ。アア床しいあんな淸い美しい聲だものと暫く其處にイんで居りましたが突然鐵砲の音がした。

○かたあげ　秋　萩

おばあ樣はとろと老けるからつまんてお置き、とお母樣はいつまても未練らしく肩に段々こしらへたのはみつともないばかりだからとどうしやうと思つて居るうちにもうゆきが出來なくなりましたから自然おろしました、すると兄樣がやあ令夫人！だなんて仰しやるのてございますもの。

○靜寂　安房　高梨よしえ

式場に列して君が代の唱歌を終へた時。大嵐の後、大地震の前、霜の夜、雪の晨、歲の暮れるの急はしさを越えての元旦。

○私の村の人々　讃岐　久本るえ子

此頃天然痘が流行て私の村ては役場て十五才以下の者に種痘をすることになりました所が村の人々は種痘を植ゑた日お湯に入つて其所をしつかりこすれば出ぬからよいのだつて大評ばんてすまあ悲しいことには私の村にこんな人ばかりてす。

○桃の實　藤澤　常盤幸子

音に聞こえし鵠沼の桃林も漸々破壞されて桑畑と化した。昔を忍ぶ可き名殘りの跡は僅々我庭内にのみ存してゐる、內外の桃果の熟するのは八月頃が最も盛んてある竿て落した眞紅の桃をクリ〳〵とむくと赤い雫がポトリ〳〵と眞實に甘しいわ。

○あゝ嬉し　美濃　北野山百合

妾が裁縫塾に通ひ始めてからもう三年にもなりますのにまだ一枚もお小言なしに仕上た着物はありませんてしたが幸にも今日仕上たは義姉上が始めてのお花見着可なりよく出來ましたとは師の君のお言葉それを聞いた時の妾の心は。

○春の朝　大阪市　山内溪子

今朝妹が、井戸に水を汲みに行くと、今までこぼれ米を拾つて居つた雀が驚いて、そばの櫻の木に飛んてしまひました、すると、櫻の花がほろほろと、妹の背をかすめて、地に落た。

○私の村　土佐　門田富士子

後も東から西へ山つゞき、前も山で東の高いのが城八幡、次が茶ヶ森、其西らが針木山て西南が少しあいて居る、山にかこまれた小さい村てあるけれども、新しく開かれた村道は町へまて一直線、げに住めば都てふ諺にもれない。

○ひとり子　攝津　森井愁花女

一人子と云へば淋しいもの。可愛がられるには可愛がられるけれど、淋しいのも人一倍。あゝ姉さまがほしい妹がほしいと、明暮れにおもふ。

○思ひ〳〵　大阪　白露少女

秀子樣は百合、花子樣は櫻、文子樣は野菊、靜枝樣は撫子、君子樣はすみれ、道子樣は萩、次代樣はあやめ操さんはばらの花がお好てすつて私はこんな種々の美しい花の上に朝夕宿る白露お好きですのだからこんな名をつけましたの：……。

○汐干狩　南品川　風間波流

籠を手にして石垣を降りる。

綾とり　きん子



遠く迄潮ひた海の面には、數限りない船が、紅白紫紅の彩旗を立てゝそれを潮風がなぶつて居る。彼方、此方を漁つて、潮の遠鳴が聞へる頃には獲物は籠に滿ちて居た。

○自炊　岡山縣　田鶴子

學校て教はつた家政學の應用にと、新學期の始めから友なる人と自炊を始めた、不思議な事にはいつも俊さんのこさへたものは甘くて私のは辛い、又俊さんの焚いたごはんは軟くて私のはいつも硬いのです。

○理想　山口縣　酒向とし子

皆樣笑つてはいやてすよ私の理想を國に例へて云つたならば京都、花に例へたならば白梅、人に例へたならば吉田松蔭先生の母君。

○ネーブル　播磨　佐久間紅花

今年は手入が宜かつたので大なネーブルが澤山なりました今朝薄暗い中から姉樣と二人てぴちつぴちつと鋏取て升が中々取りきれません午後妹に持せて選者の君へ參らせます、年は八つ名は緣櫻模樣の被布を着て豐な頰に笑浮べながら昔ある時を歌ひますから聞いてやつて頂戴ナ。

○小供　名古屋　秋葉こう女

今日は五日てお寺さんが來てお經を讀んて居りますと私の弟の五ツになるのが飛んて來てぼうづぼつからかしてやれと云ひましたお經が終るとお寺さんは一ぷくしてからぼうにぼつからかされては困るからといつて歸りました。

○留守居　玉島　坪井小美榮

お父樣は昨日鯛あみ引に水島沖へ行かれました私は其晩風呂に水をくみこんて置て今朝未明に起きまして其下をたきつけ朝拵へして外に出て見ました丁度其時太陽が金銀の靜かな波の中より拜まれましたア、お父樣もやがてお歸りなさ

ゐてしやう。

○隣の子　千葉縣　益子操子

私の家がまだ引越したばかりの頃、每朝お隣の格子の前を、七つばかりの大層可愛らしい子が掃いて居た一月程經てから、其子はお隣のおかみさんの連子であると云ふ事がわかつた、そして父親と云ふのは、日露戰爭の際、旅順で名譽の戰死をしたのださうな。

○夢のあさ　土佐　高橋白ばら

「夢に故人を見るのは水のほしい時である」とは村人のいひ傳へであります。私はむつきにある頃別れたお顔も知らない父樣…自分の常にゑがいて居る其の父樣…が時々夢に見ます。嬉しさかなしさに其の翌朝必ず墓參して水や花を澤山手向るのが例です。

○儲け雛　埼玉縣　岩田文窓子

夕方雛小屋を見ると、一羽雌雛が居りませぬ、二三日さがしたが、とう／＼見當りませんでした。忘れて仕舞つた暖かい日、椽で裁縫して居ますと來ないものと思つた雌雛が、それは／＼可愛い雛を、十二羽引き連れて來ました、日記帳を出して見えぬ日から數へると、正に二十二日目。

○迷信　東京　香月綾子

隣りに住む內は非常の淸正公樣信者ですよ、朝は早くより太鼓をたゝいて祈ります。近頃其の一人娘が病氣にかゝりましたら醫師に見せず南無妙……とかいつ心に祈つて居ましたが、とう／＼死にました。斯んな家に生れた者は幸でしようか不幸でしようか、あの娘が可愛さうです。

○目覺時計　大連市　林正子

妹が朝寢坊をしますから、早く起きて叱りますと、目覺時計がないから起きられないと云ふて居りましたら、今度勸工場の賣出して景品に貰ひましたら其翌日から六時にチン／＼となり出しますとすぐ起きるやうになりました。

○冬の朝　廣島縣　長谷川しげよ

朝早く南側の障子明けて二階から往來を見て居ると隣の下女が寒さうに惣菜を手にして裏の川に出た交番の横に車夫が四五人膝掛を肩に掛けて焚火に當つてゐる すると屋根の上から塒を出た鳥が一羽なき乍ら向へ飛去つた。

○厠の中で　丹後　鹽見千代子

美くしくない談で、失禮ではありますが、私は原稿の大部分は、厠の中で考て、大略を作つておきます、そして勉强時間に與へられてある夜の二時間の內、半分を變して、添削するのです。

○獨言　越後　乙川ふじの

お父樣は、お祖父樣によく似ていらしつて鼻がたかいよ、兄さんのはひくい、しかし、うしろ姿がお父樣にそつくり、お母樣のは、美枝樣とこのお祖母樣に似ていらしつて鼻がひくいのよ姉さんのも、そして私のは？。

○裁縫　下總　板橋たゞ子

妾は每春村の女子に裁縫を敎へて居りますが、農家の娘たちですから名前を呼ばれてもろくに返事の出來ない者があります、ですから每朝一時間位は農家に適切な禮儀作法、その他女訓談女子名鑑などの談をして聞かせます。

○私の日課　沼津　八代美代子

六時起床、七時より八時迄習字、八時後十時迄讀書時間、十時半より音樂の稽古、十二時半より四時迄裁縫（但し時々の外出は此時間中）晚餐後九時迄讀書音樂、十時就寢、但し此は三月一日から五月卅一日迄の時間割です。

○同情　岩代　松の根平

平日は、何とも思はないが、旨しい物杯を多く喰べすぎた時、幾分か扣へて貧しい者に與へたなら、什麽に喜ぶだらうと、同情の心が起る。併し實行は却々出來ない、人は意氣地ない者だと、其時計り悟るのである。

○水蜜桃　山口縣　深山鶯

私は二三年前に水蜜桃を一本植ゑて置きましたら、去年は大きなのが二つなりました、私は大切にして熟れるのを待つて居りますと、何時の間にか一つは弟がもいでしまひました、殘つた一つを祖母樣とお母さんと私と三人で食べましたら非常においしうありましたので、私はもう一本植ゑて置かうと思ひます。

○春の便　京都　岩淵國子

なつかし友の第二信、櫻花美はしき新式封筒は神田の正代樣盛の浪花の芳枝樣からは愛らしい子の涙に曇る憂ひの繪葉書私も此樣に泣いて居りますと土佐の重子樣は紅ばらの狀袋東の空の英子樣からは忘れな草の水彩畫あゝ私は闇黑の森に虫の音を秘めて亡き父上へ。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む　用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

二等

鏡拭いて春の淺きを知る夜かな　上總　ひさ子

三等

捨てられた小猫が啼くや春の雪　兵庫鐘紡支店内　和田光枝

四等

繪日傘の優しき使來りけり　荏郷村庋　青木まさ子

秀逸

神前に朝の灯や時鳥　三重縣　鷹山銚子

春雨や借りてさしたる蛇の目傘　下毛　善子女

梅が香や夜の妻戸の明けはなし　信濃　瀧澤ひで子

春の水唄する方へ流れけり　横須賀　藤野すみれ

櫻散る哉と筆とる机哉　埼玉縣　飯塚たい子

明けぼのや朝に匂ふ梅の花　茨城縣　大崎誠子

田の中に人なき家に草しげる　丹波　齋藤笑子

白菊や垣根くずれし古館　茨城縣　中山道江

暖からず寒からず世は櫻かな　羽前　美妙子

佐保姫の衣洗ふや春の雨　埼玉縣　野原高子

花の中に湖あり社千木高し　磐城　鈴木靜子

雛段のともしび動く夜寒かな　はる

春と夏二色にして藤の花　まつ

紅梅の紅と匂ひぬ嫁御寮　遠江　菊笠光子

桃の咲く村に人待つ空車　美濃　佐野富美子

神風や伊勢の濱荻音もして　盛岡　白桃子

蝶二つ高くも飛ばず日は午なり　千葉縣　花澤りよ子

桃咲いて彼岸日和や地藏尊　茨城縣　佐藤靜子

ゆくりなく開きし窓に牡丹哉　上總　齋藤秀子

若草や看板かきしこぼれ墨　長野縣　瀧澤さつき

空瓢たゞいて花見踊りかな　佐賀市　野田えん子

雪消えて南の椽や梅の鉢　長門　紫雲女

幾棹の簞笥長持かすみけり　尾道市　むらさき

朝さむや素足て渡る長廊下　神奈川　小原笑美子

白梅に刀打つ吉備の男哉　紀伊　しづ女

花散つて白壁長き御寺かな　伏見　幸子

病癒えて布團干しけり桃の花　磐城　渡邊英子

桃咲て古りにし軒や種袋　名古屋　青山美智子

春風や和田一門は騎馬で來ろ　伊勢　大原しづ子

ながき日を元結晒す女かな　上總　渡邊汀子

彳めば片袖さむし後の月　靜岡縣　杉山富佐子

競ひなく蛙や小田のうす曇り　相模　鍋田美代子

僧は皆肉食ふ寺や紅牡丹　伊賀　三浦くま

谷の道狹めて藤の盛り哉　靜岡縣　絹村涼子

明月や仰いて高し天の原　岩代　白浪

降り溜まろ田舟の雨や鳴く水鷄　千葉縣　池上信子

小雨して切風かゝる柳かな　岐阜縣　金井露子
橋かけて名所作りぬ花の山　越後　野澤惠喜子
春の夜や白粉くさき風呂の中　兵庫縣　まさよ
圓山は夜櫻によし君來ませ　京都　菊江
鶯の聲もあり／＼瀧の音　徳島縣　上野浦花子
朝ぎりに人ありと見し茶山千哉　千葉縣　千本松花月女
村酒屋桃一本の盛り哉　攝津　和久薫子
陽炎や菊苗かこふ古俵　大連　林正子
開墾や木の根も焚きて春淺き　信濃　内山きみを
花のみち青葉のみちや風かをる　信濃　内山犀波子
春さめに木馬淋しき體操場　豐前　石井とく
小式部の門を慕ふて胡蝶哉　三重縣　田中耕子
はだ寒や木立の中に布晒し　白菊子
牛を飼ふ長者が原や桃の花　常陸　濱千鳥
桃も咲き牛も居て野の長閑さよ　長崎　松尾れき子
茄子苗の紫ふかし春の暮　横須賀　齋藤松代子
つみくさの子守の唄と牛の聲　茨城縣　長井誠子
三保崎や松の緑と初がすみ　靜岡縣　小林榮
我が膝に猫の子ねむるぬくみかな　宮城縣　千葉はま子
酒を飲む方を櫻の表哉　名古屋　志水夏花女
今日嬉し明日又嬉し松の内　印旛郡　南天女
川下によび行く聲や螢狩　大坂市　河盛よしの
雲雀なく頭や野に人山に人　周防　山本みち子
其の色に降つて居るなり花の雨　靜岡縣　大木みよ子
前掛に包みてあまるつくしかな　下野　金田きん子
ゆく春のかたみなりけり蝶日記　宮城縣　河原榮子
炎天や願ひし雨も煙ほど　信濃　安坂蠶鵠
五月雨に庭の飛石島となる　佐賀　なか子
行春を島守島を巡りけり　茨城縣　三好ふみ子
百本の櫻植ゑたき窓の下　島根縣　長尾定子
菜の花や白帆の見えて沖遠し　金澤市　木原蓮舟

花嫁の手際見せたる薺かな　安房　はな子
白露や結び目の清き小柴垣　若狹　長谷川英尾
あたゝかは櫻にしろき小村哉　赤坂　さゆり
暖き風は南よ櫻花　赤坂　澤野ゆり子
蜑人の佛になるや須磨の秋　山梨縣　瀧澤ちよ子
雛棚の人形ゆらぐや春の風　信濃　駒澤たほ子
音もなく水流れ去る枯野かな　上總　鈴木梅子
春の月岩なき山を登りけり　信濃　山越悦子
谷川のうねり／＼や冬木立　遠江　藤野矢須子
椎の實の落ちて音する夜寒哉　上總　渡邊汀子
來ぬ人を松尾の浦やほとゝぎす　福島縣　睦女
淡雪や芍藥の芽の二三寸　備後　田邊夢也子
曇りても晴れても唄の茶摘かな　千葉縣　三橋たけ子
海棠や椽に乾したる蛇の目傘　牛込　櫻井美園子
豐かなる還城樂や墓の花　尾張　數島はな子
夕霞人は竹屋の渡し舟　三重縣　川原操子
女人講各々の齒に冴返る　尾張　井月田つふ子
三日月の雲間にみえて啼く梟　越後　藤村三枝
針の師の宿を訪はゞや桃の雨　大阪　日高豐子
春雨や歸り車のいと遲し　上毛　飯島きよ子
うぐひすや机の前の嵐山　芝　ひさし
紅葉あり紅葉の宮と申しけり　鳥取市　倉光活子
花七日雲に乘りたる心地かな　岐阜縣　花井幸子
紅梅に網ほしてある魚村かな　堺市　川野清子
柿の木に幕を打ちたり猿芝居　伊勢　越村文枝
春風や紅絹の脚絆の連れ二人　越後　外山れつ子
貸した灯を見送る花の小徑哉　八王子　小池咲子
世の中がせまくなりける霞哉　柳河町　佐野もゝ子
白酒に小さき笑ひや姉妹　伊豆　太原あゐ子
十五夜やすゝき吹かるゝ椽のさき　臺北　光子
櫻咲くや椽の上なる鳥の糞　伊賀　美佐緒子

琴の音も朧なりけり廓の月　横濱　初野子
夕月の井戸に米とぐ娘哉　千葉縣　豐子
音のして水田に落つる椿かな　下野　靜江子
賤ヶ家は離に傘なし雨の瀧　金澤　白百合
吹く風の戸を搖がして夜寒哉　瑞穂村　鈴木末子
姫君の言葉賜ひぬ春の宵　横濱　小野美都子
朝風や青葉がくれに馬子の歌　下野　磯みい子
熊の皮客にすゝめて榾火かな　大阪市　辻廣子
眠りつゝ覺めつゝ汽車の夜長哉　千葉縣　葛岡禎子
春の聲空いつぱいに風　羽前　高山節子
小坊主の青き頭や春寒し　仙臺　三浦まつ子
榾の火に地頭罵る翁哉　京都　藤村華子
曉や水鶏のつゝく薄氷　千葉縣　ふみ江女
春立ちて吾浦々の出船かな　伊豆　上原よれ子
かぢの葉に砂吹き上ぐる夜の風　下野　三浦花香
佐保姫の髪をしだるゝ青柳　越後　河島和歌波女
桃山の中に淋しき墓の松　愛知縣　内山ふみ子
春雨や袖に濡れたる稽古本　駿河　松永しげ子
倒れても田を動かじと案山子哉　新町　靜子
山を脊に桑つむ人や暖かに　神奈川　大貫てう子
何處となく囃聞えて春の月　駿河　清水雪枝
琴の音は誰が隱れ家ぞ花盛り　岡山縣　播磨吟子
オレンヂの雲のりボンや夕映ゆる　越後　志賀美代子
夏痩の我から知るや琴の爪　名古屋　吉田波子
松の葉の散り積む關や冬の風　はん子
初蝶や花屋の門の桶の水　丹後　神田春子
ゆき逢磨きえて梢に養の鳥　栃木縣　青木その
君が下駄に春の月さす戸口かな　大阪　岡菊枝
野に山に人とりぐの彌生哉　岡山縣　せいげつ女
袖かざす桃の落花や俄雨　肥後　赤菊
天狗住む鞍馬の奥や花清し　京橋　三好まさろ

大またに下駄のあとあり雪の道　石川縣　山田朝子
梟もなくや若葉の夕月夜　滋賀縣　藤野やす子
順禮の鉦にかつ散る櫻かな　山梨縣　瀧澤やよ子
敵去りし壘の上や春の月　兵庫縣　明月
縮まりて北風に立つ少女かな　日本橋　磯部松風
鶯の調子凍えて初音かな　深川　牧野はん女
朝霞や花に咡く人の影　伊豫　曉子
草臥れたやうな笛吹く汽船かな　紀伊　木下操子
痩せる迄啼くよ深山の寒苦鳥　上總　金子ふく子
寒月の光や水のくぼむ程　安房　かく子
雲雀鳴く麥の畑や朝月夜　筑後　れんげ
藍香る染屋の軒や梅の花　伊賀　前田くに子
荒寺や佛の顏に春日さす　岡山　黒住卯の花
小男の瓢箪荷ふ花見哉　八王子　芳村秋水女
閉されて春の夜を泣く女かな　京都　まさ子
春雨や神燈多き宵祭　備中　菅森鳳骨
梅林に酒あたゝめて連歌哉　靜岡縣　村瀬しげ子
探梅に村長殿も來ましたり　柏原　帖佐慶子
石鹸球の五彩飛び行く春日哉　伊賀　關本梁子
口笛に鶯眞似る梅の中　京都　早川梅花
春の野や鼓をならふ影法師　三重縣　帆山靜子
あめほそし夢の影追ふ春の朝　信濃　花世子
霜の夜や芋洗ふ音聞えけり　錦子
短夜を音して竹の雫哉　上總　芳月女
春雨に蝶のお墓の崩れけり　尾張　杉江さく子
妹が障子あけたる雪見かな　笑子
鑛毒にやせし小川や梅の花　大和　榮山はるの
山ふかき御寺の門や百舌鳥のなく　大坂　眞田芳子
朝顏に古蚊帳干しぬ奈良の宿　佐渡　本間みづほ

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

二等

○興津より

遠江　菊笠みつ子

興津の濱邊より一筆御便り申上げまゐらせ候。妾事此の地の友の君に用向きありて昨午前十時着し申候。直ちに町の西端れなる友の君を訪ひ奉りて用事をすまし昔今の物語に夕暮を忘れ申候。

夢にのみ見て幾久しくなつかしみゐたる友の君と語りし嬉しさもさる事ながら、幼きより好み親しみたる海邊を逍遙する事の妾にとりて何より嬉しう候。

あまりに海の戀しければ今日一日の濱邊の散歩に尚ほ飽き足らで、今宵も亦波の音枕に海の神に逢はばやと只今濱邊より旅館に戻りたる處に候。

妾が薩陀の峠に富士を眺めしは今朝九時の頃にて候ひき、金波銀波の漂ふ彼方、松の並木を縫ふて行く汽車の止まりしは蒲原にても候ひしか、千本松原小松原てふ沼津のあたりにや、白帆の二ッ三ッ浮び出て申候。梅に水よき三島の里は箱根の眞下に、その南、山の少し煙りたるは溫泉の靄湧く熱海の谷なるべくと覺え申し候。

濱邊に沿ひて西すべく振り返れば三保の松原は見ずとも眼に入り申候、そのよき眺めは今更申し上げず共の事に候、されど黑煙の一條、此の頃常に登るは何となう俗化せられたるやう覺えて怨めしう候、白き煙にてもあらば、羽衣と思ひなしてもたゝえましものを、返す返すも憎らしう候。

程なく大なる岩の幾つとなく、海に伏せる所迄參り申し候。此處こそ妾等が學びの窓にいそしむ暇を、遠足して淸水より船にて此の地に遊びし折柄揚りし處なるはお忘れなされ候まじ。妾はそのかみ偲びつゝ宿に歸り申候。

硯の傍なる半巾の中には青貝紅貝櫻貝さては奇なる石どもなど、納まり居り候間歸宅の節御分け申すべく候明日は濱づたひ淸水に出で龍華寺に高山博士の墓を訪らひ、迂廻して久能の宮に詣て、それより靜岡に出で明後日歸宅致すべく候間、詳しき事は何れその節御話し申すべく候、かしこ。

（評）簡約にして尚ほ且つ其の景を偲ばしむるに足る、加ふるに聊か

の情氣なく、才筆と謂ふべし。

三等 ○友の許に

長野市 紅ばら

妙様只今歸宅致し候二三日が遂一週間となりて、要事の重み居り候なれど 先づは何事もおきて申上候、三ッの折母様に別れて六ッの彼年迄、手塩にかけくれ候ひし人、田舎者なればとの、想像は反して思ひの外人柄よき人に候、口許に溢るゝなつかしみ、時折夢に見る人に似て、嬉しさは遂不吉と笑はれ候ひしが、涙の出で申候、折節の話は逝きし母様の上に及びて、今の繼母様にまして美しく優しかりし事の數をあげて、せめてもの思ひ出となし候、乳母が子の私には乳姉妹にて土臭き姿黒き面も仲々に可愛く、飾氣なき住居なれど何處にか、和氣のたゞよひて、冷き私には、人にまして身に染み候かゝるは嬉しき事の一ッ二ッに候へども、餘りに時間とり候ひては繼母様の御機嫌も如何かと存じ候へば是にて筆とめ申候何れ兩三日中に參上致し久々の話聞え上げ申候。かしこ。

（評）讀みゆく中に聊か周章氣味に聞ゆれど此文冒頭より既に凡庸の手にあらざるを思はしめたり。

地形つき

牛込 佐野貞子



四等 ○兄上への返し

大坂東區横堀六丁目 木村春江

御地は如何今日も亦雨に候侘しき日にも候哉うつら病みます人もあるよと思へば中々に胸の痛み申候よ、母君ゆきましてよりは一入の御愛みに、かにかくと思脳ませ玉はる御情、今更ならねど身にしみて、なんぼうか嬉う承り申候、御目にかゝり候ては、何となう、心おくれて申上兼候ひしも我心はとくより固く定まり居候、兄上よ、かの君の破約をいひ出でたまひしも、我らを思し玉ひての思召なるよとは、當時確に、兄上様より承り候事と存じ候不治症の肺とならせ玉ひしとはいへ一度さばかり固く約し玉ひし者を義に固き兄上の容易く解き玉ひしも亦我身思し玉ひての御事と思へば、恨めしき迄勿躰なく以來幾夜を人しれぬ涙に明し申候、思ひ掛なき昨日の御來

訪に思ひがけなき御話の數々身にあまりて嬉しうは存じ候へども、かくては病みますかの君の思召や、いかにはた師とも兄とも頼み頼まるゝと宣ひけむ十年の清き御契の行末いかゞあるべき、兄上と諸共ならでは、まみえし事もなき身のゆめうきたる心からにはあらじと推し玉ひなば兄上よ、かの君御身の定まり候迄、われは此の職に隨ふ事を御ゆるし下され度候。申さばつきぬ思に候へども、御存じの筆に候へば、とても、うつし難く、さりとて御目にかゝりては猶しも、きこえ上げがたき甲斐なき身に御座候、只此心石よりも固くと神かけちかひ申候程に、何方樣へも、兄上より宜敷御斷り置被下度此儀伏して御願申上候、かしこ。

（評）婉曲なる筆のうち千萬のおもひを述べ得たり蓋し凡庸の筆の及び能はざる所。

五等

○亡せし妹の友へ

大連市磐城町八三號地小泉方　林　正子

芳樣は未だお歸省り遊さぬかと朝夕待ち焦れ居りし妹は遂に御歸りをも待ち得で、昨夕八時逝き申候。御許樣とは振分髮の昔より御親しく願ひし事とて、今はの際迄も御名を呼び申候、昨朝より昏睡狀に陷居り候處八時頃ふと目を開き、姉樣芳樣はと訪ね候まゝ未だ御歸りなき由つげ候處、ホロ／＼と涙を流しもう逢へないからと申指環を拔き取り之を芳樣に渡して、とあとは何か言ひたげに唇動し候へ共言ひ得で逝き申候、四月にはお揃ひの小袖着て京都見物に行くとて去年より樂しみ居しも最早空想に終りしかと思へば小袖見るも涙の種に候、親しき御許樣に逢さで死せしかと思へば誠に殘念に候、御許樣の一滴の涙は千僧萬僧の讀經よりも喜び候まゝ、優しき御手に香花御手向やり下され度伏して御願ひ申上候。

（評）此文愚痴めけることの少しもなきが一しほ讀む者の心を動かすなり蓋し凡手の企て得る所にあらず。

秀逸

○人の妻の死したるを弔ふ

大阪市　辻　廣子

きのふうかゞひまつりし後御病勢いかゞと夜もねむられ申さず神佛にねがひかけ祈り居り申し候ひし御甲斐もなく只今のお知らせ肝も魂も消ゆる心地にてたゞお文をかほにおしあてつゝ泣きあかし居り候おもへば兼ねても御承知のごとく私とは小學校以來二つなきお友だちにてお家に嫁がせ給ひしお時も丁度私が此家に參りしと時こそ違ひ候へ同じ年の中なるなどいかなるお契かとお逢ひ申すごと互にお話し申し來りしを先だゝせ給ひし御事却てはお恨みにぞんじ候、お病中も常におそばに侍りお快復の後は上野に遊ばむ隅田川に棹さ

さむなどあなた樣の仰せられ候ひしをせめてのお慰みにてあかしくらし遊ばされ候ひしに昨日までも最早氣力もつき候やうなれば近き中に起き直り申さむなどのたまひしに扨もとおいたはしきお事に御座候あなた樣のお歎きはさる事とお察し申し上げ候へども私の身もおそしはかり下されたく候さりながらお緣組遊ばされ候ひし時より今に至るまで一方ならぬあなた樣のお親切には深く感じをられ候おもやうにて私には御病中にもしばしばお語りきかせ成され候ふ事も候へば是のみはせめてのおあきらめ處かとおそれながら存じ上げまつり候何れ跡より參上よろず御弔詞申し述ぶべく候へどもさし當り別封おぬさしろ聊ながらさゝげたく候間お取りなしおき下されたく候まづはとり急ぎみだれ心の一ふし聞え上げ置き候、かしこ。

（評）筆よく其の情に伴ひ殆んど遺憾なきが如し。

○梅見に誘ふ

越後　梅　香　女

永々の間澤山の雪にとぢ込められて居りましたので、外出も叶ひませず、籠城致して居りましたが、やうやう樂しい春になりましてほつと一息致しました、本當に雪籠りは嫌で御座いますね。先日から父と白山の方へ梅見に參りたいなどゝ申して居りましたが、今朝雨戸を開ける折、ふと見ましたら、軒端の梅が笑ひかけて居りましたので丁度明後日は日曜で御座いますからどこかへ參る事に致しました、それで一人でも多い方がにぎやかてよいから　芳子樣御誘ひしてはと申しますの、如何で御座います、まだ草花は咲きますまいけど嫁菜や蓬などがやうやう芽を出しかけましたでせう、ともかくも、春風に吹かれながら、四日間の、うさはらし致さうでは御座いませんか、御暇でしたら是非被入いましな、詩才に富で被入る貴女樣の事ですものさぞかし例の御袋をにぎはせるで御座いませう、それからまた北山おろしの風が、なかなか寒ふ御座いますからショールは御持になつた方が宜しう御座いませう、もう一とつ、短冊はぜひ御忘れないやうに。出發は午前に致しました、御辨當は此方で用意致しておきますから念の爲め申添へて置きます。きつと入らつしやれるやうに御母上樣に御願ひ遊ばせな。てはよい御返事を御待ち申し居ります。さよなら。

（評）かくては何と言うてお斷りが申せよう、平凡なる中にある力を持つて居る。

○東都の兄へ

豐多摩　渡　部　貞　子

兄樣、只簡單に申し上げます、兄樣先日山田樣が東京から御歸りになりました、之だけで明白にお得會でしよう、母樣と妾を前に置いて涙を流して御謝罪しました『僕が光雄君の爲を思へばこそ東京に出せと貴女に御進め申したのが今は反つてあだとなりました、』と而

しもう云ひますまい、是迄の仕送りも母樣一手でどんなに苦しんで出しなされたかも云ひますまい、私は兎も角母樣がどんなにお働きになりましたかと云ふ事も只兄樣の想像に任せ申します。今春も溫くなつて梅も香ふと云ふ時頃に母樣は凍傷に困つてをられるではありませんか、之も只兄樣を賴み、力として居ればこそでございます。ですもの、此間の母樣のお力落はどんなでしよう、妾もほと〳〵おなぐさめ申す言がない程でございます、ねえ兄樣大くは言ひませぬ、どうかお心を故鄕の破家にお向け下さいませ、そして只母樣のをやつれに成つたお顏を想つて、妾の切ない心を想つて、兄樣一日も早くお歸りなすつてくださいませ。

（評）言ふべからざる悲痛の情を感ず、才筆といふべし。

○都にある妹に　大阪　紫泉女

露さん何がそんなに悲いの？絶望なんて困りますね：それは仰せの通り人世は實に不如意なものですわ先生もあんなに望をかけて下すつたのだし露さんも隨分よく勉强してお出だつたのだらう殘念と思ふのも無理はないでしやうが然し露さん試驗學力以外に運といふものがります、學校の成績調査試驗はそうでもないが入學試驗なんかほんとうよく出來る人でも不合格で出來ない人が僥倖に知つて居るのが出て合格するのがあります、且又一度失敗したからつて自暴自棄して折角の美しい希望の光明を失ふなんて假りにも堅忍不拔の人といはれますか、成功は必ず堪へぬ逆境に忍び煩悶にうち勝つた勝利者に限るのです、少しの事にくよ〳〵と憂愁煩悶を重ぬるものにどうして立派な人がありませう。御覽なさい落日の後には夕雲に浮び出ずる新月の光があり殘月の後には希望をはらむ朝陽の紅があるぢやありませんか。大煩悶後には必ず平安の光明安意の活泉が湧くものです何を悲しみ何を歎く事がありませう。こんな事で露さんが絶望しておしまひだつたら私はほんとに亡きお父樣の位牌に對してすみません。私はお父樣に代つてどこまでも露さんを成功させなければなりませんから此頃は日中は畑て耕し夜は機を織りて露さんの學資に窮しないやうに働いてゐます。此のあはれな姉を思つてどうか心をとりなほし先生のいはれた塾の方へ入つてもう一年よく勉强してあつぱれ來春の凱歌をあげて下さい。都は寒いとかよく身を大切にして病はないやうにね。今日はこれて筆をとめます伯母樣によろしく、さようなら。

（評）文は生硬の難あれど句々躍動して情の切なるを覺えしむ。

○愛兒を喪ひたる友に　伊勢　越村文枝

只今お手紙を拜見しまして、夢かとばかり打驚きまし

た。人は喜び狂ふ春風を、さぞやあやしう心を傷める秋風とも御怨み遊ばしませう、その御心の程、御推量するのも涙の種でございます。

思ひ出しては悲みに堪へませぬ、それは貴女がまだ此地にお住ひの年、やう／＼物心のおつきなされた、光雄さんをお連れ遊ばした時、私は庭の紅梅の枝を手折つて、光雄さんの帽子に挿してあげました、其時の可愛いお姿、私は今も忘れは致しませぬ、今年もその紅梅は咲きましたが、今はそろそろ散り落ちまして、殘つて居るのは、ほんの二つ三つ、こゝに封入しましたのもその一つでございます。あゝ、他人でさへこれほどに思ひますものを。ちようど此花のように、今こそ斯う落ち果てましても來る年にはまた樂しい春を迎へます。あまりお歎きが過ぎましては、お身體の障りにもなりませう。一しほ御用心遊ばすようねんじあげます。

（評）洗ふたやうな筆。



春まち　青森縣　松尾たい子

○詩集を贈るとて

磐城　鈴木靜子

落花流水、あはれ筆を捨てし身には只々無意味のものと相成申候。

詩集一巻這は妾が回想記に候、前半生の面影に候、もとより詩どしての鑑賞を汎く需めんとにはあらで、悲慘なる人世の荒浪にもみすてられし磯のうつろ貝、去りながら、せめてもの心やりと耳にあてゝ海の歌きゝしといふ例もきゝ候まゝ、折節のかず／＼をかきあつめて、薄命史とは名づけ申し候。

人世の謎とくに由なかりし苦吟の聲、一として、眞情ならざるはなく、若しや温き御身が同情をよせ給はられて、妾が過去を弔ふに一滴の涙を注ぎ給はりなば、殘骸の幸榮こよなきことに候。

あはれおん身よ、いかゞ思ぼし給ふか、かしこ。

（評）詩を讀むやうな思がしました。

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送呈



三等

○花のようなるやさしい姉妹女蝶男蝶はさげ髪に
女蝶は紅きリボン、男蝶は白きリボン
磐城國田村郡高瀬村大字上行合　遠宮まき

四等

○北は黒髪南は白根晴れて見えます富士の山
山所國にあるべき謠
下野國鹽谷郡氏家町傳馬町　手塚妙香

五等

○春がきた〳〵妾の春も一つ悲しい事がある
一つの話、能くきいた
若狹國小濱町白鳥區　田村かね子

秀逸

○花は摘んでもいばらはつまぬ針があるものこわいもの　攝津　森井せい子

○わしが古さと越後の國に藁て靴あむ母ひとり　韓國　細川千里子

○ぬれてひら〳〵舞ふ蝶々を入れてやりたい傘のうち　和歌山　加藤重子

○母は切り下げ私しや廂髪末の妹はおさげがみ　下野　三浦花香

○空が明ければ筑波が見える筑波七度ふりかへる　上毛　大沼素女子

○四國豫州の小富士の峰にや雪の代りに花が咲く　伊豫　福井白百合

○何も知らずに送つたものを先で意味とる花すみれ　三河　天野清子

○試驗だけには行きたいけれど母が病氣で受けられぬ　岡山縣　沼元りん子

○今が春なら何故桃咲かぬ咲かぬはずだよ梅が居る　熊本縣　藤村たくゑ子

○家の留守居を小猫にまかせ老も子供も皆田植　京都市　吉山芳子

○鷄鳴こふが雀が鳴こが起床はせぬぞや日曜日　福岡縣　青葉女

○雪が舞ひます信濃の國は四月になつてもちらほらと　長野縣　唐澤喜惠

○廣い式紙のあの春霞歌が書きたやすら〱と　　大阪　登喜子

○櫻花咲く小川の堤追分歌うて馬子が出た　　土佐　梅の花女

○糸を買ふのか卵を買ふか娘見たさに長話　　信濃　宮澤たれ子

○娘十六誂がきまり雛の祭は此年ぎり　　福岡縣　榊森　操

○雪と云ふもの見たことないが花は年中絶えはせぬ　　臺北　光子

○雲のお宮の月姫さまは錦織らしやる朝虹で　　大阪府　よし子

○虹の七色わかちて着たる姫が歌詠む梅月夜　　相模　露生かめ

○私が半の乳しぼるとき家根から雀が見てゐます　　福岡　建部白露子

○うすぎぬかついて月姫樣が降りて來さうな春のよひ　　大阪府　君子

○月の利鎌で刈られた雲が落ちて咲いたか野のすゝき　　筑前　田中とよ

○雨はもとより横にはふらぬ風にふかれて横にふる　　岩代　小瀧久子

○菜種花咲く朱雀野ゆけば壬生狂言の鉦がなる　　京都　綿引眞砂

○土手の櫻が散る度毎にわたしや泣きます花かげに　　秩父　近藤登久子

○蝶の行く衞を慕ふてゆけば花の在所で日が暮れた　　近江　藤野やす子

○お國戀しいわたしのこゝろ誘ひだすのか鳴る汽笛　　韓國　原　登里子

○井戸の蛙と人樣いへど花も散りこむ月もさす　　藤本鳥羽子

○わしは房州の嶺岡の驪馬は居れども未だのらぬ　　千葉縣　羽山しず子

○障子開けたる隣の娘一寸笑ふて又しめる　　上總　鈴木梅子

○親は畑で働いてるに私しや毎日學校へ　　埼玉縣　中村勝子

○淺間根ごしの雪ふみわけて春が來たぞへ小諸にも　　園子

○咲いた櫻を一輪二輪春の詩集に栞する　　信濃　駒澤みつ女

○櫻花ちる若木の枝の網にゆられて稚兒ねぶる　　伊勢　濱出きみ子

○とかく浮き立つ年頃なるになぜか私は秋が好き　　信濃　胡蝶

○亡母が添寢の寢息と思ふて覺めりや淋しい秋の風　　神戸市　名無し小草

○振の袂の模樣にしたやおぼろ月夜の庭の梅　　新舞鶴　岡田いわ

○佛樣のやうな親ありながら不足々々で日をくらす　　岐阜市　篠田とみ子

○いく度沒書にされよがまゝよつゞくかぎりはやつて見よう　　埼玉　花子

○とつた鈴虫袂へ入れて踊る途中で月が出た　　伊豫　曉子

○櫻散るなら大堰に散れよ京と浪華に香を送る　　八重子

○雲の扉をそと押し開き覗きや輝く星の宮　　仙臺　白菊子

滑稽談

編輯局選



△規定　實際にありし滑稽談もよし、所謂一口噺もよし、摸倣や有りふれた作は採らず、二十一字詰五行以內、半紙又は罫紙に認め一人一章に限る、締切日は每月十五日懸賞は乙種。

二等

○木魚　羽後　柳　子

百合子様は自稱詩人の名高くいつも戀衣やハイネの詩集とかを私共に講義して下さいます、或日例の如く何やらの歌集をよんで居らしつたが、「ね、貴女てゝに『眞晝靜に木魚音なし』つてね之は古寺の景色ですが木魚つての邃見た事がないの、貴女知つてゝ、此處等邊の寺にも木魚つて鳥居るのでせうかね、美しい鳥でせう」と眞面目。

三等

○獨身なの?　山口縣阿武郡佐々並村　深山　鶯

甲女「妾やお嫁になんか一生行かない積りですわ。」
乙女「まアそれぢや一生獨身でお暮らしなさるの!。」
甲女「いゝえ、家へ貰ふのヨ。」

四等

○郵便　沼津町　飛奈　久枝

奥様下女に向ひ「此れを角の郵便函へ入れておいで」と手紙を出す。
下女「ハイ………」と云つて持ちいて歸りて奥様にむかひ。
「奥様郵便函があいて居りませんでしたから郵便函の上へのせてまゐりました」

五等

○一等馬車　飛驒　あやめ

雪子「ヨー花子さん、私一度でいゝから二頭馬車に乗るような身分になつて見たい事よ」
花子「二等馬車なんか、私乗る位なら一等馬車よ」

○エッキス　大阪府　寺部　君子

私の妹は今尋常三年ですいつ覺えたのかイエッスな間違へて私が、「花ちやん明日運動會に行くの」「エッキス」

○敎へて上げたのさ　安房　高梨よしゑ

母『武坊や今日初めて學校へ行つて何習つたの』
武坊「何も習いやしないが……」
母『どうして』
武坊「先生が赤くて美しい魚は何だと尋れたから金魚だと敎へてあげたのさ」

○男の妹　秋　萩

淸ちやん何處かで弟といふ語なきゝかぢつてきました、そして途中でどうまちがへたものか、「母さん男の妹(弟の事)は姉つていふのね」

○禁酒會　仙臺　三浦まつ子

爺「酒はあんまりたけいから酒飮まれい禁酒會つふに入るべいよ」婆「そんぢやおらも煙草の禁酒會に入りますべい」(實は私の御ばあさんが言つたんですの)

○だんべえ　京都　宮原みどり

田舍者ステーションに到り汽車發着時間表を見て、「はアこのつぎの列車は九時四十分か、、、、、、それじや彼是十時發だんべえ、、、、、、。



お勝手　課題

一等　有明月

松山市　勝山みどり

珍しく今日は一番に目がさめたから釜の下でもたきつけましやう、灰が大分たまつて居るやうだからかき出すと、ころりと何やら出た、オヤと思つてよく見ると、おさつの丸焼であつた、又お三が内所をしてるよと、一人笑ひながらたきつけを入て火を移すと、ぱつと盛んにもえ立つ、まきを入ると次第に勢が弱つてしまう、又もやす、まきを入る、又消る、今度こそはと小さく割たのをそつと入れてだん／＼大きいのを加へるとやつとついたやう、ほつといきついて、見上る空はいつしか明け渡つて、煙出を出る煙の末が有明月の方へとうすれて行く。

お勝手も美文になる（賞品勝手道具價格一圓）

二等　後仕末

鹿児島市　露萩子

姉様はお仕出しの役で、私は例も後仕末をします。先づ食事がすみますと筒袖の上から廣い前垂をし、大桶に釜の湯を汲み、飯碗、汁碗、肉皿と順に洗ひ、布巾でからりとふいて次の食事の膳立をし、白い被ひをします。又釜鍋は輕石でごし／＼磨き錆びない樣に灰ですつて大小順に竈に積み上げ、鍋は、徳利棚の下に釣垂げます。それから次のお米を研ぎ流元を全然洗ひ流し板の間をふき、さゝらはたはしと添寢させ桶は棚に伏せ漸くすむのですが一寸四十分許りかゝります。

かひ／＼しき妹の君（賞品同上七十錢）

三等　自由か不自由か

羽前西置賜郡豊川村小白川　杉葉女

山小屋同然な山中の妾の宅、何に彼と不自由だらけ勝手道具でさえ只の一通りもないのであります、先づ朝汁を擂つた擂鉢へは晝飯の用意に、蕪の二株三株も切つて漬けねばならぬし、ゆふべ鯡をあぶつたワタシには今朝餅を燒かねばならぬ、魚を切るにも野菜切るにも庖刀は一挺だけ餅を搗くにも臼や杵を用意する暇がなければ蒸した米を、嚢のまゝ大木の新らしい切口に載せ、足で踏んで踏み潰して拵へます、其他とろゝ汁を拵ふときは山毛欅の木の皮で芋をおろしたり、栗をゆでるにも、茶を煎じるにも燻つた鐵瓶が只一つ。

山家の生活を能く表はしたり（賞品同上五十

錢）

四等

お花の稽古

岐阜市緑町四九二番地　篠田とみ子

お前今お竈の前で何をしてお出てたの？私餘り枝振の良い柴がありましたのでお花のお稽古をして居ましたわ、お花のお稽古も無いもんぢや、火が消えたのも知らずに雜誌を讀んだりそんな事計りしてお出でだからお粥のやうなお萩が出來たりするんだよ、でもねお母さん此間女子文壇讀み作ら炊いた時ねえ、お母さん今日はよう火が通つとるから美味しいと仰有つたぢやありませんか。

奇拔（賞品圖書切符三十錢）

五等

舊式

兵庫縣有馬郡三田屋敷町　渡邊壽賀子

宅のは昔風でおまけに右にかたむいた至つて不恰好なお竈では有升がご飯はうまく煮へます、お隣なんかそれは立派な瓦斯竈なんですが、御飯の事て姑様のお小言のたえた日は有ません、又お隣には新式の料理塲なども有つてお勝手には何不自由はないんですけれど時折戴いたお隣のご馳走と宅のとくらべますと宅の方が味が好い樣に思ひます、してみますとやはり金の澤山か丶らない宅の樣なのが利益では有升まいかむやみに改良だの新式だのとさはがなくつたつて好いじやありませんか私は舊式が好きです。

また一理あり（賞品同上二十錢）

新妻　伊勢河村富子



秀逸

○正午前　紀伊　むらさき

妾は御飯炊き、お母樣はお味噌摺り「今日は」と肴屋が來た、何時も勢の好い事、竈の肩に乘つて居た猫は飛んて行つた、お母樣も行かれた、鑑お汁を拵へるのでせう、戸棚から皿と鉢が出た、俎板が棚から下りる、出刄の音がする、猫が鳴く、流し下は賑やか、やがて鍋が棚から下りた、擂鉢が現れる、水瓶の蓋が開く、……と御飯の焦げる匂がし出した、妾は周章て丶薪を引いた。

○變化　本郷　朝井松子

私實はお勝手ごとは嫌ひも嫌ひ蛇よりも嫌ひなので大繼母樣が心配仕まして無理に割烹のお稽古をさせられましたので、それ火を起しなさい、サこれを洗つて、此の魚を三枚に下しなさい、と叱られ〳〵教へられて始めて料理の趣味を覺えました、て此頃では、おやい丶鷄だことこれてプロセチキンを作りませう、此のお肴はベツクがよかろう、お夕炊してライスカレーやなんて言ひ付けられず共皆自分でするやうに成りました。

○テーブル　長野市　胡蝶

私の内ては、天保式の御祖父樣が、「臺所は大切な所だ、奇麗にしなくてはいけない」つて、いつも〳〵被仰いますから、日當りのい丶所に一

賑々しく取つて御座います。そして眞中に大きなテーブルを置きまして、立つてするやうになつて居ります。ですから、皆樣が御宅は御勝手だけは、ほんとに二十世紀式ですねつて、被仰ひます。

○奉公　福岡縣　青葉女

自宅の竈は皆樣笑ては嫌ですよ一升煮と一升五合煮とが並んで居てそれに小さな薪を燃くのです、それに奉公先のは煉瓦の竈に石炭を燃くので釜は平釜の八升煮ですから初回には大變困りましたよ御飯が出來損じましたので心配でたまりません大枚四錢を投じまして酒を張込ましたら旦那樣が御喰りなつて、よく出來たと御賞めになりましたので妾嬉しいやら、をかしいやら、ほつと息つきました。

○一家十五人　伊豫　福井白百合

いつも午後四時がなるとお米をとぐ、水を汲む、火をたく、御飯が出來るとおかずの仕度、茶も沸いた、日暮方になつて夕食の仕度が濟んだ頃、野から戻るお父さんお母さん姉さん兄さん弟が二人、お風呂が濟むとさあ御飯、子孫合して都合十五人の一家族がらんぷの下で車坐になつて飯盛を取り卷く、妾がお給仕役、それはそれは忙がしい事、御飯、お汁、また御飯、私も目が廻るが杓子も目が廻る程働く、池の樣な大鍋のお汁も三升炊いたご飯も殆ど底を叩く、妾は賄方引受て隨分忙がしいけれ共これが人に誇りたい樣な氣がします。

○二三年前　甲斐　矢壽子

二三年前迄は一寸お勝手へ這入りましても直ぐ手を切つたとか又お茶碗が知れないのお皿が見えないのと申しては阿母樣にしかられましたが、今はもう何も彼も樣子がわかりまして阿母樣に代つて又妹の世話をやく樣に成りました、そして却つて母樣からお茶碗やお皿の置き所を尋ねられる樣に成りました、そして時々は母樣もしお手でもお切り遊ばしてはいけませんからなどゝも申す樣になりました。

○たま　仙臺　原霜蜂女

火をたき附ける計りにして、竈の内へ薪木を入れて置いて、翌る朝、私が燐寸で火を附け樣としましたら、奥の方に猫の玉が暖つたかさうに、眠つて居ましたので、ピックリしました、其れから玉つて呼びましたら、眞面目な樣な顔をして、私の顔を見ましたが、鍋墨だらけの眞黑な顔でしたので、私はおかしくつてたまりませんでした。

○七坪半の臺所　岩代　泉花枝

七坪半の臺所南に三尺幅五尺の大流左に朝夕の響がたく〱と汲めども盡ぬ井水の夏は冷く冬暖く、續て大中小並築の石竈北手の隣には三四の大長爐自在鈎には何時も松風の譜二重戸棚は其西の壁際に其間は鏡のやうな板の間光線が明いから塵一つも判然分る。薪は長三尺五寸の大割木、三間庇の屋根迄ギッシリ外に弓形の梁木が百二十束是が一年間の燃料。家内は僅五人で寂しい位だが年中焚火が熖々と絕えぬのでいつも賑だ。烟たい顔などして居る者は半片もない。

○大釜　福岡縣　細川村雨

私の内は今は三人暮しです、其の内お父樣は外出私は學校、ですから三人揃つて食事するのは少ないのです其の少しゝか入らないお米を大きな三升も四升も入る釜で焚きます、他の御方は人數の少ないのに大きな釜に、と御笑ひになります、するとお父樣は昔多人數暮した名殘だと、お母樣は東京の兄が歸ると嫁をもらつて孫が出來て子守を置くと、又人數が多くなつて此の大釜が小さくなるつて。

○女中の舞踏　麹町　高關けん子

勝手では全て舞踏をして居る樣です、然かも音樂に合はして、其樂器もいろ〱在りますが、其の中で、煮たつ音、ふき出す音、火箸と十能とのかち合ふ音、ジャー〱と水道の音、茶碗を洗ふジャブ〱と言ふ音、茶碗など碎く音、其音樂につれて、手足を動かして舞踏をしてゐるのです。

○兵營　丹後　小谷保子

昨年の冬滿期除隊になつてお歸りになりました兄樣のお話に依りますと兵隊さんのお勝手はそれは〱すばらしいものださうです一度に一斗

も仕掛けた釜が三ッも四ッも並べてあるのですつてそして薪も束てくべまして吹き出すと直ぐおろすのださうです水のまだあるのに？妾ナゼツてきゝましたら「是以上ほつて居たら下の方は黑々だ」と申されました。

○乞食の團欒　韓國　唐なでし子

或る日町外れの土橋を通つて居ると下の方て人聲がするので覗いて見ると八つ位の女の子が袋から御飯や肴やお煮〆なお鍋に入れて居ると母親らしいのが德利の半分に成たのにお汁の樣なものが有るのを入れて石を並べたお竈にかけて炊いて居ますとう／＼出來たと見へて父親と三人が甘さうに話しながら食べて居ましたア丶之も一家團欒と言ふのかしら。

○自炊　名古屋市　吉田なみ子

妾の實家は美濃です、妾は此の名古屋の女學校へ通學するものですから此の地の或る小さな家を借りて居ります、それ故此所はお勝手、彼所は書齋など丶、區別する餘地がありませぬから、只隅の方に、鍋と庖丁と俎板とがあるだけて、ほんの自炊生活に足るのみです。

○置き場所　山口縣　深山鶯

私の家は上り口の右手が竈場て、直ぐ向ふが洗水槽てあります、お臺所の仕事は私の役目てあります、それて私は鍋は何處、杓子は何處、皿は何處と云ふやうに、平常から夫れ／＼置き場所が決めてありますので、俄かにお客樣がありましても少しもまごつくやうな事はありません、これも皆お母さんからの言付てあります。

○地竈　長野縣　小林しん子

一寸せまいけれど三間半に四間南の隅はお味噌桶と漬物桶が雜居し西の隅は戸棚段を下りると直ぐ大きな舊式の地竈がある、一度地竈の下のねずみ穴から馬屋へ火が入て大さわぎをしました、毎朝四時半に妾とお三が起てお三が其竈て飯の火をたく妾はたすきがけて、ふきそうじ、そしておむすびを五ッにぎつて、家内十人て圓座をつくつて御飯をたべるのです。

いぬ　青森縣　松尾たい子



○お釜　長野縣　唐澤喜惠

私の奉公して居るお家のお釜は其昔ある御武家樣に仕へて、羽二重の布巾に包まれて暮らしてをつたが、その內後入の黃金のお釜とやらに追ひ出されて古物店に迷つて居るのをお情深い今の旦那がお買ひになつて最う四十年になるとか、明ても暮れても不格合な地竈の上に座つて下て落葉を焚ふが、砂て面を洗はうが、氣にもかけないてよく毎朝每晩私に勤めまする。

○諺　南葛飾　松操子

お祖母樣が日頃仰せらる丶がおはちの中へおしやもじ二本入れとくと家の內て爭ひ事が出來るつて、おはちの中をゴト／＼音させると家の福が皆外へ出て終ふ夫れに每朝お茶釜をいつ迄もブウ／＼させるとお隣が大盡になるさうです。

○昨年から　千葉　よめな子

昨年から私が勝手の掃除役となりました、坐敷ならば八疊敷の所です、來年の今頃までには角から角まで光らせて臺所へ行けば姿見は不用の樣にするつもりです、先日もお友達が來てお宅のお臺所は能くかたづいてゐる事ねえと言はれた時はひくい鼻も高い樣な感じがいたしました、是れてお料理が出來るならどんなにかうれしいのですが。

▲附言此處に載せたる外に入賞者秀逸及び佳作數十篇は次號の定期增刊て發表いたします

學校生活

○學校の梅檀

上毛　元子

私の出ました小學校には大きな梅檀があります。休み時間鬼ごつこの柱になります。只今は家に居りますから其の上の方が屋根の上に顯れて、なつかしい昔なしのばせます。私は毎日之を見ますと、自分の心が梅檀の花の樣に小さくなります。梅檀は二葉より芳しと云ひますが、この木は少しも香がありませぬ。（入賞圖書切符五十錢）

○妾の教室

京都市一條通千本東へ　武部柳葉女

妾の學校は宅から五町程北の眞裏に當るので北向て男子の方は東南に入り女子は西南に入るのです妾の教室は二階で隨分見晴しのよい室です西北には愛宕山が高く見え眞北には船岡山とて小岳なれど春になると梅や櫻が咲いてにぎやかです東北には比叡山が高くそびえ西北の愛宕山とせいのびの仕合なして居る樣です南は一面の市中です冬になると西北の隅比叡山の少し北の山と山の間に近江八景の一の比良の積雪が首を出して居ます。（同上）

○服裝

和歌山高等女學校　秋村清子

私等の學校の服裝は、木綿ときまつてあつて、袖丈けが一尺五寸、式日の禮服には黑木綿の三ツ紋付、お袴は濃海老茶で、裾から三寸五分の所に二筋の白線がありますの、このやうに質素であつて、ちやんときまつてありますので、式日などにもほんとに世話がいりません、そしてそろつてあるので大層きれいてす。運動會の時など全生徒四百餘名、若草もゆる廣い〱運動場に萬國の國旗は高く空にヒラ〱と飜つて、白いた黑紋付に筋のついたお袴のおそろいて、すきを十字にかけて、そよ〱と吹く春風に袴の裾をひるがへして、たのしく遊戯をいたします。（同上三十錢）

○花

神奈川縣　長島まつ

私が今御やつかいになつて居る先生は　それはそれは活潑な御親切な本當に善い先生てすそれて此のお方は花が大好きてすから私は花筒を弟に遣らせて一週間に一度づゝきれいな〱花をさして置きます今はかはいらしいスイセンが品よくさゝれてあります先生は教室へ入つていらつしやる毎に嬉しそうな其涼しい御目をおそゝぎになります。

○藁屋根の學校

越後　河島一少女

三面川村の中央、昔の面影をのこせる城趾の南、こんもりとした森の陰に古びた萱家根の家が見える、これは妾が七つの時から十五歳の今日まて、通つて居る實に懷しい妾の學校であります。妾の學校には、先生は四人で男女合せて百六十人の生徒が居ます、生墻て圍んだ運動場の隅には、種苗圃と草花圃とがあつて、唱歌の時間などには、小鳥が飛んで來て愛らしい聲て鳴いて居る事があります、北の窓を開くと、とこしへにつきぬ三面川の流を隔てゝ臥牛山の氣高い姿が見えます、妾は毎日この樂しい學校に通つて、一日も早くよき良妻賢母とならうと愉快に課業を受けてゐます。

▲注意●　學校生活の投稿は澤山參るやうになりました、載せ得なかつた分は皆次號の増刊に載せます、それから此投稿は成るべく學校全體の記事よりも特色ある事とかんじた、とゝか、面白い事とか一部のことでも興味のある記事をねがひます。（選者）

女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

凡そ藥は其用法の當を得ると得ざるとに依り其作用を異にするものにして仝一藥にありても其用ひ方宜しきを得れば卓効を奏するも一朝用ゆる時期を失し又は其分量を過まる如き等は單に効を奏せざる而已ならず非常なる害を及ぼす事ありされば凡て藥用は設令普通藥たりと雖內服外用に係はらず醫師監督の許にあらざれば決して用ゆ可からざるものたる事を辨へ居らざる可からず故に此欄には絕對的藥液療法は説示せざるに依り讀者は其御考へにて質問せられん事を希望します

○白帶下　私は七八才の時分から常に子宮から白い下り物があつて今に止みませんが如何したらいゝてしやうか此儘にしてゐても差支へ無いてしやうか(十九才つな子)

「答」小供の時からの白帶下は多く膣壁粘膜が糜爛れた爲めに來るものなれど餘り永き故或は子宮に故障あるやも計られず何れにしても捨て置くは宜しからず先づ素人手當として毎日一回宛就床前に局部を食鹽水にて洗はる可し消毒したる「イルリガートル」(イルリガートルは醫療器械店にて求められよ)に三合程の沸騰水を入れ之に一匙の食鹽を溶解させ微溫になるを待ち此器を三尺位の高き所に懸け置き「イルリガートル」の嘴管を一寸位膣內に入るれば自然液は膣內を洗滌する樣になるのです但し此「イルリガートル」は使用後塵埃の附かざる所に藏ひ置き用に望むで每回熱湯を通し消毒すべし然らざれば恐るべき黴菌膣及び子宮內に浸入し危險を醸す事あればなり右の如くして二ヶ月も持續すれども更に効なき時は婦人科醫の治療を受けらるべし。

○月經停滯　昨年十一月より四ヶ月の今に至るまで月經なく此分にて七八ヶ月滯ると別に身體に異狀なきや(靜岡縣松音)

「答」廿才前の女子にて非常に神經を勞する事例令學生なれば試驗前等の如き場合には四五ヶ月は經閉する事往々あるものにて之等は原因を去れば直ぐ月經來潮するものなれば餘り心配するにも及ばざるも右の原因なく七八ヶ月も滯るは子宮に故障あるか若くは他の身體の部分に病氣あるものと見做し醫師に診察を受けらる可し。

○月經不潮　私は本年十八才になりましたが未だ月經がありませんが別に差支へはありますまいか又月經のあり初めには何か前兆がありましやうか(無名女)

「答」月經の初めて來る年齡の平均數は日本人に於ては十四才と稱し居るも體質に依り或は生活の狀况に關して遲速あるものでありまして廿才位にて初めて月經の來潮する人も往々あるものなれば別段心配なさるにも及ぶまいと考へます初經の前兆としては多く頭痛がしたり腰痛があつたり胃部に苦悶があつたりするものなれども中には何の前兆もなく初まる人もあります。

○經血多量　如何なる故にや月經多く六七日も之あり甚だ困ります三四日位にて止る工夫は之なきやお敎へを乞ふ(多經女)

「答」此質問は餘り簡單にして年齡もわからず又未婚婦なるや既婚婦なるやも分からず且つ單に經血多きに止まるや又月經時に於て甚だしき腹痛にてもあるや判斷に苦しみます然し未婚婦にて單に經血多き而已なれば別段病的にあらず強て此量を少からしむるは宜しからず攝生法としては月經時には成る可く安靜にして居る事が肝心です。

○逆上性　性來逆上性にて寒暑の別なく

顔紅く困ります療法お敎へ下さい(無名氏)

『答』多血質と察せられます故に便通を能く整へ朝早く起き戸外の運動をなし成るべく精神を安靜に保ち食物の分量を減じ時間を規則正しくし毎朝全身の冷水摩擦を試みられたし。

○齲齒　私どもの學校には齲齒が多く御座いますが齲齒に罹らぬやうにするには如何すれば宜しいでしやうか又齲齒が臼齒に多いのは何故ですか(長野縣、高山)

『答』齲齒は元と食物の殘渣が齒に附着しなり、此が永く口内に止まる時は、一つの化學變化を起すものにして、此變化によりて生じたる産物は齒牙の爲めには毒物にして、漸次齒質を摩滅さするものであります、故に齲齒の豫防法としては、口内を充分淸潔に保つ事が必要です、即ち毎朝齒を磨くの外三食の後は必ず含嗽をなし又就床前には毎夜揚子を使ふ事を怠つてはなりません、臼齒は凹凸不平のものでありますす故自然食物の殘渣が附着し易く隨て侵され易いのであります。

○近視眼　二三年前より近眼になりまして不自由致して居ります何とか療法はありますまいか又賣藥を用ひても幾らか効力がありましやうか(眼鏡生)

『答』近眼は如何なる妙藥にても一旦起りしものは全治さす事は困難ですが、其度を進ませぬ方法を取らなければなりません、勿論近視眼にも三種の種類がありまして一を進行性と云ひ二を停止進行性と云ひ、三を停止性と云ひまして、各稱の如く第一及び第二の者は如何に豫防するも漸次進むものでありますけれども攝生が宜敷ければ進み方が少なくて濟みます、第三の者は攝生により停止さする事が出來ます、其法は頭部に充血する原因を一切避くるを必要とします、例令ば書見する時は斜面を用ひ必ず一尺を隔て置き、又裁縫をする時は机の如き高き裁縫臺を用ゆる樣になし、凡てうつむく事のなき樣に注意し、感情に激する事を避け、便通は必ず毎日一回促し、書見其他の作業の際光線は充分なる位置を取るべし、最も必要なるは眼鏡の撰擇法にして此眼鏡を亂用したるため其度を增したる、例は往々認むる處なれば、專門醫に托し、適宜に眼鏡の度を定め、求むる事が肝要であります、決して賣藥等に御迷ひなき樣御注意いたします。

○耳が遠く顏が紅る　昨年來耳が遠くなりました月經も少なくなりましたそれが爲めでしやうか、又立つて居りますと顏が紅くなるので恥かしくて困ります何うぞ療法をお敎へ下さい(立山女)

『答』月經の減ぜし爲めに、耳の遠くなる事はありますが、容體書簡に失し、其原因を察する事能はず、先づ耳鼻咽喉科の醫師に診察を受け、右科の何れにも故障なければ、婦人科醫の診察を受けらるゝ事が必要です、顏の赤くなるのも、耳の遠くなりしのと、全じ原因と思はれます、依りて其原因を確めた上治療法を講ぜねばなりません。

○多毛性　妾は顏面に長き毛が生じて困ります拔きとりて再生せぬ法はありませんか(隱前、多毛女)

『答』一度や二度拔き取りし而已にては、又全じ樣に生へるものなれば、生へれば拔き、生へれば拔き、五六回も拔き取り斯くして當分、石灰水(石灰三合位を一升の水に攪拌し一晝夜を經たる上水)にて顏をお洗ひになれば、大抵再生する事はありません。

●●●●●新刊紹介

▲『新派短歌評釋』　著者窪田うつぼ氏は新派歌壇に潜勢力を有する人で殊に近頃は短歌の評釋の上手なことが評判になつてゐる、古來詩歌の評釋と云ふと語法とか語格とかの解剖に重きを置いたものだが、窪田氏のは然うでない、一首を讀んだ時の感情とか、興味とかを傳へやうとしてゐるから、斯う云ふ評釋が又一種の散文詩のやうで面白い、斯う云ふ評釋こそ讀んで歌を作る者が興味を養ふに何よりも好い滋養物になる、附錄には新しい意味の短歌作法が說いてある、四六形の製本、淡泊で嫌味がない(定價四十五錢　神田駿河臺鈴木町　玄黃社發兌)



讀友倶樂部

嗚呼余の志の堅き貧富を以て侵すべからず雨露濕て眷服を刮し西風來つて秋砧を偕ふす樂み只二親の在すに有り

井上通女

紹介欄

紹介は個人の事に限る廣告的紹介は一切斷る

(一)小學校は卒業しました、此上出來る事なら學問がしたい、小間使でも、女書生にでもなつて夜學にでも通ひたい、(兵庫、薫賀子)

(二)茨城縣專科敎員の免許狀を有する者、嘗て上京中洋服科其他の技藝を修めたり、東京に於て職業を求む(茨城縣、望月)

(三)大阪府内に製糖會社ありや、其有無だけを本欄に答へられたし(靜岡縣御願女)

(四)東京若くば東京附近の良家へ小間使か女書生に申込みたし、女學校卒業者にして家計も相當なり(下野、莃子)

本欄掛曰く、本欄に關する問合せ其他の用事は凡て往復ハガキか返信用切手封入てなければ答へず、又(一)(二)の番號を書添えて問はれたし、姓名在社の者は答ふ、又記者に紹介を賴まるゝ向あれど紙上に出す外、直接紹介の儀は斷り申す

文學顧問

問　記者樣御手數乍ら次の熟字講釋をして下さいませ。。
瑯玕の扉開きて我夢の浮橋渡る幾乙女ども
佐保姫の花の瓔珞緒をたえて眞玉散るなり白藤の雨。(大坂とき)

答　瑯玕(らうかん)は寶石の名、五色ある美しいものださうです、瓔珞(やうらく)は佛樣の首などに掛けてゐる飾りもので、玉か何かで繫ぎ合せ、ひらくと垂れて居る美くしいものです。

問　記者樣にお願ひ申ます何卒左の意味を御敎示下さい
一、おぞまし、一、ひたぶれ、一、うば玉、
尙ほ此種の言葉を廣く覺へたいと思ひますが何かいゝ御本がないでせうか(北海道幸子)

答　「おぞまし」は遲鈍とふ云ふ意味、にぶいとか、うといとか云ふ意味、「ひたぶれ」と云ふ語は聞いたことがありませんが、「ひたふるの間違ひてはありませんか、「ひたふる」なら「ひたすら」と同じ事て、專らとか、一向とか云ふ意味、「うば玉」は「ぬばたま」に同じく、暗の枕言葉ですか、「うば玉」と云つて單に暗黑の事にも用ゐるやうです、斯ふ云ふやうな語を覺えるには『言海』とか『ことはの泉』とか矢張り日本語の辭書が一番好いでせう。

問　記者樣先月號の本誌佐々木先生の御歌にあらゝぎの花と云ふ語が有りましたれあらら木の花つてどんな花で御座いますか御伺ひ致します(瀬識女)

答　あらゝぎの花は蘭の花です、深山に生ず、花は淡紫色で六瓣、根は水仙の如く球根です。

問　記者樣岡田八千代樣の御住ゐは何處で御座い升か何卒御知らせ願升(名古屋、ちやう)

答　麻布區新堀町八番地てす

問　記者さん一寸うかゞひます、(一)先日或る雜誌で『巷の夕』と云ふ題の新體詩を見ましたが此の『巷』と云ふ事は如何なる事てしようか、(二)文典の本を一冊求め樣と思ひますが最もわかり易くして又最もくはしき本は何と言ふ本で誰の著だか定價と發行所を願ひます、(若葉女史)

答　巷は市街てす、町の事てす。岡田正美氏の『日本文典』上下二冊博文館發兌定價四十錢宛。

問　記者樣一寸御伺ひいたします英語の字引書は何といふ本が一番よいでせうかどうぞ御敎へ下さいまし(野の花)

答　神田裏神保町三省堂發行のものが好いやうです、大小幾種類もあるやうですから直接聞いて御らんなさい。

諸孃と記者

○本誌の懸賞の圖書切符と云ふのは何んの効があるのですか、此切符で女子文壇又は貴社御發賣の書籍を購讀する事が出來るのですかお尋ね申ます、(北海道、遲櫻女)(記者曰、左樣です、圖書切符は本社と文光堂及び博文館出版のものなら何でも購求出來ます、別におたづれの行數の事ですが何うも嚴重に參りかれますが皆樣がたの御注意もあり、又皆樣も改めて過ぎな

いやうにして下さい）○記者樣都の地は如何で御座いますか玉島は此三月になりましてから雪が度々降りましたけれ共積むと云ふ樣な事はありません尙又當時流行しつゝ有る天然痘何處までも同じで有りませうと考へます幸に御用心遊されます樣（備中玉島町坪井小美榮）（記者曰、天然痘は終りましたけれど、雪は春になつても降つてゐます）○記者樣、御存知で入らつしやいましやうが、私の土地は有名な、川越芋の產地です、何卒おひまの節は是非お出下さい、澤さん御馳走致し升、さて記者樣、私本誌へ投書致しますのはこれが始めてです、何卒、宜しくお願ひ申升（埼玉縣川越町仙子）（記者曰、女の記者でも居るとお芋の產地なら何を措いても出かける處でせう）○記者のおち樣姿も昨年七月から愛讀者名簿の一隅に留いて戴きました、御蔭樣で無學文盲な身が少しは文學のプの字位分る樣に成りまして厚く御禮申上ます、（撫子）（記者曰、段々分つて參りませう、勉めて御らんなさい）○近頃論文の中に種々の評をお出しになりますが私も同感で御座います實際亂暴な猛をかく方が大分御座います何うかこれから批評欄と云ふやうな所を設けて頂き度いのです つまらない小說の交換よりは余程爲になると存じます（大阪、小百合女）（記者曰、皆さまも本誌の批評は遠慮なくして下さい）○茨城縣、花田美枝、美代。常陸、かつら子。和歌山、木下はる子。芳子。しきしま女。若松、靜枝。投稿狂。境野もと子。大和、畠中文子。以上の諸孃の御申越一々答はいたしませんがお尋れの事はよろしい、それからいろ／＼御あいさつは有り難く存じます（記者）

圖書換讀

○糸左近著（生理衞生講話）（國語漢文中辭林）（作文教授書）外に女子文壇貳十餘册有りますが（作文作歌辭典）（詠歌辭典）（作歌自在）等と何れにても御交換下さいませんか男女何方でも宜しい（若狹國小濱町香取區山田鐵葉）○私は古錦繪が大好で歌麿北齋を始め豐國、廣重國周等種々所持して居ります猶面白き繪等もあります同好の方は左の不用物品と交換してくれませんか言海小說破戒又は風琴寫眞機械等相當價格のものと交換を乞ふ委しきとは御照會あれ（千葉縣安房郡舘山町新井宮本清子）○皆樣の中に「天うつ浪」か或は「故事熟語辭典（寶文館）が御不用でしたら御惠み下さい、御禮の印迄に讀書作文辭典を差上ます（伊勢鈴鹿郡照町大字新所大原傳七方しづ子）○皆さん私はさびしき田舍に住んで居るものです、何卒か御讀み古しの小說、又は雜誌など御惠み下さい、必度御禮はいたします（岡山縣久米郡龍川村大字下二ヶ佐賀せきよ）○皆さんの中に不如歸、己が罪、獨歩集、自然と人生、新體詩集學、女性觀、思出の記、母の面影等お持の方は妾の裁縫と編物、女禮と裁法、宇宙と人生、言海、多情多恨、露子夫人伯爵夫人等と交換して下さい（茨城縣新治郡東村西根殿山丸兵方中村清子）○只今私手許に女學講義錄第一より第四迄あります 尙外に女子文壇新小說其外不用の本があります皆樣の内でリホン製のしなり寫眞掛などで申下さい 着次第に送ります（滋賀縣栗太郡上田上村大字桐生山本初子）○私の手許に文藝倶樂部數册、婦人世界二册、婦人とこども數册、其他歌、歌王、南北、手紙雜誌、聖書之研究、及書籍としては職分論（中）、兆民先生、貧民窟など不要になつてますから、皆樣の許に明治一萬句集、一葉全集、平家物語（其他文學全書ならば何でもよろし）など及諸雜誌御不用に御座いますれば御とりかへ下さいませ、（紀伊國田邊町江川町水道端室井美那子）○誌友の皆樣へ申上ます妾方に殘花集、月の桂、新文林など不用になつて居ますから可成よい繪葉書で申込の方へ差上ます又繪葉書の交換を（京都六角通河原町西入英ゆき）○誌友の諸姉樣の內に婦人世界第二卷第二號及び本誌第四年一號二號の內どれでも御不用なのがあれは御讓り下さい お禮としては三宅先生筆水彩美數葉書一組づゝ差上ます（德島縣麻植郡上浦村上野浦花子）○皆樣私の所には文藝倶樂部新小說雪叢の佳人少女界其の外色々面白い雜誌が澤山御座います又た珍らしい編物も御座いますから人の兄の後篇乳姉妹など御持のお方は何とぞ交換して頂戴な一寸下名まで御端書て御知らせ下さい（栃木縣芳賀郡水橋村西水沼六二、千葉夏子）○懷かしい誌友の皆樣よ妾音樂や御本大好きですのよ皆樣の內にハモニーカ、バイオリンお持ち遊ばしましたならお送り遊ばして頂戴な、どんなに古るくても宜しいのよお禮はキツト／＼致しますそれに滑稽界、ムラサキ、畠族畫報、女學世界、婦人世界、女子文壇お持ちのお方はお送り遊ばしてよなほ三錢切手、二錢切手お送り下さいました方にもお禮として妾手

製の絹シホリ、寫眞掛、寶突をお送り致します妾男子の方にてもいとひませんわ（茨城縣眞壁郡關本町上中宮村花子）○皆様、私の家に女學世界、小女界、などありますからそれ相當のもの御送り下さつた方に、先着二十名まで御送りいたします。（大阪市南區内安堂寺町三丁目三番邸渡邊みれ）○皆さんの内て、孝女白菊の歌、女夫波の小說前篇後篇、お持ちの方はありませぬか、おもちの方は、私の、家政學、女子書翰文、心學叢書、其の外色々、不用になつてゐますから、おのぞみ次第に、お取りかへ下さる事は出來ませぬか、（長崎縣南高來郡安中村、甲千五十五番地春山よし子）○妾の手許に旅裝、不如歸、ホトトギスの歌、文藝倶樂部、新小說、婦人世界、食道樂（全）、新日本、人外魔境、朧月（全）、戀と戀、源氏物語、花鳥集、女判任官、玉蟲、朝晴、英和辭典、言海、明治才媛文集、花もみぢ、三體千字文（村田）、美文作法、其の他種々澤山不用になつて居ますのよ若し皆樣の中て觀音岩、嫁ヶ淵、篩子、濱子、夏子、麗子夫人、天打つ波等一册ても御不用になつて居ますれば妾のと交換して下さい（福岡縣糸島郡怡土村井原浦志平太郎方芳子）○濡鷺、愁人、病間錄、魔風戀風、男波女波、若き日、藤村詩集、新體詩獨習書（山田美妙）月影（伊藤銀月）、こぼれ月（戸張竹風、竹田櫻桃）其面影、白羊宮、花守、二十八宿、花守日記、紅塵、濱子等不用につき、新しきものと、交換いたしたし。濱子、美文集黃菊白菊、金帆（尾上柴舟）、風月萬象（兒玉花外等）田山花袋のフトン揭載の新小說と交換いたしたし。又新しき文藝倶樂部なれば交換いたすべく候。（高松市西通町三九九旬取信子）○下記の不用書があります、草迷宮、式部小路、新綠前編、綠葉集、闇の闇、琴の音、獨步集、（岩代須賀川服部貞子）○第二懸賞文集御不用の方て、贈て下さる御親切なお方はございませんか、必ず相當のお禮を申上げます。新小說、ハガキ文學、女學世界など讀み古しの雜誌數十册不用になつて居ります。郵稅丈け御自辨下さいますなら何册でもある限り進上いたします。東西家庭箏情、朝ばれ、お伽共進會、玉むし、女子文壇、など外のものと御交換いたしたうございます。（岩代國野澤町泉はなえ）○私は「ハガキ文學」「新小說」「女學世界」「秀才文壇」「女子文壇」其他の雜誌澤山及び小野先生「習字手本」「女子手紙のしをり」洋食のけいこ」「實用日本料理」等不用てすが「鉛筆畫法」「スケッチ叢策」「有明集」與謝野女史の諸和歌集「吾輩は猫てある」「新年號女子文壇」等と御交換下さいませんか（播磨明石大藏谷佐久間みか子）○私の持つて居る小說秋聲著「わかき人」水蔭著「漁車の大賊」の二册が不用になつて居ますから、皆樣の中て何か面白い詩集をお持の方は交換して下さい、御希望の方は下名まて（德島縣勝浦郡小松島町字中田村西中村勝子）○諸孃樣私は魔風戀風、夏子濱子、金色夜叉等澤山持つて居りますが露子夫人、富子夫人、ハイカラ令孃等御不用の方は御交換下さい又琹繪葉書の御交換も御願申します（伊豫國岩城村月浦光枝）○私は本年三月から愛讀者になりましたので三月以前の本誌は存じませんのです友愛の情に富ます御姉様よ三月以前の本誌御不用の御方御ざりますれば私の文章世界中學世界と御交換を願います又玉章繪葉書の交換も願います（紀伊國北牟婁郡相賀村大川とせ方栞）○食道樂の春夏秋冬合本御不用の方は私のせり籠、チルズチルス、自然と人生、天地有情、春夏秋冬各四册、合せて八册とお交換いたします、それから懸賞文集第一を下した方には明星と吳のしおりにて全第二を下した方へは女學世界增刊社會百生活と水彩畫の栞にてお返しゝます。お望みのお方は豫め御しらせ下さいませ（松山市西堀端文明堂内にて曉子）○皆様の中て肉彈御持の方は私の玉蟲と女子文壇何册かとそれから讚美歌（定價六十錢）とか御持ちの方は朝ばれと女子文壇何册かと御交換下さいまし但し女子文壇は第一卷十號から今月まてのがございますそして何れもそつくりして汚れて居りませんよ御望みのお方は誌上で御住所御知らせ下さい私の方からお伺ひ致します（野の花）○皆さん御返事はキット致しますから面白い雜誌や小說美文玉むし等御不用の方は一部惠んで下さい（茨城縣新治郡東村西根丸兵中村香子）○皆樣の內に、新詩辭典、藤村詩集、言海、等いづれか御持ちの方は妾の、有明集、と御交換下さるか、又は相當の代價て、おゆづり下さいませんか、尚文學的圖書の交換をのぞみます、（羽前東置賜郡屋代村相森高橋きく子）○妾の許に戀學生、歌枕、戀女房、化粧くらべ、忘れがたみ、玉手箱、食道樂、戀と戀、ハイカラ令孃、百合子、夏子、愛の神、眞人の自白、夫さだめ、男と女、男女の研究、遺花の栞、微笑、濱子、新美人法、文法指南、好男子、ひとりれ、花、玉のこし、實驗記憶法等外數種あり

交換を願ます御望の方は（靜岡縣小笠郡掛川ステーション通り内田晨方杉山富佐子宛）○皆さんの内で金色夜叉御持ちの方は私に暫らくお貸し下さいな（丹後舞鶴局下字十倉小谷愛月）○妾の手許に枕草紙、徒然草、神皇正統記、小說では不如歸、己が罪上、想思[illegible]、こぶし、夏子、縑子、等有りますから御望の方は繪葉書或は御玉章で御申込下さい直に送ります（北海道空知郡上富良野村湯淺すみれ）○皆樣のお手許に「金色夜叉の歌」「歸雁の聲」三十八年の中學世界增刊「明治戰記」「辭林」（金澤文學士）「男女と天才」「黑風」土佐日記」「つれづれ草」「方丈記」御座いますならば私の「伯爵夫人」「はつ姿」「言海」「春色二本柳」「心の波」「婦人成功立志訓」「日露戰史」（雜誌ではありません）不用ですから何れとてもお交換を願ひます（山口縣豐浦郡田耕町藤田伸一方松林とも子）○皆樣不用書が御有の方御送り下さいれ御返禮はきつと致します、（長野縣小縣郡武石村五百拾六番地池内とし子）○皆樣のうちで天打波、伯爵夫人、血の涙、無花果、濱子、煩悶、戀衣、小れこ、縑子、魔無情、等御持の方は妾の新夫婦、乙女の操、己が罪、日本女禮式、夏子、魔風戀風、多情多恨、萩の下露、金色夜叉、母の心等御交換下さい五名樣には秋田縣名所繪葉書一組外國製繪葉書一枚添へて差上ます（秋田縣河邊郡新屋町字南新町九大町八重子）

寫眞編物交換

○珍らしい編物がありましたら送つて頂戴な御禮きつと致します（三重縣伊勢國鈴鹿郡關町大字新所大佐古とく子）○誌友の諸姉樣よ私に寫眞掛惠て下さい屹度相當な御禮致します上等先着參名へは秋田蕗搯て御禮致します又た繪はがきの交替も（秋田縣大舘町木村吉五郎方芳美子）○誌友の皆樣寫眞、ひじつき、しなり、りぼんの御交換を願ひます寫眞御惠みの方には不束な私の寫眞にしなりをそへて必ず御禮致しますの（神奈川縣中郡東秦野村東田原下宿山田つま子）○皆樣寫眞を澤山有りがとう今迄に十三枚お送り下さいました紀念として十六枚に致し度御座いますから姉樣早くお送り下さいまし新小說一冊宛へ玉章添へて上げてよ妾屹度僞は言ひませんの（遠江小笠倉眞村柳澤戸塚しげ）○皆樣どうぞ不束な妾に造花、編物、繪葉書、小切等お送り下さいまし、送つて下すつた方には相當の御禮は必ず致します。（常陸國筑波郡北條内町鈴木花子）○誌友の諸孃樣ひじつき、寫眞掛等交換を願います お禮は必ずそれ以上のもので致します尙はお望みで上等繪葉書書籍寫眞をお送り致します（靜岡縣庵原郡江尻町篠波淺次郎方小久江淡窓）○貴女の中に自分の寫眞御不要ならば私の日本三景の一天の橋立の景にスタンプ押捺した繪葉書を上げます故御送付下され度候（京都府中郡五十河村字久住吉岡かく子）○何卒寫眞を送つて頂戴な私のひじつきか又寫眞はさみを御送り申します（飛驒國高山町字西町三村正吉方三村紫錦）○妾に絹寫眞掛刺繡せし絹ハンカチ肱突栞等御送りの方へ吳繪葉書スタンプ付吳の枝折軍艦安藝伊吹進水紀念繪葉書を送ります其内最上等の分へ新曲浦島か女の一心上下か銀山王かを添へて神に誓つて差上ます（吳市二川町西本通二丁目一〇二碓井松枝）○私は編物が大好きです諸姉樣何卒お手製のむづかしそうな栞りを御送り下さい御禮は相當の物を差上升但し私は高等小學生ですから其おつもりて（神奈川縣長島まつ）○皆樣の中で御手製の編物や何か御細工物を御送り下さいませんか妾は手許に女子文壇が澤山御座いますから繪葉書を添へて早速御禮致します（京都市上京區南禪寺町廿一番戸田中留吉方野ぎく）

諸孃の交際

○私は東京の諸孃と千葉縣の諸姉樣とに和歌俳句の交換を願ひます御返事はすぐ（千葉縣海上郡旭町千本松花月女）○皆々樣余程春めきましたれ何卒御玉章の交換をねがいます屹度御返事差出します（岡山縣淺口郡西大島村字鳥の江信定文子）○親愛なる未見の友よ妾は下記の片田舍に住む者てすが御玉章の交換讃書の換讃を願ます（攝津川邊郡尼崎町二三一六小谷荏子）○いと懷しき愛讀の諸孃よ願はくば繪葉書を交換して下さい殊に御肉筆のを願ひます送つて下されば邪馬溪の繪葉書をさし上げます（豐前中津殿町服部芳子）○諸姉さん等よ繪葉書か葉書に俳句か和歌を認めお送り下さい佳作には微賞をさしあげます（愛知縣知多郡成岩町北村小出方紅葉會）○記者樣始めてお目にかゝります私はまだ十五歲の少女ですが何分よろしくお願ひ致します（山城國伏見町京町廣江正枝）○誌友の姉上樣よ妾は今年十四の少女です只今は地方

の高等小學校に通學致し居るのよ何卒姉と思召しエハガキの交換をおねがい致します又未使用のをお送り下さいましたら不出來の手製のアミモノで御返事は必ず〱致しますよ（石狩國雨龍郡北龍村字和十一番地吉植紅枝）○私の手もとに明治四十年十一月施行の陸軍特別大演習紀念繪はがき百枚ばかりございますが、皆様の中で枝折寫眞掛のようなもの或は名所繪はがきを枚て下された方には、善いようなのを撰んで六枚づゝ差上ます（茨城縣眞壁郡上妻村掾田千代吉方君子）○妾しは此間から重き病ひに惱て居りましたがお情深い皆様から日日送つて頂いた美しい繪葉書何ぼふか慰藉の友となつたでしよだが皆様のお蔭にて今日此頃御飯も甘くなりました何卒此後には誠の心もて御交際して下さい（熊本縣天草郡本渡町池邊しづ子）○出羽の山奥に住んで居る少女ですが今年迎へて十七歲なの……此の後御交際、御教導を希ひ上げます（羽前念珠關村大字鍋倉にて旅河百合子）○畫端書の交換願升前後に拘らず未使用の上等端書送つて下さつた方には私手製の白顔化粧品を進呈致します（房州館山町新井宮本淸香）○誌友の皆様よ御交際を願ひます一時的の御方はかたく御斷申ます繪葉書の御交換も又自筆なれば尙宜しくつてよ屹度御返致しますよ必す〱（東京市京橋區京橋水谷町六番地高橋總太郎方野澤光子）○今妾の手許に九十九里で有名な地曳漁の繪葉書が澤山あるのよ、美人繪葉書其の他何でも送つて下さつた方に差上げます（上總國四天木局南今泉內山雅子）○妾は廣く諸姉様から御自作の和歌俳句などを集めたいのですから御なさけある御方は普通葉書で結構です故一首なり一句なり書いて送つて頂戴妾もキット返へしますそして御禮に雜誌を差上ます（三重縣飯南郡射和村字射和川原操子）○皆さん仲良く交つて下さい私は十五才（肥後玉名郡荒尾村弘さかえ）○記者先生私は誌友倶樂部の諸姉上様と御交際が御ねがい致したう御座います昨年五月迄は三重縣の女學校に居ましたが只今は京都に只一人住居いたし學問にいそしみをる田舍者ですが宜しく諸孃に繪端書寫眞御玉章の御交換を御願い下さいまし（京都市東三本木丸太町上ル上町片桐床子樣方都々神佳子）○何うか皆さんの御手引を願ます孤りで淋しう御座いますから玉章繪端書の御交換を御願いたします（兵庫縣川辺郡尼崎町艀船橋北へ突衝り生嶋方中村綾子）○妾も誌友となりました上からは皆様繪葉書なり玉章とも御交換を願います。又妾は面白い小說を四五册持て居ますから皆様の寫眞をお送り下さい御禮として上げますから（熊本縣鹿本郡中富村富丸貞子）○妾はひどい山奥に住むものですが玉章や寫眞の交換を願ひます（千葉縣安房郡佐久間村高梨よしゑ）○妾は能州の片田舍に淋しく住する者で御座います何卒繪葉書玉章の交換をねがひます（石川縣鳳至郡七浦紫月茶木ゆう）○スタンプの紀念繪葉書や寫眞も澤山持つて居ますから何卒御交換を願ひます。又玉章の交換もどうぞ（金澤市野田寺町四丁目茄子野利吉方高村安江）○記者様誠に恐入り候が皆様とも御交り致し度候まゝ御紹介下され度願ひ上候（山口縣山口町大字後河原酒向敏子）○繪はがき、寫眞、諸雜誌、和歌、俳句、短文、日記文、等御交換を願ます（茨城縣鹿島郡高松村大字木滝須口鹿子）○梅花馥郁たる帝都に在す記者様を始め十萬の讀友諸孃よ御變りはありませんか久しく御無沙汰致して居りますが御芳書下さつた諸孃には厚く御禮申上ます（台北城內南門街高等官舍映香湖）○諸姉様私は本年十四歲になりましたのでどうぞ私を可愛そうと思召し下さいましたら永久に妹として可愛がつて頂戴よゑはがき寫眞のかへ事も願います（三重縣三重郡小山田村大字山田矢田靜子）○人は友ありてこそ誠の樂しみありと、あはれ妾は孤獨の身、永久に姉妹の契結び給はりて慰め給はる君と交りを願ひ侍る（大坂川口本田三番丁加藤學子）○誌上の姉上様よ私は女學校の二年生です皆様よ繪葉書や寫眞又はあみ物などの御交換を願ひます（羽後國平鹿郡横手柳町三ッ梨謙一郎方田口むれ子）○親愛なる君よ妾は今年十七よて十六以上の方とお交りしたいの何卒よろしく又編物の雛がた御持ちの方は御めぐみ下さいませんか先着五名の方には乙女の生涯十六夜日記講しやくをさしあげます又あとの方々へは三月の（今年）女學世界婦人世界少女世界及び拙筆の繪はがきをさしあげます尙不如婦の歌御存じの方は御教へください私も「あはれ君」「露營の夢」「六つの花」等を敎へてさしあげます（東京神田區東紺屋町四一小村方杉山常子）○親愛なる誌友の諸孃様よ妾の如き者にも御交際下さいまして誠に有りがたう御座います尙御交際を願ひます（岩手縣稗貫郡花卷川口町梅本幸子）○お情ある諸姉上様何卒々々玉章やエハガキの交換を願ひます（宮城縣伊具郡丸森町小野常子）○妾も以後

諸姉様と御交際な御願致度う御座います御多忙中恐れ入り申ますが何卒御引き合せ下さいませ（岩代國若松市榮町西分稲生さく）○私は今沒原女學校に通學して居ますが今私の手に栖神社の繪葉書が澤山ありますから先着の方には廿人まで差上ます又私の寫眞が三組ありますから御希望のある方繪葉書でも送つて頂戴な（千葉縣長生郡本納町本納古山正一方豐田千代子）○繪葉書の交換を願ひます、又各地幽繪弁に案内書た送つて下さい、妾は廣島縣案内書を差上げます（廣島市尾長村植木新之助方しづよ）○皆様おむつまじく御交際遊ばさるな拜見してはこらゑ兼拙き筆もて御願ひ申侯又編物御送り下されませ先様の方十人様は婦人世界又繪葉書をお返し致します（青森縣大湊森田十五號北村平二郎方すゑ子）○皆様當地耶馬溪の繪はがきと繪葉書の交換を願ひます（豐前國築上郡千束村吉本小川藤枝）○妾は父と共に三年半ほどアメリカシヤートルに居りまして去年の十一月ごろに歸國致しました仲よく御交際をおたのみ致します神戸のものですがたゞ今は京都の女學校に通つて居ります妾の見苦しい洋装の寫眞。外國景色。裸體畵など持つて居りますからどうか御寫眞や繪葉書と御交換をねがひます。（京都市教小路通り室町西入小林方土井露江）○皆様の内で私と今後御交際下さる方は下名へ美麗に自筆でハガキお送り下さい但し男女共女子文壇。秀才文壇の愛讀者に限る（常陸國西茨城郡笠間町字石井町笹島花園子）○記者様私も諸嬢様と、繪葉書の交換を致したいと思ひます交際らん内へ御とりもちを願上ます色々御禮を致しますよ（群馬縣吾妻郡澤田村山田愛敬よし子）○必ず御返事は致しますから何卒玉章の交換を願ひます（群馬縣館林町連雀町久保廷林三郎方佐川紫子）○誠に誠にすみませんが私は外へ行かればならぬ所がありますからどうぞはがき交際をやめて下さい（紀伊國有田郡五西月村西ヶ峯長柄ともゑ子）○玉章や繪はがき交際をお願ひ申ます（紀伊國有田郡五西月村山口この子）○誌友の皆様土地の名所繪葉書何枚でも未使用で御送付下されば直ぐに當地名所か舶來か美人葉書などで相當外に御禮致ます（羽後由利郡本荘町裏尾崎町森蕗久子）○友もなく日々わびしく暮し居る者てすが何卒繪はがきや玉章の御交換をねがひます（三河岡崎康生宮田梅子）○みなさん私は甚だ賤しいものですけれど、何卒繪葉書や新聞の交換を願ひます（富山縣高岡市白銀後町二五藤田嘉作方片岡靜子）○博愛仁慈なる諸孃の君方よ妾は諸孃よりの玉章や繪葉書を以てこよなき唯一の快樂とし又慰藉として居る者ですから向後盛に御交換を切望いたします（横濱市北仲通三丁目五〇服部花子）

剽窃詩文の注意

●●●●五號の分　○上野、木暮香子。和歌秀逸「癡づたひ」は四號四等鈴木蕫子の作と同一　○上總、四の宮秋子。「思ひ出さずに」は昨年十二月本誌の名古屋原田夢子氏の作を剽窃せるものとす、

●●●●四號の分　○下谷、橋本なみ子。美文五等「植つけ」は卅九年十一月發行の『文藝倶樂部』中依田秋圃氏の作を　○渡邊けん子、和歌二等「槲かなる」は與謝野先生選『黑髪』中、中原不二郎氏の作を　○千葉縣、石井はる子。俳句二等「神の顔」は卅九年二月發行『ハガキ文學』神戸松風冷人氏の作を、何れも剽窃せるものとす。

▲▲取消　○二號滑稽談四等滋賀縣婦貴作「人込み」は剽窃の旨五號に發表せるも右は全く暗合なりと當人より申込まれ　○四號一〇一頁挿入圖畫「春の月」は今西こゆき氏作とあるも仝氏は更に覺えなしとのことにつき、右何れも發表を取消す。

今回の注意を與へられたる諸孃は　○丹後、峰子○茨城、一少女○駿河、鶯倒女○印旛、山少女○京都、幸江○神戸、霞女○大阪、桃代子○青森、石子。

▲誌友倶楽部は澤山餘つてゐますから凡て次號增刊「夏すがた」に載せます、

文壇餘興 東京（課題）

次の文壇餘興の題は「東京」と云ふのです、例の通り盛んに御投稿をねがひます
▲初めて見たる東京▲地方で想像する東京▲東京に住んで居る人の見たる東京▲東京論▲何故に東京を愛するか▲東京生活の實際談▲何故に東京に出たいか▲東京と大阪又は京都の比較▲東京の未來を想ふ▲我家と東京との關係▲其外東京に關することなら何でも一切よし▲課題「東京」と原稿に書添えること▲賞品は例號の通り▲〆切りは本月二十日

脚本募集

▲時代物世話物何れにてもよろしく一幕物の脚本を募る▲選者は佐野天聲先生▲原稿は二十四字詰凡て振假名つきのこと▲投稿締切は五月三十日▲懸賞は正金にて一等五圓二等三圓

懸賞品

（甲種）
▲壹等―金拾圓―賞金屬品
▲貳等―金參圓―呉服物
▲參等―金八拾錢―小間物
▲四等―金五拾錢―圖書切符
▲五等―金四拾錢―圖書切符

（乙種）
▲壹等―金五圓―絹張洋傘
▲貳等―金壹圓―帯止半襟
▲參等―金六拾錢―文房具
▲四等―金三拾錢―圖書切符
▲五等―金貳拾錢―圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

定價

女子文壇　毎月一回、一日發行　其外定期増刊四回發行（三、五、八、十一月十五日）臨時増刊貳回發行（四月十月例號二倍）

一冊（定期百冊頁）	前金　拾錢	郵税共　計金拾壹錢
九冊（増刊トモ半ケ年分）	前金九拾五錢	同　計金壹圓〇五錢
十八冊（増刊トモ一ケ年分）	前金壹圓八拾錢	同　計金貳圓
六冊（増刊ナシ半ケ年分）	前金五拾七錢	同　計金六拾三錢
十二冊（増刊ナシ一ケ年分）	前金壹圓〇八錢	同　計金壹圓貳拾錢

振替貯金ノ拂込は登記料貳錢増額
郵便切手代用壹割増、收入印紙謝絶

〔備考〕○定期及増刊は各拾錢郵税壹錢
○臨時増刊は貳拾錢郵税貳錢

女子文壇社の郵便振替貯金口座は―第壹七貳九番

明治四十一年四月廿八日印刷
明治四十一年五月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

雜報

○圖書の寸法　本誌募集の圖書の寸法は今回二寸に三寸と改めて大きくしましたから、其積りでお書き下さい。

○東京の大雪　四月九日櫻の盛りに東京は大雪が降りました、櫻と雪と一しよに見るなど云ふことは滅多にない事だらうと思ひます、春の雪は水分が多いから電線にからまると其重量で細い電話線など容易く斷れます、東京中で廿八萬以上の斷線がありました、それでも春の雪です、一兩日の中にあともなく消えました。

○各女學校の卒業式　前月は都下各女學校の卒業式が行はれました、幾多の新智識に富む淑女が出來たことですから、世間は欣びの情を以て新らしい卒業生を迎へたでせう。

○新聞の二作　島崎藤村氏は「東京朝日」に『春』を出し、田山花袋氏は『讀賣』に『生』を出す、新聞界の二つどき者として注目されてゐます。

○日本一の美人　時事新報で募集した日本一の美人は吉弘くに子孃に定りました、さて當選した本人は何と思ふてせう。

定期増刊　夏姿（なつすがた）　いよ〳〵十五日發行

女子文壇の廣告より御申込の節は其旨御書添を乞ふ

特許習字速成通信教授

どんなに生れつき文字の拙き方にても本會にて練習なされば僅かの間にて、先天的能書家と稱せらるゝ程に上達する事は恰も機械的であります。



特許習字の練習程面白い事はあるまい

圖の如く初めに白抜き手本文字の上を辿りて、白色の特許墨を付けて並らんで居る特許草紙の白抜き文字を見競らべて書くと直に赤色に現はれて、手本の文字と少しも違はざるは、手本と草紙とが相並びて兩者共に一視眼の中に入るが故である、尚赤色文字は忽ちに消失して元の白紙となる、それて如何なる習字嫌ひの者でも夢中て數回の練習をするので、何時上手になつたのか自分ながらも不思議の樣てある。

變體四十八音和歌、假名交り作文、楷行草三體細字共六ヶ月

卒業每月貳部發行 入會金拾錢 會費壹ヶ月參拾八錢 全期分金貳圓

見本 詳細會則進呈

○○男子部 楷行草三體書簡文細字共六ヶ月卒業

○月謝女子部と同じ別に小學部もあり

東京 本郷森川町壹番地
振替口座第六八參壹番
電話 下谷參千拾壹番
帝國習字速成學會

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 定價金拾錢 郵税壹錢

東京 秀英舎印刷